

かば、翌年其續篇として『ワイルドエヤー』を著しき。資性温雅にして容貌端麗なりしかば、女性間の評判高かりしが、遂に一少女の爲に身を誤りて窮境に陥りぬ。其の最後の傑作“The Recruiting Officer”(一七〇六)及び“Th. Beau’s Stratagem”(一七〇七)はこの間に成りき、後者は臨終の病牀にて筆を執りきといふ。一千七百七年没しき、齡僅かに三十。

一千七百二年に世に出だし、文集“Love and Business”の中に、自ら語りて曰はく、今の所謂喜劇は教誨或は懲罰の旨を知らせんとて巧みに綴りたる物語に過ぎずと。この言或は以てオレンソ派全軀の作を蔽ふに足らんか。ゴッス氏曰はく、復位期の末葉の單調無味なる劇詩中、やゝ心を慰するを得べきものはフアイクラーが作中の快活なる世界なり。赤袍白袴の一群が笑謔の聲のうち、に藜々軍樂を奏して進む様は、頗る懶眠を破るに足ると。フアイクラーが作のかく重んぜらるゝを見ても、十七世紀の劇詩の眞價は多く論ぜずして足りぬべし。

## 第四篇 十八世紀の文學

### 第一章 概論

英國十八世紀文學の區域——其の前期——其の後期——英國のオーガ

スタス時代——擬古文學時代——當代の諸作家——グラブ街の窮才子

——社會の状態——散文々學の興隆——散文詩(小説及び歴史の興隆)

——劇詩界

紀元一千七百年前後より同七百八九十年ごろ乃至十九世紀の始に至るまでの間を、通例、文學史上より觀たる英國の十八世紀となす。エドマンド・ゴッス氏は、其の前の名著『英國十八世紀文學史』に於ては、内亂期の諸名家をも併せ叙するの便宜上より、特に此の通例の區域を擴張し、一千六百六十年以後に屬するものをば、悉く十八世紀の文學中に攝したりしが、其の近著『近世英國文學史』に於ては、はじめより十八世紀文學といふ名稱を棄却し、ほゞ同紀に相當する年代間をば、二期に分ち、前期をアー、ン時代、後期をデ、ン、ソ、ン時代と命名せり。前期は一千七百年(即ちド

ライデン逝去の年、アーン女皇即位前二年)にはじまりて、同七百四十年(即ち當代の詩王アレクサンダア、ポーア死後四年)に終る。後期は一千七百四十年にはじまりて同七百八十年(即ちジョンソン死前四年)に終る。我が國の史に照らせば、五代將軍綱吉の治世、元祿十三年、即ち水戸光圀薨去の年に始りて十代將軍家治の治世、安永九年、即ち加茂真淵死後十一年、『群書類聚』の成りし前二年に終るとなる。

按ふに、此區劃は當代に於ける思潮の特質と文運の消長とに基きたるものなれば、從來用ひ來れるアーン時代の文學、英國十八世紀文學などいふ甚だ漠然たる若しくは名と實との相稱はざるものを襲用するに比すれば、精確に於て勝る所あるや勿論なり、然れども予が本講義の組織より云へば、さすがに其の儘には此の區劃に従ひがたき節もあり。又十八世紀と十九世紀との界線は、必しも峻劃せざるを可とすべき理由もあるが爲に、しばらく舊來の通例にならひて、態と漠然と一千七百年前後より一千八百年前後までを文學上に謂ふ英國の十八世紀となす、而も前後の二期に分つことは、思潮を説明するのみに於て、必要なるのと信ずれば、アーン時代、ジョンソン時代の名は、下文に屢、借り用ひぬ。但しゴッス氏と異なる所は、其の年數

を細定せざるにあり。

前期、即ちアーン時代は、或は之れを羅甸文學の全盛期に比して英國のオーガスタス時代など、誇稱せられしこともありしが、それは溢美の名たるや勿論なり。

夫の羅甸文學全盛期たるオーガスタス時代には、先づヴァアルあり、ホレリスあり、其他眞詩人を以て目すべきもの北斗の如く輝きしと同時に、上には詩眼ある賢君主オーガスタス帝の懇に詩文人を推獎保護するありしかば、一代の文華燦然として古今に驕れり。然るに、所謂英國のオーガスタス時代に至りては、其の趣痛く之れと異なれり。當代の英國王アーンは、孱弱の一老婦のみ、才徳双つながら平庸にして、風流の鑑識の如きは其の最も乏しとする所なりき。加ふるに、社會將た名利にいそがはしく、文學を文學として愛好し、美術を美術として賞翫する風尙の如きは、殆ど蕩然として上下に空しかりき。オーガスタス時代の名は、當期の文人等が自畫自賛に出でし僭稱のみ。

十八世紀は、就中其の前半期は、又名づけて擬古文學(尙古)の時代といふ。こは、前稱にくらぶれば、頗る能く當期の特質を穿ち得たるものなり。何となれば、彼の

ライオンが一千七百年に世を辭せしと共に、英國の文壇は、劇詩人以外に殆ど一の  
 創才ある作家を剩さざる有様となり、創作も、批判も、一に前古希臘羅馬の古文學を  
 推尊し、蹈襲するの風を致し、彼のライマー Rymer 一輩が唱道せし佛蘭西流の修辭說、  
 文學論(くはしくいへば、アリストートルの美文學論を一知半解せるラーバン Rapin、  
 ルボッス - Le Bossu 等の說)一世を風靡し、擬古的思潮は、彼のアレクサンダア、ポーア  
 を得て其の最高處に達するに至るまでは、しばらくも停止する所なかりしゆゑな  
 り。按ふに、此の擬古の風潮は、一面は明かに英文學を裨益して、之れを洗鍊し、之れ  
 を琢磨し、後の十九世紀文學の素地を成したりしや疑ふべからずと雖も、尙其の當  
 代に於ける直接の作用を檢すれば、裨益は必しもゆたかなる能はずして、弊害は常  
 に甚からざりし趣あり。蓋し、煩瑣なる修辭の法則が、氣鋭の創才をも拘束して、刻  
 鏤彫琢の末技にのみ專念せしめたりしなり。されば詞句の精選と風調の烹鍊と  
 は、前古殆ど其の比類なく、抒情の詩や、狀物の文や、筆は微を穿ち細に入りたれど、惜  
 むらくは、創新の氣と自然の致と自由の趣とには貧なり。試にポーアが作の一節  
 を取りて諷誦せよ。其の調格は閑雅優美を極め、譬へば水晶盤上に珠玉を轉ずる

が如き概ありて、其の甚妙なる餘韻は長く耳の底に残り留るを覺ゆれども、更に深  
 く翫味すれば、興趣漸く薄らぎゆきて、其の思想の淺露と其の感情の浮泛とは、到底  
 蔽ふべくもあらざるなり。一代の詩宗已に此くの如し、他はまた謂ふに足らず。  
 彼等の多數は、様によりて胡蘆を書くもの、感激する所あるが故に作せしには非ず  
 して、言は、或作詩の型を得て有りあはせの感想を填充したりしのみ。我が題詠  
 歌人、月並俳諧師の所爲と多く相擇ぶ所なし。其の詩として價値の貴からざりし  
 は、さもあるべきことなり。さもあれ、同じく十八世紀とはいひながら、其の後半  
 期に至りては、トムソン、グレイ、コリンズ、ブレイク、クーパー、パアンズ等相ついで輩  
 出し、おの／＼自然の美を寫すに思を凝らし、人心の誠を表するに重きを置き、大に  
 詩風を刷新せり。但し、これすらも、嚴密にいへば、新詩風の萌芽たるに止まり、全然  
 擬古習氣を脱したる眞の醇乎たる新韻は、後の十九世紀の諸詩人、ウオヅテオス、コ  
 ーリリッチ、シェリー、キーツ等の傑作を俟ちて世に布傳せらるゝに至りたり。要するに、  
 擬古時代の名は名譽の稱呼にはあらざるなり。  
 さもあれ、今且らく内質の月旦をば後にして、單に名家の數と名著の量とよりいへ

ば、十八世紀の英國文壇は、決して昌盛ならざりきとはいふべからず。其の作家の錚々たる者を擧げんに、詩壇にはアレクサンダー、ポープ出で、一世を風靡してより、ゴールドスミス、グレイ、ブレイク、トムソン、コリンズ、ヤング、バアンズ等相ついで競ひ起こり、散文界にはアヂソン、スキャフト、スチール等をはじめとして其の學識、見によりて騷壇の霸權を握りし博士ヂンソンあり。デフォー、リチャードソン、フィールディング、スモレット等は英國小説の基を開き、ヒューム、ギョノン等は歴史家として、バーク、シエリダン等は政治界の文士として、おの／＼稀有の名を文學史上に止めき。其他、彼の **グラッブ街** に群居せりし小詩人、所謂文壇の窮才子に至りては、殆ど枚擧するに遑あらず。

かくの如く詞客、文人の輩出せしは、文學の漸く一種の職業視せらるゝに至りし自然の結果にして、十八世紀文學の得失はた此の點に存するなり。當時は印刷の術、出版法なども著く進歩したりしかば、新聞紙、雜誌類は此等小文人の爲にだに紙面を割與し、其の述作の屑々たるものすらも屢、世に紹介せられき。さりながら、文人の甚だ貧賤なるものに至りては、權門に拜趨して庇護を受くる手蔓を有せざるの

みか、其の才多くは謫劣にして、清新の作を著述するの才もなければ、只尙古思潮の盛んなるを機として、漫りに古文書を取りて註釋し、若しくは粗笨杜撰なる譯に從事し、或は書狀の代筆、看板書きなど、種々の筆耕業に従ひ、些少の潤筆料に辛くも其の口を糊し、たま／＼多く金錢を得ることあれば、直に馳せて酒樓に上りシャンパン酒、トケイ酒などに酔を買ひ、意氣昂然として分外の奢侈に耽り、榮華をほしいままにす。かくすると數日、忽然として囊底空乏を告ぐるに至れば、また四層樓上の假寓に蟄居し、惘々然として曩日の豪遊を夢み、日暮るれば敝衣破帽悄然として街巷を徜徉し、徒らに車上の人を羨み、料理店の前に立ちては佳香に垂涎し、珍味の口に入らざるを歎じ、僅かに二三錢を懐に探り得て茶亭の一隅に咖啡を啜り、以て一時の口腹を慰む。前日の得意と後日の失意と、實に霄壤の差ありしなり。當代の詞人文士此の類ならざるは稀なりき。之れを **グラッブ街の窮才子** となす。かゝる輩の塵懷焉ぞ高雅の妙想を藏めんや、彼等は皆名利に醒醒するの徒、文界の寄生蟲に外ならざりし也。蓋し當時の文人が、かくまでに墮落せしは、其の氣概なく、常操なかりしにも由るといへども、一は亦た時勢の然らしめし所なり。

つらく千六百八十八年の革命後の社會の狀態を見るに、紀綱紊亂して法令行はれず、賞罰當を失し、上流社會は日に腐敗し、下等社會も亦た卑陋、猥雜、殘暴の極に沈めり。時の大臣等、就中ロバート、ウォルポールの如きは、只管卑劣なる籠絡手段をめぐらし、賄賂を以て國會議員を操縱するを最上の政策とし、治國の能事かくの如くにして畢るとなせりき。上の好む所、下更に甚しきものあり、すべて政治家は苞苴の受授を尋常事となすに至り、人に愛國の誠なく、節義を重ざるの念なく、宗教家を以て任ずる者も、大概は虚儀是れ事とし、人倫の大義は棄て、顧ず、敗徳を犯し、醜行をなして愧づる色なかりき。政教の壞亂實に斯くの如くなりしかば、口に筆腕に、政治上の卑劣なる鬭争不斷に行はれ、詩歌文章もまた其の一具に利用せらるゝに至れり。堂々たる文壇の名家すらも、概して此の風潮に捲かれて、或は保守黨に屬し、或は改進黨に屬し、單に一政黨の一時の主張の爲に詩文を作ること流行せり。彼のスキャットの『ガリヴァー巡島記』、アチソンの『カトー』の如きだに、一方よりいへば、政治上の寓意あるが故に喝采を博せし也。彼の嘲世諷俗の詩文の流行せしも同じ精神に胚胎せしに外ならざるなり。而してさばかり嘲世諷俗の文の流

行せりしは、偶、以て當代の腐敗と墮落とを證するに足るなり。何となれば、諷世嘲俗の文章は、取りも直さず、自家の時代、自家の社會を侮辱したるものなるに、其の文字を讀みても發憤せざる社會は、自家を嘲けられて平然たる社會なり、即ち自家の虚偽、自家の耻辱を笑柄となして怪しまざる厚顏の社會なればなり。蓋し、當代は個人を主とし、人身攻撃を旨とせし時代なり。又俱樂部クラブ、集會類コンヴェンションの全盛期なりき。而して此等の小團體、小黨與は、相協力して奎運の進歩を圖りしかといふに、さにはあらで、互に偏執し、割據して、區々たる小名利を争ひあひしに外ならず。彼の無要なる古今文學優劣論といふ閑辯論の、一時文壇を騒がせしが如き、閑文壇の痴態を表彰するに足れりといふべし。されば、學者が理を研究すといふも、眞理其の者の爲に眞理を攻究せしには非ず、詩文人が詩文を愛すといふも、文學其の者の爲に著作に熱中せしには非ず。宗教家の如きすら、天道又は聖教の爲にせずして、私利私黨の爲にせし者比々是れ也。酷評すれば、十八世紀は憎怨、嘲諷、輕蔑の盛に行はれし時代也。此の故に當代の詩文人は、動もすれば、他の缺點、短所のみを評きて、其の美を看過し、警句をもて他を嘲罵するをのみ得意とせり。十八世紀は自負、自慢

爲我利己の時代也個人としては、自家を獨り尊しとし、社會としては、當代の社會を獨り尊しとなし、時代也。愚くとも、眞摯幽玄なる詩歌の乏しかりし時代なりき。就中、其の初期に輩出せし詩人は、おしなべて韻語家即ち修辭家也、眞に詩の神髓を解し、詩人の天職を意識せしものは殆ど無し。

さもあれ、以上は主として十八世紀の醜所に就きて觀察したるなり。其の美所もまた無からんや。美所とは何ぞ。散文々學の發達は是れなり。

按ずるに、第十七世紀の末に至るまでは、詩歌、即ち律語の文學は、常に英國文學の主位をしめたり、散文の文學の如きは、僅に詩歌に附隨して徐々の進歩をなし、のみ。ウィックリフの譯筆や、ベーコン、フッカーの論文や、妙は即ち妙なれども、之れを詩境より論ずれば、チーサー、シークスピヤ又はスペンサー等に及ばざること遠かりしなり。換言すれば、純文學の神髓たる想像の妙趣は、概ね常に律語を以てのみ發揮せられたりき、散文に至りては、毎にたい平明質直なる思想を表白するの具たるにといまれる趣ありき。然るに、この趨勢は、第十八世紀の初期より漸變し、擬古熱の盛なると共に、韻語はむしろ機械的技術となりゆき、詩歌の神髓は却りて他の散文學、

即ち彼のアヂソン、スワフト等の創新なる散文中に吸收せられんとするに至りぬ。これ所謂散文詩小説の勃興せんとする前兆なりき。デフォーは實に此の氣運に鼓吹せられて出で、而して英國寫實小説の曙光輝きそめ、リチャードソンついで出で、所謂心理小説の胎子成り、ついで十九世紀に至りてスコット、 Dickens、 サッカレー、乃至ショールズ、エリオット出で、長足の進歩をなし、やがて英國の文學は、詩歌、散文の兩面双つながら全きを得るに至りたり。但し、其の初め西班牙に行はれし冒險譚を換骨奪胎してファイルディング、スモーレット等の爲に新小説の新途を開きし者は、佛の作家ル、サーン (Le Sage) なれば、佛の散文詩は英の散文詩の祖たりしこと事實なり、而も佛の批評家等は痛く英の新小説を歓迎し、頻に其の出藍の功と妙とを稱しき。

**歴史的文學** も亦當期に著く進歩せりき。佛、伊、兩國人は、從來傳記、史論の述作に名ありしかど、今日所謂歴史の本分の歐洲の文壇に實現せられし端緒は、當期の英國史家ヒューム、ギボン等に負ふ所多しといふべし。ヒュームの『英國史』、ギボンの『羅馬衰亡史』出で、後、歐洲の修史事業は面目を一新せりといふも過言にあらず。

其の他、哲學、科學上の實用を旨とする論文だに、漸次其の面目を改め、ペーコンの典雅、ロックの質實、ドライアンの暢達より進んで、雅馴にして明晰、遒勁にして精嚴なる通用文體を醸成するに至りぬ。

散文文學のかく著く發達せしに反して、韻語文學の衰頹せしことは、前にもほのめかせる如くなるが、**劇詩界**の凋落に至りては、更らに一段甚しきものありき。蓋し、これより先き、一千六百六十年の王政恢復より一千七百年に至る四十年間に於て、英國の劇壇は前十八年間興行を禁ぜられたりし反動にて大いに盛運を來たし、彼のコンクリーヴ、オトニー等各、一派をなして斯界に樹立し、新作乏しからざりし由は第三篇の末にも叙したるが如し。然れども、その喜劇は彼のエリザ朝に行はれし人情の上の滑稽を失ひ、單に舉動容姿の上の可笑味を主とすることとなり、隨うて清淨教徒の嫌忌を受けて禁止せらるゝに至りしかば、一千六百九十九年には歐洲中にて喜劇作者の多きに誇りたりし英國が、それより僅か十年の後ちには、喜劇の命脈をば、たゞヴァンアル、シッパア等によりて、辛く一縷の危きに維々に過ぎぬ有様となりき。かくて十八世紀の劇詩界には専門の作者跡を絶ち、平凡無修養

の文士が折々に作を試むるまでのこととなりしかば、隨うてその貢獻する所甚だ少く、纔かにゴールドスミス、シェリダン等がコンクリーヴ、ウィッチェリー等の作を修正し、多少の脚本を綴りしに過ぎざりき。要するに、十八世紀の前半は、詩歌の暗黒時代なり、而して劇に至りては、後半に及びてだに、振興の兆を現せざりき。

## 第二章 アザソンとス井フト

前期の二大文章家——其の異同——アザソン——其の畧歴——其の著作

——其の特質——其の文致——ス井フト——其の生涯——其の著作——  
『植物語』——『ガリアア巡島記』——其の特質。

此の詩歌不振の時代、何れかといへば、常識獨り榮え、散文最も興隆せし詞壇に、諷刺家として、評論家として、鐵中錚々の譽ありし者を誰れとかなす。曰はく、アザソンとス井フトと、是れなり。二人は實に十八世紀前半の龍虎なり。二人の相似たるは其の位置のみにあらず、博學多才にして文章を行るに自在なる、人を啓發し感動するに妙を得たる、常に黨派心を脱すること能はざる、亦た共に殆ど其の傾向を同じうせり。而も、其の閱歴と性癖とに至りては、古來此の二家の如く相乖戻す

る者は甚だ稀也。蓋し、アヂソンは當世の寵兒にして、スヰフトは當代の憎まれ見なり。前者は多幸にして後者は薄命なり、前者は温厚にして後者は酷薄なり、前者は優雅にして後者は粗厲なり。前者は人間を愛憐し、後者は人間を憎怨し、前者は其の最も美なる時には君子の如く、後者は其の最も醜なる時には人面の悪魔の如し。

ヂェフ、アヂソンは、一千六百七十二年五月我が朝靈元天皇の寛文十二年、伊藤東涯時に三歳ウヰルトシャヤに生まれき、一牧師の子なり。幼にして、其の後年の信友スチールと共に、チャータアハウスにて學業を受け、十五歳にしてオックスフォードなるクイーンズ、コレヂに入るに及び、夙に羅旬語をもて韻語を綴りて詩名ありき。卒業の後幾ばくもなく、國王ウイラムの徳を頌する詩を作り、其賞として一年三百磅の年俸を得たりしが、やがてまた大陸地方漫遊の旅費をも賜はりぬ。アヂソンが嫺雅優美なる本性と富贍圓美なる文才とは、歐洲に於ける最も文華なる國、伊太利、佛蘭西の歴遊によりて、更に其の圓美都雅の致を加へき。

アヂソンは爲人寡黙恭謙にして、何事につけても他人と争ふを好まざりき。され

ば政治論者としては改進黨自由の主義に熱中したりしにも拘らず、曾て其の反對黨をだに痛撃せしことなければ、如何なる黨派にも憎惡せらるゝに至りしことなく、改進黨派大敗の秋にすらも衆議員議員に選舉せられし程なれば、改進黨全盛の際には、累進して國務總官の高官にまでも經上りにき。こは必しもわざと主角をけづり去りて敵を作らざるやうに力めたりし故にはあらじ、其の温雅寛厚なる品性の自然にして然らしめし所なるべし。

アヂソンは讀書述作の人、觀察冥想の人なりしゆゑに、其の一生の事歴は、其の著作以外には、また多く記すべきことなし。彼れは一千七百十六年に、某素封家の未亡人と結婚し、其の翌年國務總官に擧げられ、同十九年病に罹り、ケンシントンなる邸内にて逝りぬ。時に齡四十八歳なりき。其の詳かなる傳記は、一千八百四十三年にルシー、エーキン Aikin が著はしたるを最とすべし。"A Life of Addison"と題したるものは是れなり。彼のマコーレーが有名なる「アヂソン論」を物せしは、該書を批判せる序なりき。近きころの編述に係るものうちにも、其の良き傳記からず。

アヂソンが著作のうち、其の名高きが爲に若しくは眞に傑出せる價值あるた



めに、ともかくも一讀過すべき要ある者は、ほゞ下の如し。先づ韻語の詩人としての其の伎倆を窺ふべき料は(一)其の二十二歳の作『ドライデンに與ふるの歌』なり、こはドライデンを激賞せる韻語の評論とも稱すべし、但し、詩としての價値は乏しき作なり(二)伊のプアツルが作『Fourth Georgie』の一部分を翻譯せるもの、これ將た其の詞才を窺ふに足るのみ(三)伊國滯在中にハリファックス卿の許へ送りし書簡牒の詩(四)時の將軍マールボローが戰勝を讚美せる『ゼ、カムベーン』(五)『ロザモンド』と題せる伊太利風の樂劇(六)『カトー』と題したる古劇風の悲劇などなり。此のうち『カトー』は一千七百十三年に作せし苦心の作にて、三十五夜間打通せし程に當時の劇場にては成功せしものなり。『ゼ、カムベーン』の如きも、其の當時には、痛く世間を憾かし、名作なりき。

散文家、批評家としてのアヂソンの伎倆を窺ふべき著述は、一千七百〇九年に其の友スチールを幫けて執筆せし『タットラ』といへる定期刊行物に掲げたる諸雜筆、及び同十一年に同じくスチールと共に(但し、此たびは其の主筆となりて)發刊せし『スペクテーター』の諸論說、記事、華文、諷刺文等なり。『スペクテーター』は

英國通俗雜誌の最古なるもの、一たると同時に文學趣味を俗間に弘傳せし開祖なるべし。毎朝の發兌にて、五百五十五號まで續きたりき。該誌に載せたるアヂソンが文章は、眞に種々雜多なりき。堂々たる長き論文もあれば、をかしき滑稽の諷刺文もあり、考證に類するや、乾燥なる取調もあれば、今の端物小説に似たる短き物語もあり、輕妙なる寓意譚もあれば、風流洒落の論說もあり、假に種々の人物を作り設けて、そを眞に實在せる人の如くに狀寫し、殆ど寫實小説を讀むが如くに思はしむる文もあれば、嚴肅なる倫理を談じて、讀者をして襟を正さしむるに足る文もあり。而して此の千變万化の論文、諷刺文、比喩談、戲文等はいづれもとどろく、面白きなかに、取りわけて玩味べきは、サア、ローシャア、デカヴリといふ一紳士に關する諸篇、マアザの夢と題したる寓意談、ミルトンを評論して『失樂園』に及べる長篇予が嘗て『英詩文評釋』中に訓釋せる數篇、乃至頓智滑稽をなけば遊戯的に評論したる諸篇などなるべし。

アヂソンの文章は、優美雅潔の致を極めたり。彼れの文を草するや、一語苟もせず、毎句毎節の權衡をして十分に音樂的節調に叶はしめんと苦心し、每辭每章、一

の冗音なく、一の冗彩なく、重濁の失なく、輕浮の弊なく、婉轉滑脱のうち高雅沈靜の概をも寓せしめんと力めたりき。其の結果、雅馴と優美とを得たりしかど、優美の極は平淡となり、平淡の極は、往々にして、平板乾枯に流れたり。筆にも、想にも、熱に乏しきはアヂソンが缺點なり。テイヤはアヂソンを評して曰く、彼れは説話者なり、目撃者にあらずと。げにや、アヂソンは説話體の達人なり、彼れは喜怒哀樂せずして人間百般の出來事を語り得たり。テイヤはまた曰はく、アヂソン等擬古文人は、作らぬ誠と鋭き創意とを重んずることをせずして、偏に麗しき排置と善美なる秩序とを受すと。此の評は動かすべからず。アヂソンは其の作就中詩に於ても、其の論評に於ても、餘りに規律に拘泥せり。

アヂソンは専ら散文の名家として推重すべき作家なり、彼れは韻語を能せざりしにあらざれども、彼の燃ゆるが如しといふ抒情詩人的情熱無し。上は其が詩人としての聲譽を博せし處女作『カムベーン』より、下は其の得意の樂劇『ロザモンドの悲劇』は勿論、『カトー』及び其の寓意的華文の傑作『マアザの夢』に至るまで、一として技巧的ならざるなし。是れ一は其の鑑賞の標準の高上ならず且つ創新ならざりし

にも因れど、一は擬古を第一とせし時尙の影響なり。彼れはドライデンをこよなき詩人の如く激賞せりき、其の尤も歎服せりしはドライデンが翻譯の技倆なりしが如し。要するに、アヂソンの長所は、其の觀察の穩健にして精細なることと、其の措辭行文の巧妙雅なることとなり。其の觀察はすべて具象的にして鑿々據る所あり、彼のペーコンの如く抽象的ならず、隨うて其の文章もまたペーコンの如く雅に失せずして俗に通じ易し。是れアヂソンの特質にしてまた十八世紀文學の特質なり。

アヂソンは博學多才なりしのみならず、廣く人情に通じ、世故に老いたり。彼れは人を娛樂せしむると共に、人を啓發し、獎戒するを目的とせりき。現に其の傑作『スベクテートア』の如きは、大不列顛領外へ、醜徳と無知とを驅逐するを主意として發せし雜誌なり。さるからに、アヂソンの論文は、一として修身齊家の訓言ならざるはなく、温和なる嘲世諷俗の文字ならざるはなし。彼れは野を憎みて雅を愛し、利慾を斥けて義務を獎勵せり。されど其の論ずる所、詮ずるに、悉く現世的、實際的にして、曾て幽遠深遠なる能はざりき。其の宗教思想の如きも、また殆ど俗臭を脱

する能はずして、屢、未來世を語るも、曾て現世間の幸不幸を忘れざるなり、要するに、未來を餌として現世の善行を奨誘せんと力めたりしに外ならざるが如し。彼れは曰はく、今世に於ける人の務は知るにあらざして行ふに在り。其の實踐躬行を旨としたる、如何に儒學の旨に似たるかを見るべし。又曰はく、

哲學を天上界より取りおろして人寰に扶植したるは我が力なり、ミソクラチーズは云へりしが、我れは又その書齋、圖書館及び大學校より取りいだして普通人士の茶席、酒席に移したるは我が力なりといふを憚らず。

と、眞に然り。テームは此の點よりアヂソンの思想の高からざるを誹りたれども、俗を誨ふるを目的としたる通俗雜誌の記者としては、蓋し已むを得ざりし所ならんか。テームは曰ふ、アヂソンの修身論は、道義をして一種の流行物とならしめき、是れ瑣事にあらずと、こは其の通俗の諷戒の當代に尠少ならざる效ありしを稱するなり。

アヂソンの散文家としての盛名は、近年に至るまでも英米の文壇に轟き、隨うて『スベクテートア』の功績は殆んど悉くアヂソン一個人の功績の如く見做され、其の信友たり、同輩たりしサア、リチャード、スチールの文名は、爲に蝕盡せられたる觀ありし

が、近年に至りて批評壇に種々の反動起こりしと共に、スチールの文名大に揚がり、今の批評家中間、アヂソンを抑へてスチールを揚げ、前者の筆は洗鍊なるも、彫琢に過ぎて巧に失したる跡あり、スチールの文の瑕疵あるも、眞摯爛熳、天真のまゝなるに如かず、と評する者あり。げにや、アヂソンの文は雅健なれども、自然と洒脱とは、或はスチールに一步を譲るべく、而して其の警拔と創新とに至りては、遠く左に語らんとするスヰフトの下にあるべし。

或は曰はく、アヂソンが文章の大いに見るべきに至りしは、彼れがスヰフトの『桶物語』を熟讀したる後ちにありきと。或は然らん。彼の奔放自在の想像を馳せて滑稽諧謔のうち、諷刺辯難を擅にする一躰は、正しくスヰフトの創始に屬す。

當代の最も驚くべき人物として、又最も創才ある文豪として、雷名を後世に傳へたる ジョナサン・スヰフト は千六百六十七年(我が朝靈元天皇の寛文七年、荻生徠二歳、新井白石九歳)に生れて、千七百四十五年にみまかりき。(我が朝にてはこれより三十四年を経て平賀鳩溪歿したりき) スヰフトは或は大愛蘭士愛國家など稱せらるれど、其の血統の上よりいへば、同國の首府ダブリンにて生れたりし一事

の外は、愛蘭土に何等の縁故もなく、父母共に英國の人なりき。スヰフトは不幸にして、其の出生前に父を失ひ、生まれて幾程もなきにまた母に離れ、叔父某の手に養はれて生ひたち、やゝ長じてダブリンなるトリニチー大學トリニチーに入りたりしが、數學の成績あしかりしかば、四年間修學したれども、バチェローアバチェローアと成ること能はず、更に三年の間學を修めて、辛くも假得業生たる許可を得たりき。一千六百八十八年、其の叔父をも失ひければ、母かたの縁者にして時の政治上に勢力ありしサア、ウ、ルヤム、テムプルが邸に寄食せりき。そのころ、希臘の詩風に倣ひて、若干の韻語を試み、所謂“Pindaric Odes”四篇をもつて、其の親族にして當代の詩宗たりしドライデンドライデンに示しけるに、ドライデン之れを一讀して斥けり。爾來スヰフトはまた敢て詩に熱せず、専らその心を教會に向けたり、心竊かに監督長大僧正の地位を得んことを望みたりしなり。已にして其の主テムプルと善からず、乃ち去りて愛蘭土に赴き、コッノアといふ處の牧師職に在りしが、不如意漸く加はりて、衣食の資にすらも窮するに至りしかば、止むを得ず耻を忍びて英國に歸り來り、罪を謝し、憤を吞んで、再びテムプルが邸に寄食せしが、燃ゆるが如き功名心を包みたる自尊傲慢の心は爲に

益、平なる能はざりき。然るに後幾ばくもなくテムプル病逝するに及びて、幸運漸く廻り來り、スヰフトは圖らずも其の遺産の分與を得て、幾分か生計上に便益を得たり。しかのみならず、判官バアクレーバアクレー卿の侍僧に擧げられて愛蘭土に赴くに及びては、邸地及び莊園をも給せられ、其の名もまた漸やく世人に知らるゝに至りたり。又一千七百〇一年には、ドクトルの學位を得たり。其の政治論者として公生涯に現れ、種々の政治論及び諷刺文に一世を驚倒せし仔細の事實は、今こゝに叙すること省き、只其の傑作二三に就きて其の作家としての特質と、其の憎人主義の片影とを窺ふべし。彼れが壯年の傑作は“Tale of a Tub”タール・オブ・ア・タブと“Battle of the Books”バトル・オブ・ザ・ブックスとなり。

但し二者共に匿名の出版なりき。スヰフトが憎人主義憎人主義は、夙に其の幼時に端を發し、其の寄食時代に發達し、其の失望と不遇とによりて増長し、遂に甚だしき狂暴と残忍とに流れたりしが、はじめて政治論壇に現はれしころは、比較的にいへば、彼れが一生の得意時代にして、才思想像は沸くが如く、識見はた方に成熟せる時なりしかば、彼れの本性を窺ふべき作は却りて此の頃の著述にあるべきなり。たとへ其の偉大なる特質は、當時の諸著に於

しては見るべからずとするも、其のさすがに本來の悪魔にあらずして一面愛すべき品性をも具へたりし證は、此の第一期の作に於てこそ徴すべきなれ。

『桶物語』"Tale of a Tub" はスヰフトが傑作の随一なり。老後、みづから此の著を評して曰はく "Good God! what a genius I had when I wrote that book!" 嗚呼、我れは何等の秀才なりしぞや、彼の書を物せしころにはと。評し得て的當なり。まことに是れスヰフトが才氣の旺盛せりし時の作なれば、讀む者其の落想の斬新なると其の筆致の輕妙なると其の諷刺の深刻なるとに感歎し、一たび之れを繙く時は卷を措くに忍びずして轉、其の短簡なるを惜まんとす。此の書は種々に分段せられて説話間、岐路に入りたれば、其の實物語と名づけんよりも、むしろ一種の論文とも名くべきものなれども、本來諷刺を主腦として作りたる寓意譚なるがゆゑに、桶物語とは名けたるなるべし。桶物語とは當時水夫の間に鯨魚を避くる爲に桶を投ずるのならばしありしに因めるなりとぞ。按ふに、桶は即ち此の論文を指し、鯨は暗に當代に瀾漫したりし宗教上の懷疑主義を指し、而して本船其の物は時の英國正教會に比したるなり。蓋しスヰフトは此の一小桶を正教會の爲に投じ、よりて以て其

の歡心を買ひ、鯨ならぬ監督長の榮職を漁獲せんと期せりしなり。物語の本文は第二段よりはじめれり。其の發端の大意に曰はく

一父あり、其の死ぬるや、其の三子ヒータア(羅馬教會に比す)マアチン(英國教會に比す)及びジャック(背國教徒に比す)に遺言して、其の遺産を遺したり。然るに此の三子、世の流行に動いされて、おの／＼ほしいまゝに遺言の義を解釋し、遂には悉く家風を破り、三様の服装、三様の生活、相争うて止むことなし。其の中尤も穩當なるはマアチン、云々。

基督聖教の正旨を老父が遺せる衣服に比し、三種の教派を三兄弟に作り做し、其の特殊の性行を叙して、暗に三教の長短を評する所、奇想百出、滑稽沸くが如く、筆鋒銳利、或は羅馬舊教會を罵倒し、或はカルビン宗派を嘲殺し、兼ねて全社會を諷刺し來たる、眞個有數の奇著といふべし。或はかゝる作を名けて諷諭的戯文とも名づくべし、文章はあくまでも古物語の跡を模して嚴肅なれども、旨意は悉く嘲諷なればなり。但し、此の『桶物語』の妙は、其の實本文たる寓意譚其の物にはあらずして、むしろ著者の所謂岐路談にあり、こは實にあらゆる當時の専門家學者輩を諷刺冷嘲したるものにて、明かに後ちの『ガリヅア巡島記』の先驅なり。而してこの書の出版せられしは一千七百四年のことなれど、その脱稿せしはそれより七年前なりきと

いへば、第十八世紀の散文學の門戸は、まさしくスヰフトの手によりて開かれしかの觀あり。

『書籍の戦争』"Battle of the Books"も、また同じころの戯作にして、こは其の主ウイラム・テムプルの爲に著し、ものなり、即ち文學上に於ける古人と今人との優劣に關して當時の文壇に一大閑争論の起こりし時、例の得意の筆を揮ひてテムプルの説を辯護し、古人を褒め、今人を嘲りて此の作をなせり。前の『桶物語』に比ぶれば、其の旨味幾段か下りたれど、諷嘲の筆の妙はこゝにも見るべし。

さて、上にも已にいへる如く、スヰフトが半生の大目的は、ひとへに監督長(大僧正)の榮職を得んとするにありけるが、件の『桶物語』の銳利激烈なる諷刺は、八面に敵を襲し、羅馬教徒、背國教徒はいふも更なり、彼れが力めて其の歡心を得んと欲せし英國教會の僧官すらも多少の惡感を抱くに至りしかば、其の宿望は遂に水泡に歸し、僅に愛蘭土なるセント・パトリック院の副監<sup>デ</sup>牧師たるに甘んぜざるを得ざることゝなりぬ。按ふに、是れもスヰフトをして憎人、怨世の念を増長せしめし一因なるべし。さてまた政治上にては、はむめは時の在野黨、即ち民黨に左袒し、そが爲に筆を揮ひ

しことも屢なりしが、中ごろ變心して専ら保守黨在朝黨を幫けたりき。これ皆其の功名心を満足せしむるの階段を求めしに外ならざれば、主義として何等の確守する所あるにあらざりき。而も其の政府攻撃の筆の激烈なる、眞に驚くべきものありしなり。彼の愛蘭土國の爲に、ドレーヒヤアといふ假名にて、七篇の書翰牒の論文を草し、之れをダブリンの新聞紙に掲録せしめて、一世の視聽を聳動せしが如きは、其の一例なり。こは新銅貨の發行に反抗して愛蘭土の利益を擁護せし有名な論文にして、其の諷刺冷酷を極めたり。愛蘭土の民心爲に甚しく激昂し、一時はスヰフトを其の守護神の如く崇めきといふ。其の頃スヰフト其の知人なにかしに謂つて曰はく、我れ若し一指を擧げば、英の内閣は粉塵とならんのみと、而してこは假空の大言にあらざりしものゝ如し。

スヰフトが眞の傑作は『ガリヴァ巡島記』なり。こは一千七百二十四年より同三十七年に至る十三年間に成れるものにて、其の五十七歳の時に着手せる作なり。此の著は、シーの評したる如く、人間全体を諷刺したる廣大の作なり、固より私<sup>わたくし</sup>の憤怨の爲に個人を攻撃せる形跡もほの見ゆれど、今日の讀者より見れば、此の著

の面白味は主に其の全軀の諷刺にあり、尠くとも人間の暗黒面は常にかくの如く見らるべしと信ぜらるゝ點にあり。換言すれば「ガリヴァ巡鳥記」は、恐らくは長永に除き去る能はざるべき、我が人間界の醜惡陋穢なる方面を餘蘊無く描破したる作なりと評すべきなり。之れを一種の小説として見れば、其の寫實的結構及び其の寫實的狀寫の筆の周細精緻にして、殆ど一毫の微をも遺さざるが如きは、下に「小説家」の章下に語らんとする「デフォー」が「ロビンソン、クルソー」と伯仲の間なり。其の文辭の質樸平淡にして冷靜なるところも、また頗る「デフォー」の筆に似たり。但し「デフォー」は、あるらしき事を多少實驗を材として、げにもあるらしく、書きいだしたれど、「スウィフト」は世にあるまじきことを、例の深刻なる想像によりて、げにもあるらしく、寫しだせり、兩作家の技の一ならざるは、之れによりて見るべきなり。

「ガリヴァ巡鳥記」は前後四篇より成れり。其のうち、身長僅かに六寸弱の人種の棲める、小人島の巻と、身長六十尺以上の怪物の棲める、巨人島の巻とは、人間界の事物例へば、官爵、名利、等の、如何に些屑陋劣にして取るに足らざるか、及び人間以上の物の目より見れば、あらゆる人間の行爲、智力上及び体力上の諸行爲の、如何に憫笑すべ

きものなるかを、例の奇想天來の筆を以て縦横に諷刺せるものにして、二者共に同一諷刺なれども、其の諷刺の鹽梅は、さながら望遠鏡を順逆の二途に利用して山水の遠近濃淡を察すると一般の手段によりて、或は人間を優者として見せ、或は人間を劣者として見せ、或は大にし、或は小にし、以て人間の眞面目を發露し盡せるなり。さて、第三篇は「飛鳥の巻」なり。こは専ら哲學者、科學者輩を嘲倒したるものにて、有名なる「Lagado」大學の記事の如きは、ルシヤン、ラフレエ等の作意に負ふ所も尠からずといふ。さりながら、此の巻は、四篇中の劣作なるべし、諷刺や、荒みて、淺露なる戯謔に流れたればなり。尙此の巻の中には他の種々の島巡りあれど、くだくしければ爰には言はず。第四篇「フインム國の巻」(Houghnams) 即ち賢馬國の巻は、スウィフトの特質と十八世紀の暗黒面とを知らんとする者の是非に一讀すべきものなり。此の島國に棲める人間めく動物を「Yahoo」といふ、是れ明かに作者が滿腔の憎人主義を母として人間の醜惡を代表せんが爲めに生まれたる怪物なり。恐らくは此の一篇は所謂宗教家者流の殆ど正讀し得ざるほどに慘刻を極めたるものなり。我が「和莊兵衛」「夢想兵衛」のたぐひは、いふ迄もなく此の「巡鳥記」のあらずぢ

を長崎あたりの和蘭人などより耳聞して案を構へたるものならめども、其の根柢の主意は、此れと彼れと霄壤の相違あれば、到底日を同うして語るべからず。また我が國の評者のうち、或はスヰフトを鳩溪に比し、スヰフトの實かに大なるを認めながらに、尙二者の文品を兄弟せんとする者あれど、これもまた失倫の月旦なり。スヰフトと鳩溪とは、趣くとも文致の上に於ては、晝夜の差別をなす者なり。前者は嚴肅にして後者は戲謔なり、彼れは澁面にして此れは冷笑なり、彼れは大氷海の如く、此れは濁れる河浪の澎湃たるが如し。

スヰフトは壯より腦病になやめりしが、一千七百四十一年以後持病漸く激しくなりゆきて、竟に同四十五年に逝りぬ。死前三年間は絶えて物いひしことなく、さながら意識なきものゝ如くなりきといふ。絶望と怨憤との間に其の心狂ひたりしなりけり。

エドモンド・ゴッス氏曰はく、十八世紀前半の偉人たるスヰフトは、後半の偉人デモンソンよりも偉なり。彼れは第一、流の創新を有す。彼れの性質は炎炎たる猛火の如し、これに近づくものをして同じく燄を擧げしむるか、さなくば彼れが火力にて他

者の光を消失せしむるかの二途あるのみ。(中略) その怒るや残忍暴戾なると遙かに人性の上に出で、その無心なるときは、さながら猫兒の媚態するが如く、その戲謔するや虎兒の無邪氣なるに似たり。(又略) 彼れは當代第一の薄倖兒、絶望家にして、又當代第一の偉人名士なり。彼れは悉く怪訝すべく、殆ど端倪すべからず。彼れは矛盾の塊なり、世界の好奇心の目的物なり、多數人の畏避する所、少數人の熱崇する所と。評し得て餘蘊なし。本文に叙する所、彼れの生涯を悉さず、讀者恐らくは其の和らぎて媚態する由縁を解せざるべきか。此の怖ろしき悪魔王が、前後二佳人に戀愛せられ、如何に珍らしき家庭の悲劇を経験せしかは、宜しく彼れが一十七百七十年より同十三年に至るまでの私事を記せる“Journal to Stella”を始めとして、ポイル、スコット、クレーク等の詳傳に就いて之れを知るべし。アチソン、スヰフトは十八世紀前半に於ける時文壇の驍將たると同時に、所謂小冊子の論文家の最先なるものゝ錚々として、下に語るべきダンエル、デフォーとならべ稱せられ、或は羅馬の三議政官に對比せらる。すなはちアチソンはレピダスに比すべく、スヰフトはアントニーに比すべく、デフォーはオクタヴィヤスに比すべし。



## 第三章 前半期の散文家

三九六

スヰフト、アチソン以外の諸家——スチール——「タットラア」——「スペクタ  
 ティートア」——スチールの功績——シャフツベリ伯——マンドギル——  
 バアクレレー——其の他の論文家

當代散文の名家はアチソン、スヰフト、デフォーの外に、スチール、ベントレー、ミッドルト  
 ン、アーバズノット、アッタアベリ、ポリリングアローク、バトラア、シャフツベリ伯、マンドギ  
 ル、バアクレレー等あまたあれど、一々精説する能はざれば、こゝにはスチールより始  
 めてその著作と文體との概要を述べ、デフォーの事は章を改めてその寫實小説の端  
 緒を開きし事を述ぶると同時に語るべし。

リチャード、スチールはアチソンと同様の方面に於て、アーン女皇朝の散文壇に  
 一世の指導者たりし者なり。アチソンと同じ年に生まれて、一千七百九十二年に  
 歿しき。幼時はチャーターハウスにて、アチソンと同學の友たりしが、オックスフォード  
 の大學に入るに及びて、二人はその科を異にし、アチソンはクライストチャーチに入  
 り、スチールはマッグダレン大學に入學しき。二十四歳のころ、女皇メーリーの葬儀を歌

ひたる歌を作して某公爵より年金を得たりしことあり。一時は船長となり、また  
 劇の作者ともなれり。「The Lying Lover」「The Tender Husband」等の喜劇を作せしが、  
 「The Tender Husband」最も見るに足る、或はアチソンの添削を経たりしかも知るべ  
 からず。彼れはアチソンの紹介によりてスヰフトと相知るに至りしが、三者の交  
 情はじめは甚はだ厚かりき。一千七百九年、アチソンの條下に語りたる隔日新誌  
 『タットラア』「The Tatler」を發行す、アチソン、スヰフト等その寄書家たりき。この  
 新誌は在野黨の機關にして、主として政治的なりしが、家庭、娛樂、詩歌、學術、内外時事、  
 雜錄等の諸欄を設け、社會を教導するを其の表面の目的となせりしかば、一面今の  
 家庭雜誌に似通へる所ありき。二百七十一號までにて廢刊し、彼の『スペクテート  
 ア』代りて出でき。是れより先き、スヰフトはその政見を變更せしかば、スチールと  
 の友誼全く破れ、スヰフトは『タットラア』を指して「世界中最惡の同伴」と罵るに至り  
 たり。

『スペクテートア』はアチソンとスチールとの設案に成り、ミスタア、スペクテ  
 ートア(傍觀子)と呼べる紳士を中心として、サア、ローシャア、デ、カヴリなどいふ人々が

一俱樂部を組織して時事を論評す、といふを根本の趣向として、綴り初めたる、後の雑誌めく新誌にして、一千七百十一年三月より翌年十二月まで、日刊の號數五百五十五に及ぶまで、よく一世の視聽を聚めたりき。この中、アチソンは二百七十四部をもものし、スチールは二百三十六部に筆を執り、ジョン、ヒースといふ人（二六七七—一七二〇）“The Siege of Damascus”といふ悲劇の傑作ありは十九部、ポーアは一部を編みき。勿論、此の他にも寄書家はあまたありしこと、知るべし。翌年、スチールは更にまた『ガーヂヤン』“The Guardian”を發行せしが、スヰフトとの政見上の争ひいよく、烈しくなりしかば、遂にこれをアチソンに委ねて、自らは進んで議院に入り、かくして直ちに輸贏を決せんと試みしも、却りてスヰフトに破られて議院を逐はれ、再び筆を執りて二三の新聞紙を起し、之れに盡瘁せりしうち、ホイック黨凱歌を揚げ、新王ジョージ一世の代となり、アチソンは擧げられて總官となり、スチールもドゥロリ、レオン座の管理者となり、且つ士爵に叙せられて再び議院に入りぬ。後ち數年にしてアチソン歿し、それより以後はスチールの著作に見るべきものなく、政治上にても何のしだいしたる事なく、漸次窮迫に陥り、十年の後、其の亡友の後を

追ひき。

スチールの性質は、その美なる側面を見れば、よくアチソンに似て、更らに一段その度を強らたるが如き趣あれど、激するときは、屢、理否の辨へなくなりて事に熱衷する癖ありしかば、兎もすれば失敗多く、アチソン程に圓滑なる生を了ふる能はざりき。さりながらこの熱心專注の性質は、彼れをして事物の缺點を見ては之れを勿諸にする能はざらしめ、種々の改善的企業に従はしめたり。要するに、アチソンは成案の人にしてスチールは發企實行の人なりき。スチールはアチソンよりも毎に一步づゝ先きだちて事業に着想し、アチソンを促して之れを修正せしめ、さて共にその業を實行せし觀あり。彼れの時弊を觀るや、おほむぬ的中し、その救濟の方また概して宜しきを得たりき。當時、社會の風紀壞亂し、其の娛樂や、好尙や、浮靡荒淫にあらざれば、殘忍殺伐、世を擧げて風雅、人情の何物たるを解せず、貴公子、貴女にして目<sup>め</sup>に一丁字なきも恥とせず、眞風流を談じ、眞詩文を語る者あれば、却りて迂腐の人として擯斥する傾ありき。事態の斯の如くなりし時、スチール謂へらく、かゝる士女を教導するには尋常一様の教訓を以てすべからず。彼れ等は説いて理論

に亘れば解する能はず、戒めて嚴なれば堪ふる能はざる薄志の徒なり。彼等は今や宴樂のたゞ中にあり、到底澁面を以て臨むべからず。よろしくその遊戯せる時を利用し、滑稽戲謔の顔色と言語とを以て次第に其の心理に潜入し、以て内部より感化を行ふべしと。かくの如くにして『タットラア』出で、斯くの如くにして『スペクタートア』出で、尙からず一世の風化を助けたりき。

スチールは文思豊かにして、才氣溢るゝが如くなりしかば、其の説く所よく俚耳に入れりき。さはれ、其の喜ぶべき快活も、過ぐるときは浪譚に失し、威儀を壞り品格を損ずるに至れること間々あり、而も近世の評家等は、大抵之れを咎めずしてその天眞の流露せるを稱す。

當代の論壇には、以上の諸家の外、尙あまたの散文家ありしが、皆期せずして平易通俗といふ點に重きを置けり、是れ實に十八世紀散文の特質として記應すべき要質なり。固より人々によりて特色はありしかど、尙或はスキャフトに、或はアチンソンに、或はデフォーに、或はスチールに、多少其の摸範を求めたりし概あり、所詮此の四家の外に出づることを得たる者は殆ど空し。

リチャード・ベントレー Richard Bentley (一六六二——一七四二)はケムブリッ

ヂ大學の出身にして、古文學に精通し、同校にて神學の教授となり、又そのトリニチー、コレッチに學長たりき。著はす所“Horace.” “Terence.” “Phaedrus.” 及び“Milton.” 等あり。文致は典雅明暢なり。『フィドラス』は其の傑作、『ミルトン』は其の悪作なり。

ユンヤアス、ミドルトン Conyers Middleton (一六八三——一七五〇)はケムブリッヂ大學の圖書館を掌りて古文學に通じ、論壇に立ちてはベントレーの反對者中最も有力の人なりき。著書の中にては“Life to Cicero.” 最も名あり。その他、宗教の歴史に關する著述若干あり、就中“A Free Inquiry into the Miraculous Powers by the Christian Church.” と題せる一書の如きは、近代に所謂合理信仰派の前驅とも見るべきものなり。文致の平明は當代第一に位せり。

ジョン・アーバヌス・ノット John Arbuthnot (一六六七——一七三五)は忠實なるトリ黨にして、ロンドンにて女皇アーンの侍醫となり、スキャフト、ポープ等とも親しく交れり、中にもスキャフトとの關係は、スキャフトの『月球』小スキャフトと呼ばれたりし程にて、よくスキャフトの光を受けて反映せりき。その傑作“History of John Bull.” 及び

“The Memoirs of Scriblerus.”等の如きは諷刺の痛快なる點間とスケッチとを甄別し難き程なり。

フランシス・アッタアベリ Francis Atterbury (一六七二——一七三二)はウェストミンスターセントの副監牧師にして華麗なる説教文に長じ、且つ書簡をよくし、批評にも名ありき。其の文は、アチソンを學びて未だ至らざるものなり。

子爵ボーリングブローク Bolingbroke (一六七八——一七五二)は少壯にして議會に入り、辯に於ては有名なるピットをして、英國前代の雄辯家中の最も秀でたるものと稱嘆せしめし程の名家なりしが、文學は、其の政治上に失敗し、逆境に陥りし後の餘業なりき。“Letters to Sir William Wyndham” “Ideal of a Patriot King.”等は其の名著なり。其の文章は、修辭上の用意の周細なるを特質としたし、ども、送迎頻繁なる日常の些事を評論するに修辭の餘り濃厚なるは却りて悦ばれざるためしにて、作者の苦心なれば以上は効なかりき、さりとてかゝる修辭法を要する程の題目は當時の出版物に稀有なりしかば、利器を用ふるに所なかりしなり。所詮彼れは不幸なる時代に生れ出でたりき。

シャフツベリ伯 (一六七二——一七三三)は姓名をアンソニー・アシュレ、クーバア Anthony Ashley Cooper とし、幼時は哲學者ロックの手に教育せられ、長じて後ちも大學に入りしことなく、廣く外國を漫遊し、歸國の後ち下院に入り、又上院にも入りしかど、政治上に於ては別に頭角をあらはし、ことなかりき。その著述は集めて三冊あり、題して “Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times.” と云ふ。其の思想はプレトリーの系統を傳へ、頗る創見に富み、殊に宇宙の大調和といふことに關しては一種幽玄なる觀念を有せりき。又文學の批評に於ては、久しく一世の師表オピニオンたりし趣あり。蓋し伯は、教育は最も完全にして好尚は最も粗野なりと稱せられし世の大學出身者にはあらずして、前にロックの直示を受け、後に大陸の風物に接し、其の至醇なる文藝美術に親炙して、趣からぬ感化を享けたりしかば、伯が倫理説、美學説は、當代及び次代の學者、詩文人に感化を及ぼす所少なからざりき。伯が文章の巧緻精鍊、また頗る翫賞すべし。其の詞致は、その思想に似て、莊重また瑰麗なりき、ゴッス氏は、種々の點に於て、伯はオーガスタス時代のラスキンなりと評せり。

さて伯がフレト<sup>オラチニスム</sup>の善觀説に反抗して、一種の惡觀説<sup>ベシニスム</sup>を利己的快樂説の立脚地より唱へいだし、者あり、之れをバアナード、マンドギル(一六七〇—一七三三)となす。

マンドギルはもと和蘭の人なりしが、少きよりロンドンに移り住みて醫を業とし、夙に英文にて著作を試み、一千七百五年にはスヰフトの筆法に倣ひたる諷刺詩の韻語“The Fable of the Glumming Hive”一篇を作りぬ、こは或生計裕かなる蜜蜂の一群が、一朝道德上の訓諭を聽いて之れを實踐躬行するに及び、遂に一類の不利を招き、悉く自滅するに至りし旨を叙せるものなり。かくて九年を経て同書を再刊するや、彼れは更に長き散文の解釋を附して、其の利己的惡觀説を主張したりき。文章は甚だ蕪雜ながら所信を吐くに大膽なると諷刺滑稽の富贍なるとはその長所なり。然れども平凡の常識を以て人世の半面を觀察し、これにスヰフトの冷酷を交へたるまでのものなれば、論旨淺薄にして、到底何れの點より見るもシヤツベリの敵たるに足らざりし者なり。

ジョールジ、バアクレー George Berkeley (一六八五—一七五三)は名聲シヤツ

ベリをも凌ぎたりし論客にて、ダブリンのトリニチ大學の出身なり。久しき間彼の校に留まりしが、一千七百十三年ロンドンに出で、スヰフトと相知り、大陸を漫遊し、歸國の後ち副監收師となり、さて亞米利加に渡航し、歸りて監督となり、職に在ると十八年にして歿しき。著作中名高きは、一千七百三十一年に出版せし“Alciphron”を始めとして“The Theory of Vision”“The Principles of Human Knowledge.”等なり。“Alciphron”は當時の諸學說、シヤツベリ、マンドギル及び自然神教説の弱處を破したる問答録なり。“The Principles of Human Knowledge.”はロックの經驗説を更に一段推しひろめて人に生具の思想なき由を極端に論じたるものなり。バアクレーは修辭に巧みにして其の文致の多様なりしこと實に當代に冠たり。その諷刺に於けるや、アチソン、スヰフトと肩を比ぶべき技倆あれども、彼れは敢て諷刺の一方に依倚することなかりき。彼れは奥妙の理を平かに説き、抽象の論をうるはしく述ぶるの技を有しき。彼れ狀寫すれば、その細密なることさながら畫圖の如く、彼れ對話を用ふれば、その自然なること恰も小説の如し。要するに、彼れが文體は殆んど端倪すべからず、况んや模倣することをや。こゝに於て、その妙文もたゞ一代の異

彩たるに止まりて、後ちに一派を遺す能はざりしは惜むべきことなり。

その他の散文家には、ベンチャミン、ホードリ Benjamin Hoadly (一六七六—一七六一) サミエル、クラーク Samuel Clarke (一六七五—一七二九) 監督チェン、ブトラア Joseph Butler (一六九二—一七五二) 等なり。其中パトリアには “Analogy of Natural and Revealed Religion” “Sermons” 等の名高き著述もあれど、今はすべて省きて説かず。

#### 第四章 アレクサンダア、ポープ

詩歌の擬古時代—アレクサンダア、ポープ—生涯—著作—『批評論』—“The Rape of the Lock”—『英譯イリヤッド』—『英譯オデュッセー』—『人間論』—『愚人物語』—ポープの長技

十八世紀の前半は擬古詩全盛の時代なり。當代の詩人は、主として重きを形式に置き、豫め嚴密なる詩格を設定し、専ら古詩に擬して作せしかば、其の作の相似たることさながら同模型より成れるが如きもの少なからず。さなきも、詞花言葉の巧を競ひ、只管修辭法の正しからんを欲し、古格に背くまじと勗めたりし點は、此れ彼れ殆ど一轍たり、故に、擬古時代の詩歌の特質は、其の一を精檢して以て他の百千を類推するに難からざるなり。而して千種万様の剪綵の間、殊に色彩の燦然たる者

はポープが彫琢萬回の詩篇なり。されば彼れが詩の如何なるかを知悉するを得ば、所謂擬古時代の詩學と其の諸作との特質形狀は之れを知るに庶幾からんか。

アレクサンダア、ポープは一千六百八十八年五月二十一日(我が朝、元祿元年柳里恭の生誕前十八年)英都ロンドン街のロムバード街に生まれき。父はリチン商にして家計はゆたかなりき。ポープ生まれて矮小、加ふるに駝背なりしかば、長じて後も身の長四尺に過ぎざりき。齡やう／＼五歳なりしころより既に能く詩を解せり、八歳の時家附の僧某に隨ひて羅旬、希臘の文法を學びて羅旬の名家スタチウスの詩一節を譯しき、蓋しスタチウスはヴァツルと共に彼れが終生愛好せりし詩人なりき。十二歳、更に一の脚本めく作を物しき、其の中の人物には『イリヤッド』中の英雄、アキリオズ、ヘクトア、ユリシイズなどいふ人物あまた見えたり。

ポープが初めて其の作を世に出ださんと思ひ立ちしは、外交官ウィルヤム、トラムボールと地主ウォルシとの懇懇に因るといふ。トラムボール嘗てポープの詩を見て激賞して曰はく、余は他に君の如くミルトンにも匹敵すべく思はるゝ詩人あるを知らずと。ウォルシもまた嘗て曰はく、ヴァツルといふどもポープほどの年ばえに

ては、かく巧に詩を作り得ざりしならん」と。

一千七百十年、ポーア首都の交際社會に出で、改進黨の諸名士に交りぬ、益し、商賈も、農夫も學者も、詩人も、相會すれば必ず政治を談ずること、當時の一流行たりしなり。翌年、有名なる『批評論』といふ詩篇をいだしぬ、デモセフ、アヂソン之れを『觀察者』の紙上に賞せり。かくてスチールの紹介にて初めてアヂソンと相知りぬ。一千七百十二年、其の傑作の隨一“*The Rape of the Lock*”を公にせしに、世評頗る高く、其の名俄然として全都に喧傳せり。翌年また『ウインツアの森』といふ一篇を著して、デナサン、スヰフトに知られ、爾來二十有五年、三人の間、信書の往復絶間なかりき。同じ年スヰフトの紹介によりて、オックスフォードの公爵ロバート、ハーリー、男爵ポリーング、アローク、ロチェスターの監督アツタアベリ等と交り、又詩人にして巴里の公使を兼ねたりしマッシュュー、プライオア、醫師にして著述家をも兼ねたりしアーベスノット、並びに詩人兼脚本家のジョン、グイ等、と交を結びき。一千七百十五年、其の名篇『英譯イリヤッド』を世に出だしぬ。其の第五卷を譯出せしまでに無慮九千磅の報酬を得きといふ、以て其の世に行はれしことを想見すべし。同じ頃オックスフォード

の人にしてアヂソンの友なりしトマス、チツカアといふ者、同じく『イリヤッド』の第一卷を翻譯して世に出だしぬ、而してアヂソンは、其の『觀察者』の紙上に於て、頗る之れを稱揚せしかば、ポーアは己が翻譯を貶せられたらん如くに感じて、いたく忿り、大にアヂソンを誹謗し、これより相善からず。一千七百十七年、ポーアまた『エロイサよりアベラルドへの書翰』、『不幸なる淑女を憶へる挽歌』の二篇を出版せり、此の二篇はポーアが人間に對する同情の度と其の抒情詩人的技倆とを窺ふべきものにして、短篇なれど注意すべき價あり。ゴッス氏はこれより推論して、若しポーアにして一世紀前に生れたらば、劇詩家としても相當の位置を得たりしならんといへり。此の年、其の父チスヰックにて死去りければ、翌年、其の母を伴うてトヰッケンハムといふ處に移りき。こゝにて『イリヤッド』の翻譯を大成し、更に『シェイクスピア全集』の出版に従事せしが、この業はむしろ失敗の業なりき。當時の批評家リ、ユヰス、シオポールド詳に此の書の缺點を發きて、きびしく編者を難せしかば、ポーアは燃ゆるが如く怨み憤り、後に彼の嘲罵の詩『愚人物語』といふを著し、折、猛烈なる復讐をなしき。『愚人物語』の中に捕らへられたるは、ひとりシオポールドのみならず、平素ポー

アと相反目せし輩は一人としてポーアが嘲罵の犠牲となりて愚人の仲間入せざるはなかりき。此の書の出でしは一千七百二十九年の事なり。

一千七百三十三年、ポーアが母齡九十二にて世を去りぬ。ポーアは終身妻を娶らざりしに、十七年前に父を失ひたりしかば、爾後眞實の愛情をもて接せしものは、天下唯一人の老母ありしのみ。彼れは母に別るゝや眞に天涯の孤客となりぬ。彼れの狹量にして狷介なるや、唯一人の信友をだに有せざりしなり。彼れは常に自己の生涯を名づけて、「一長病なりといへりき。虚弱多病の身をもて、外は攻守に違なく、内は心火の熄む違なかりしかば、齡五十を過ぐると共に神心いたく衰へ、形容枯槁して長く命脈を保つべくも見えずなり、一千七百四十四年五月三十日に至りて遂に其の「一長病なりし生涯を脱して、溘然不歸の客となりぬ。遺言して其の屍をトイッケンハムの寺院なる父母の墓畔に葬らしめき。享年五十七。

ポーアが主なる煩惱は、名譽を得んとするにありき。トマス、アーノルド曰はく、ス・フットは其の文學上の成功をもて單に好位地を作らん踏臺とせしに過ぎざれど、ポーアはそを手段とはせずして、たゞちに其の目的となしにき、即ち前者の欲望は

「權力を得んとするにありて、後者の欲望は名譽を得んとするにありきと。げにポーアは名譽を得んが爲には何物をも犠牲に供せんとしたりき。若し己が名譽を傷けんとするものあれば、武器を選ぶに違なく、奮然之れにおもむき、百方防戦に従ひき。テースも曰はく彼れが筆を取る大理由は、所詮文學上の名聞を博するにあり、彼れは稱賛せられんとを願ふの外、他念なし、彼れの生涯は猶一娼婦の生涯の如し。彼の娼婦や、朝より鏡前に立ちて化粧を凝らし、又他人より挨拶の手紙を受け、ては満面微笑を呈しながら、他人に對しては、挨拶を受くるほど五月蠅きはなし、紅粉は面を汚すに過ぎず、などいふ、ポーアは恰も此の娼婦に似たりと。

才分の卓絶なる彼れの如く、勵精修鍊はた彼れの如くば、誰れか造詣するところ深からざらん。ポーアはいと幼き時にだに習はざる文字をかき寫して書法を獨習せしほどの稀有の熱心と忍耐とを有しき。其のやゝ長ぜしや、およそ九年が間は林中の一茅亭に閉籠りて、潜心四圍の好景に詩想を養ふ、其のかたはら徐ろに各國の佳什を誦しき。實に獨修苦學の力によりて古代の諸名作を解せしなり。英國の詩宗中其の最も私淑せしは、ドライデンなりき、擬古癖は既にこゝに胚胎せ



りしなり。加ふるに、其の尙少なりしや、其の友ウォルシ彼れを勵まして曰はく「我が國古より大詩人乏しからずと雖も、醇正なる大詩人は尙欠けたり、足下須からく此の醇正なる大詩人たらんことを期すべし」と。所謂醇正とは、用語、修辭法等の正しく、詩形上に間然するところなきをいへるなり。ポープ此の言に感む、件の目的の爲に精進し、もろゝの形容詞、熟語、韻律等の苟も詩形を正うし、調整和諧せしむべきものを集め、それを誦記して腦裡の秘寶とせりき。彼れ一詩篇を草すれば、少くとも二年間は机中に藏し置き、みづからも考へ、他人にも胥り、彫琢万回、殆ど原形を存せざるに至りて世に出だしき。彼れは談話中にも、かりそめにも取る可き語あれば、直に之れを紙に録しき。一想、一語だにも徒らに逸せしめしことなし。彼れは平生其の枕頭にも文机を備へたりき、夜半思想の浮ぶことあれば、やがてはねあきて録し置かんためなり。其の腦中は常に作詩上の計畫にて充ちたり、談笑の間とても心中決して閑なるを得ざりき。その刻苦精勵、經營慘憺、おほむね此の類なり。其の詩篇の、言々金玉を聯ね、句々錦繡を敷ける、蓋し偶然にあらざるなり。ポープの著作は、創作、翻譯、併せて三十餘篇あり。其中重なるもの六篇、曰はく「批

評論』曰はく「The Rape of the Lock」曰はく「英譯イリヤッド」曰はく「英譯オヂッセー」曰はく「人間論」曰はく「愚人物語」是れなり。其のうち

『批評論』(一千七百十一年出版、ポープ年二十四)は、ポープが出世作なり。こはもと首尾の貫徹せる一篇の詩にはあらず、只詩學、文學、批評等に關する隨感を記したるものなり。其の思想は、概してホレリス、アアロー等を祖述せるに外ならず。テ

ーヌは此の作を評して曰はく  
是れ甚だ賢明なる教誨を集めたるものなり、而して其の缺點は餘りに平凡なる眞理なることなり、曰はく「決斷に先ちて分別回想せざるべからず」、曰はく「美術の法則は自然より出づ」、曰はく「傲慢、無學、偏見、黨派心、嫉妬等は判斷を暗くす」と。總べて此の類なり。蓋し、ポープ、ドライデン、アアローなどの時代には、順序よく思想を排列し、且つ明瞭なる辭句によりて、その明白に言ひ表す必要もありしならん、されど今は其の必要去りぬ。吾人は思想を要す、思想の斷片を要せず、鳩小屋は造られたり、それを充たすべき實物を要す。云々。

テーヌの評は酷に過ぎたり。ショーは贊嘆していふ、ポープの此の作、巧緻精妙而も氣方に乏しからず、而して其の判斷は圓熟、其の詞は優美、其の韻律は能く和諧したり、云々。

『レーブ、オフ、ゼ、ロック』(一千七百十二年出版、一説には十四年の由來は下の如

し。時の貴紳ピータア卿といふあり、アラベラ、エルモア嬢と結婚の約成りけるが一日嬢の熟睡せりしを窺ひて、ふと戯に剪刀もて嬢が愛敬毛を剪り取りし事が原となりて、結婚の約破談となりし一事あり、ポーア此の事實を捉らへて材料とし天神地祇のいと尊くいかめしきを取り入れて、かゝる些細なる好笑しき事を嚴格高尚なる英雄詩の躰式をもて綴りいだしたり、是れ此の一篇なり。其の事實の瑣末なると其の詩體の嚴格なると相照らして、實に稀有の好談柄たり。

英譯イリヤッド』(二千七百十五年より一千七百二十年迄に出版)はポーアが最も大名を博し、又最も利得を得し著述なり、されど直接又は間接にホーマアの原著を知れる者は、皆モーレル氏の評に左袒せざるを得ざるべし。

こは如何に見るもホーマアが詩の内想、外形を現したるにはあらで、それさばかけ離れたる獨立の著作として見ざるを得ず。かの古文學者ベントレーの批評は至當にして正確なり、曰はく「かの作は良詩なり、されどホーマアの作にはあらず」と。げにや、ホーマアの精神も、感情も、境遇も、殆どいづれの點に於てもポーアのさば直反對なり。ホーマアは其の生涯を戶外に費したりしかば、ポーアは實際場裏の一市人なりき。ポーアの用語は無形の思想及び抽象の言辭をもて充ちたれども、ホーマアは無形の事物と抽象の言辭とを受け納るゝこゝ能はざりき。ホーマアの用語は新約全書の用語のごとく、單純直接に

して、童兒の如し、ホーマア及び其の時代は如何なるものをも直接に名くることを得ずして、常に抽象の辭を以て解説し、又は紆餘曲折して言ひ見すを常としき。(中略)ホーマアの技術は精神より發生したる單純無意識の技術、シェイクスピアの所謂「自然其の物なる技術」なり、ホーマアの技術は、單に詞句の巧妙なる語法をもて、説話に新しき美を一層高上なる價値を興へんを力めたる自識的技術なり。

云々。テーヌは冷然として評すらく、ポーアの『英譯イリヤッド』は俗の好尚に應じたるものなり。英國人は單純なる希臘風の服装のまゝにては嘆美せざりしならん、彼等は紅粉を施し、飾紐を着けたるを見てのみ満足すべし、これ時様の服装なればそを着せしむることも必要なりと。所詮、此の著は『イリヤッド』の筋によりてポーアが自由の詩才を發揮せるものと見做すべきなり。

『英譯オザッセー』(一千七百二十年より同二十五年までの間に出版)は『英譯イリヤッド』よりもまた一層ホーマアに遠きものと思へば當を得たるに近し。ポーアがみづから筆を執りしは、全部二十四卷の中僅かに最初の二卷に過ぎず、其餘はすべてフントンドルムとの代筆に成れり。

『人間論』(二千七百三十四年出版)はポーアが其の友ポーリンクプロークに宛て

たる四通の書翰體の詩を一束にしたる者なり。第一の書翰は人と宇宙との關係、第二は人と人との關係、第三は人と社會との關係、第四は人と其の理想との關係、及び幸福の追求に於ける關係を説きたり。根本の思想は其の友ポリーングブロークに負ふところ多しといふ。抽象の哲理を韻語をもて表白し、而も乾燥無味に陥らざるところポープが技術なり。斯かる題目を韻語に綴りし理由は、韻語は散文よりも簡潔に思想を表し得るがゆゑ也と自ら言へりき。博士チンソンは評して曰はく、此の作は、天才の卓絶と、想像の華麗と、能辯の力とを見るべき好例なりとす。蓋し、智識の缺乏と感情の庸劣とを、斯くばかり巧に蔽ひたるはあらずと。評し得て皮肉なりといふべし。「人間の適當なる研究主題は人なり」といふ人口に膾炙せる格言は、實に此の篇中の一句なり。

『愚人物語』"The Dunciad" (一千七百二十九年出版、ポープ四十一歳は前にもいへる如く、小詩人群を罵倒嘲殺せるものにて、其の趣向はドライデンの"Mac Fleaone"より脱化したるなり。當時有名なりし批評家シオポールドと桂冠詩宗シッパードとは、此の詩篇中の兩主人公なり。篇中諷刺罵詈の最も猛烈なるは文學の女神、魯鈍の命

が催せる競技會にて、書肆が一詩人を捕へんとして競走する一段、群小作家が我れ劣らじと、吠競し、やがて洞中におちいるをかしみ、批評家等が眠を催さで二名家(シオポールドとシッパードを指す)の著を讀まんとして苦しむをかしみ等を叙したるあたりなり。シッパードは此の篇を評して、私情の目的に應用せられたるいみじき天才の最も驚歎すべき、最も恐るべき一例外は醜文學筆誅を名とし、内は只管に私怨の犠牲を燒盡し、滅盡し、貪噬するを目的とせる天才的電光の一例なりといひ、トマス、アーノルドは、此の篇中に嘲罵せられたる詩人には、一人として後世に名を残すべきほどのものなし、是れ此の篇の永久に旨味を持続する能はざる所以なり。ドライデンが"Mac Fleaone"中に捉へたる詩人は、流石にポープが捉へしものよりは高名なりき、云々といへり。テームスは曰はく、此等の怪文學に比較すべきはひとりスウィフトの著あるのみ、されどスウィフトの著は絶望、怨世、狂忿の餘に出できとすれば、さすがに分疏の途あり、ポープに至りては何の不足なき身をもて、單に文學上の私忿によりて、斯かる怪文學を製作す、彼れはそも神經を有せざりしか、吾曹は之れを讀みて、恰も麗しき花籠の中に泥を盛れるものを見たらんが如き感を生ずと。げ

に、スウィフトは、常に公衆若しくは一團躰を對手として嘲罵せしに、ボープに至りては、一として復讐的の人身攻撃ならぬはなかりき。

ボープが詩の長所は、其の思想、感情の超凡なる上にはあらで、其の詩形と詞美との巧緻を盡したる上にあり、其の状寫の巧妙なるにあり。此の點につきては、さしも峻酷なるテーマだに、ボープは、到底詩人たるの資格を備へたり、其の詩全躰につきてにはあらず、其の斷片に於て然るを見るべし。森羅万象、何物も、彼れの筆を借らば寫しがたきはあらず、一鱸魚、一鰻魚を形容して、宛然其の物を見るが如くならしむるが如きは更に言はず、スベードのクイーン、ハートのキングだにも、彼れの筆に上れば躍然として活動す。」云々と評せり。

之れを要するに、ボープは、擬古思想の最高潮を代表せりしと同時に、殆ど時の詩學說の全分を其の理想そのまゝに實現したるものなり。彼の佛のフアロー、英のライマア等一流の詩學論、修辭論を、殆どさながらに實踐し、兎も角も同代の批判家をして一時其の口を閉ぢざるを得ざらしめしは、彼れが天才の拔群なる明證にして、其の一代に歡迎せられて詩王を以て目せられしこと、偶然にあらざるなり。自負

心の深き彼れは、夙にみづから之れを意識し、詩論に於ても、作に於ても、十八世紀詞壇の指導者たらん者は、佛に在りてはフアロー、英に在りては自家なりと自任せしに似たり。彼れは常にフアローが歩みたりし跡を追うて歩みたりき。貶していへば、彼れはフアローの摸倣者なれども、褒していへば、終始フアローと顔顔し、競走せし趣あり。其の着眼も一なれば、其の詩論も一、其の作の種類までも相似たりき。フアロー「L'art Poétique」を著して、詩中に詩法を論ずれば、ボープも直ちに之れに擬して「Essay on Criticism」即ち韻語の「批評論」を著しき。フアロー青年の詩人に誨へて、先づホーマアを學べ、といへば、ボープもやがて専念して『イリヤッド』『オヂッセー』を英譯しき。フアロー戲謔の詩筆を弄して、「Le Lutrin」に譽れを殘せば、ボープは直ちに之れに摸して「Rape of the Lock」を綴りぬ。其の他、一々に比し來れば、ボープが一著、一著、フアローに負はざるもの殆ど稀なるが如き概あり。即ち、思想に於ては、ボープは、明かにフアローの徒弟なり、小フアローたるに過ぎざりしなり。而も其の思想に於て小フアローたりし所以は、修辭上の技倆に於て出藍の實と譽を得るの妨げとはならずしゆゑに、ボープが詩調は、凡そ三十年間、英國の詞壇を風靡した

りき。其の擬古的法格と其の纖巧なる彫鏤とは、一面弊を醸し、には相違なければ、他面當代及び後世の詩學、修辭法に貢獻せし所尠からざりしなり。さればこそ、テームもボープが修辭的技倆を褒めて「これ擬古時代に適當なる技にして、普通の思想を順序よく言ひ表はすべき方法なり」といひ、且つ曰はく「當代に於ては英佛兩國民とも至高なる哲學的概念と淺近なる具象的細事との中間に位する普通平庸の理を捉へ來たるを第一の能事となし、かくして今の所謂常識の素を造り、巧に區畫を設けて此の種平庸の概念を排列し、整理し、發展せしめ、對應せしむるを是れ力めたりき。此の修辭的研鑽は、漸く諸作に浸潤し、當代の詩を擧げて不自然なる韻語的散文とならしむるに至りぬ、即ち詩は高等なる談話の一種とはなりぬ。ボープは實に此の種の詩に熟練せりし者なり。此の如き詩的散文に於ては、全世界中、ボープに匹敵すべき者あるを知らず。我がアフロイすらも、遂に其の下に在るを免れざるべし。云々と。以上の諸説によりて、ボープの功過と長短とは、ほば想見するに足りぬべし。

## 第五章 ボープと同代の諸詩人

ボープと其の前後の詩人との關係——ブラックモリアープライオア  
——ゲイ——バーチル——ウィンチェルシー伯夫人

アレクサンダー、ボープの詩譽が一世の視聽を震撼したりし時に當り、一方に於ては、模倣者雲の如く起りしと共に、他方に於ては、之れに反抗せんとするの氣運も、陰に萌しつゝありき。されど、それらの事は、便宜上、後の章に譲りて、こゝにはボープと相前後して世に出でし第二流以下の詩人の上を語るべし。その中にはボープの先輩にして、ボープが感化影響を受けたりといはんよりは、寧ろ、其のはじめに於ては、多少ボープを指導するに與りて力ありし名家もあり。蓋し、ボープが圓美無瑕の詩體は、ドライデン以來此等先進諸名家が相ついで開始し來りし所を集めて大成せるものと觀て可なり。

ドライデンよりボープに至る、約三十年間の詩壇に於て、最も有名なりし醫博士  
リチャード、ブラックモリアー Richard Blackmore (一六五〇—一七二九)は、オックス  
フォードの出身にして、其の作詩の事に従ひしは醫を開業せし後にあり。「王子ア

サア『アーサー王』『デック』『エリザ』及び『天地開闢』其の他、若干の讚美歌、論文等の著あり、其中『天地開闢』は、アチソン及びジョンソンの激賞せし作なれど、近代の讀詩眼を以てすれば、只多少の好修辭を見いだし得べきのみ。取るべき點の乏しきことは他の作もまた然りとす。

マッシュュー、ブライオア Mathew Prior(一六六四—一七二二)は、一時は、風俗詩の王など稱せられて名高かりし作者なり。ケムブリッジの出身なり。其の作中、やゝ長篇にして見るべきものは、『Alma or the Progress of Mind』及び『Solomon or the Vanity of the World』なるべし。前者は、ペトラアが詩風と韻法とに依りて作りたる『ヒーギラス』體の冗長なる物語歌にして、後者は、ホープよりは寧ろドライデンに近似したる、『ヒロイック、カブル』兼、『アレクサンドリン』格の諷刺詩なり。共に其の主題の眞面目なるに似ず、風姿は戲謔に流れたり。後者の如きは虚飾を諷刺しながら、スヰフトの如く冷刻なる能はず、ジョンソンの如く峻嚴なる能はず。要するに、ブライオアが文壇に貢獻せしは、主として其の短篇の作にありき。其の『Lines written in the Beginning of Mezeray's History of France』は作家の頓才と諷刺の才とを示し、『Child of Quality』

は其の幼年文學の技倆を表し、『Dawn Hall』は平易輕快なる三步律格の效能を證明せり。この詩格出で、以來、從來嚴守せられし、『カブレット』格の羈絆や、緩となり、十八世紀の詩歌、漸くその律格上の自由を得るに至りぬ。因に云ふ、この三步律格は夙にドライデンも試みたりしことあり、されどたい音樂用に止まりしがゆゑに、未だ廣くは知られざりき。恰好の主題を捉へて、盛に此の格を用ひはむめしは主としてブライオアの功なりとす。

ジョン、ゲイ John Gay(一六八八—一七三二)は、ブライオア程の頓才をば具へざりしかど、技巧に於ては、ほゞ彼れと同位置にありし詩人なり。家貧しかりしかば、少時は絹布商に雇はれたりしが、後ち某家の書記となり、それより始めて著作に従事し、先づ『Rural Sport』と題せる詩を作りて、時の詩王ホープに呈しき。これより先輩と相交るを得たりしかど、精進の氣力乏しかりしかば、敢て自活せんと努むることなく、又作詩に苦心することもなく、甲家より乙家へと流寓寄食して、其の間に幾多の小詩篇をものせしのみ。その轍軻流轉の窮生涯の面影は、其の劇詩『Beggars Opera』に於て髣髴するを得べし。『The Shepherd's Week』、『Trivia, or the Art of Walking the

Streets of London" "Epistles" "Eclogues" 等はゾアナル、スヘンサア又はポーブ、ヤングなどを模倣したる作なり。されども其の短篇には、當時に珍しきばかり抒情詩の正鵠を得たるものも多し。"Black-Eyed Susan" "I was when the Seas were roaring" "Philtia"などは、或は自然の情にかなひ、或は好調の樂をなし、雅趣愛すべく、掬すべし。劇詩は前に挙げたる『乞食芝居』の外に、"Acis and Galatea"あり。韻語の小話集には、"Fables"あり、皆その常才ならざるを見るに足る。惜むらくは、誘液鼓吹する良師を缺きしかば、その一生涯は懶惰、無理想のうちにて了りぬ。

トマス、パーチル Thomas Parnell (一六七九—一七一八)はトリニチー、コレマの出身にして、始めは教會の役員なりしが、スキャフトに勧められて、一時トリー黨に入りたりし作家なり。其の作は概ね短篇なるが、その價は一ならず。"Hermite"と題したるものは、ゴールドスマス、ヂュンソン等に激賞せられたりし作なれど、作者自からは、"Allegory on Man"と題したるを其の得意の作となせりき。近世の評家は、前者をば、たい流暢にして巧慧なる韻語に過ぎずとなす。件の二篇に次ぎて世に知られたるものは、"The Night-piece on Death"及び"Hymn to Contentment"にして、前者は

自然の景を寫せるとの巧みなる、當代に並びなく、後者はミルトンが『コーマス』の韻法に復歸して成功したるものなり。所詮、大詩人たるの素質には乏しけれども、其の作の巧緻にして、修辭上、詩律上の瑕疵少きは、よく時尙に副へりといふべし。

ウィンチルシー伯夫人 Countess Winchelsea (一六六〇—一七二〇)は、姓名をアーソ、フィンチと呼べりき、ポーブ、よりトムソンへ遷る過渡期の詩風の先覺なり。其の初め、古希臘の名家ピンダーの體にならひて、"The Spleen"と云へるを作し、引きついで、"The Prodigy" "Miscellaneous Poems" 悲劇 "Aristomenes" 等をもしき。此の作家は多年批評家間に遺却せられしが、彼のウヰルツオスが、その "Lyrical Ballad" に添へたる有名なる論文中に、十八世紀の詩歌を罵倒して、『失樂園』より『四季の歌』に至る約三百年間に、自然の景象を眞に愛すべく寫し出せる作は、纔かにポーブが『ウィンゾアの森』と此の伯夫人の "Nocturnal Reverie" とあるのみ、と論ぜしより、夫人が作を讀む者忽然として増加し來りぬ。蓋し、夫人は、著作の原材を常に自然の景致中に求めたりしなり、其の作 "Nocturnal Reverie" の如きは、人工の極端に馳せたる十八世紀前半の詩歌の間に立ちては、實に一種の異彩たりき。夫人が自然の描寫法は、トムソンのよりも

寫實には近かりしが其の眞詩才に至りては、彼れに及ばざりしこと勿論なり。

## 第六章 ダンエル、デフォー

十八世紀文學の價值——英國小説の濫觴——十八世紀以前の作物語——新小説の興起——その特徴——「ロビンソン、クルソー」——上代の小説類——讀者の傾向——デフォーの傳——其の著作——「ロビンソン、クルソー」——その價值

十八世紀は、其の大體の傾向、就中、其の前半期を眼目として評價すれば、既に前段にも言へる如く、眞詩趣の萎靡し、道義の衰頹し、細巧小慧の喜ばれし時、上下擧りて瑣々たる形式に拘泥し、區々たる小成に矜誇せし時代たるに外ならざるに似たれど、若しまた之れを他面、殊に其の後半期の趨勢に就きて通觀し、其の後の十九世紀文學に及ぼし、影響、そが呼び起こし、反動の價值、及びそが創設せし學問、藝術の基礎の少小ならざりしこと等を思念すれば、或は、當代を褒稱して、**近世英文學の起原期**といはんも、また必しも不妥當ならざるべきなり。新聞紙、雜誌類の起しも、眞の史的文學の成りいでしも、眞の小説の生れいでしも、皆此の期中の事なればなり。左にまづ小説の起原を語らん。

今の所謂小説、就中寫實的小説は、はむめて英國に芽を發しきといふも、謬言にあら

ず、而してそは諸種の英文學中、最も後れて發生せしものなり。夫の中世紀に盛なりし英雄的傳奇は、概して其の源を佛國に發せしなるが、それらは主として荒唐奇怪なる空想と武士的好尚とにのみ基けるものなり。所謂英雄的傳奇の主人公は、さすがに彼のマロリーが『物語集』に見えたる王子アーサーなどの如き、純乎たる中古時代の理想人物にはあらで、いづれかといへば、シドニの『アーカヂヤ物語』に見えたる牧者的情人に近き人物なりき、即ち中古の武士的理想に近世的理想を加味せるが如き人物なりき。此の種の傳奇の佛國に發生せしは十七世紀の事なり。オノール、ダルフ、Honore d'Urie は其の鼻祖にして、*Gomberville*、*ラ、ファイ、ヒョト* 女史 *Madame de la Fayette*、*スクーデリ* 女史 *Madame Scudery* などは、いづれも其の末流なり。ダルフエがものせし歴史傳奇は、譬へば我が文化、文政度の時代小説にひとしく、其人名、地名、事件の皮相等は、史に記せるまゝなれば、一見過去の事件を叙寫せるが如くなれど、其の實は、いづれも佛王安リ四世時代の宮庭の豪華、華麗等を寫したるものにて、稀には注意を惹くに足る佳處もあれど、概しては無味平淡にして散漫冗長なり。就中、其の『大サイラス物語』の如きは十冊の長きに涉り、讀者をし



てやがて厭倦に堪へざらしむ。總じて此の種の諸作は其の話の筋、いつも荒唐無稽を極め、剩へ千篇概して一律なりしかば、進歩する人智は之れに甘んずる能はず、やがてちのづから一反動を生ずるに至りき。ソーレル Sorel の "Francion"、フーレチエール Furetière の "Roman Bourgeois" の如き、又はスカロン Scaron の "Comique Roman"、『滑稽的傳奇』の如きは、いづれも此の反動の結果なりき。中にも後者は、そのころ珍しき冒險の物語にして、殊に滑稽洒落の書きぶり前代に其の類なく、且つ其の文體の卑近なること、恰も『大サイラス物語』の正反對を爲せりしかば、大に世間に歡迎せられ、新派の物語の祖先となり、やがて許多の門葉を生むき。是れ實に佛國小説の一轉機なりき。

さて前に述べし英雄的傳奇も、夙に英國に渡來して、多く摸倣者を生むたりしが、スカロンの新作も、程なく英國に渡り來りて、若干の追隨者を生むたりき。例へばアラ、ヘン女史 (Mrs. Aphra Behn) は、チャールス二世王の朝に、スカロンに倣ひて、或冒險談を作し、マンリー女史 (Mrs. Manley) もまたベン夫人の嚮に倣ひき。尙ほ此外にも佛國に起りて、英國に勢力を及ぼし、他の一昧あり、そは、ルサーマ (Le Sage) がものせし

"Gil Bias" "Devil on Two Sticks" 等なり。こは西班牙のサアヴンテスが作『ドン、キホーテ』の脈を受けて、冒險談のうちに近代の風俗人情を寫したるものにて、其の特質は滑稽と諷刺とにあり。

但し、かゝる作の行はれたりしは一時のことなり。英國民の性質は、屢と説ける如く、本來實際的なるが上に、諸種の自由制度發達して夙に自主獨立の氣風を涵養したりしかば、個々の私人生活に重きを置きて、空想をとほざけ、現實を貴び、何事をも事實の側面より研鑽するの氣習盛んなりしかば、いつまでも荒唐無稽なる傳奇類などを喜ぶべくもあらず、さればとて、或種の作物語を得て人生の面影を鑑賞せんことを欲するは、人情必然の要求なるがゆゑに、遂にはかゝる國情に適應すべき寫實文學の誕生を促し、近世小説の端やうやくに發かるゝに至りたり。

此の英國文學の革新期に當り、一方、舊派の殿となりしと同時に、他方、新派の魁となりし者は、實に、ダンエル、デフォー、其の人なりとす。其の名著『ロビンソン、クルソー』(一七二〇)は新小説の導火線となりしものなり。之れより先きにいでしモナムスのゼッフレイが『アットトン物語』(一一四七)トマス、マローリが『アーサー物語』(十

四世紀の中頃乃至トマス、モリアが『ユートーピヤ』一五一六、ジョン、リ、が『ユートーピヤ』一五七九、フィリップ、シドニが『アーカチヤ物語』一五八〇、ジョン、バンヤンが『天路歷程』一六七〇(?)、スウィフトの『桶物語』一七〇四の如きは、其の趣向と文章との上にこそやゝ小説めきたるところあれ、又は頗る小説に類したるもあれ、其の精神に至りては作家が純空想の所生なり、然らざれば只漠然と世間の状態を叙寫せるのみ。或はまた倫理説又は政治論に鼻目を附したるが如きものなり、嚴密にいへば、一として實生活と個人性とを描き得たるものはあらざりしなり。デフォーが『ロビンソン、クルソー』とても、今の所謂小説には遠けれど、尙其の人物と事件とを現實に有り得べきやうにものしたると間、期せずして多少性格をも寫せるとは舊傳奇類と撰を殊にす。

『ロビンソン、クルソー』の出で、大に英國小説讀者の好奇心を惹き起こし、時は、他方に於て劇詩と演劇とが著く衰退せりし時なりき。彼の十七世紀の初期に成りし脚本、乃至同世紀の末に成りし喜劇に耳目を喜ばせし觀客も、今や舞臺にては心の樂みを買ふを得ざりき。嘗てシェイクスピアの天才を喜び、コンクリ、ヴの滑稽を賞せし上流士女も、今は劇を観るの人たらずして書を読むの人となりき。而して彼等の讀まんと思みし小説は、彼の西班牙及び他の中世紀の物語類の如く、只管空想を挑發するに過ぎざるが如きものにあらず、はた佛國及び十七世紀の物語類の如く、單に日常の談話を再現して、彫琢せるが如きものにもあらずして、巧に現實の生活を描き、妙に個人の性情を寫し、或は以て處世の指導ともなり得べきものなりき。十八世紀以來今に至るまでの英國小説は、一として此の傾向に従ひ、此の需要に應じて生まれいずるものならぬはなし。さりとして舊傳奇より一躍して新小説に移るべくもあらねば、勢ひ一道の架橋を要しき。『ロビンソン、クルソー』は恰も其の橋梁たりき。

ダン、エル、デフォーは屠者の子にて、一千六百六十一年(我朝寛文元年、其積の生誕後六年、淺井了意在世)倫敦市にて生まれき。行末牧師とならんとて、齡十四の時同市の某學校に入りしが、苦學五年にして退きぬ。此の五年の外には正しき教育を受けざりしが、みづから力めて雜籍を耽讀し相應に博通の聞えありき。彼のモンマス公爵が宗教上の事より起りて反を謀りしや、デフォーは熱心なるプロテ

スタント宗徒なりしかば、たゞちに公爵に與せしが、事破るゝに及び遁走し、身を匿し、と數月、公爵赦せらるゝに及びてまぬかれき。其の後コオンホルに移りて莫大小の御賣を業とせしが、鬱勃たる企業心に驅られて西班牙、葡萄牙に航し、しばしば商業上の冒險を試みしが、失敗し、負債に堪へずして、プリストル地方に逐電しぬ。政治上にては、熱心に民權主義を執りしかば、一千六百八十八年オレンツ公(ウイリヤム三世)が兵を率ゐて英國に上陸せしや三四の友と共に遙に之れをオックスフォード州に迎へき。プリストルにては朝子商となり、活版職となり、三轉して煉化の製造に従事せしが、失敗して大負債を醸し、再びロンドンに逃れ歸りき。

プリストルに在留せしころ“*Essay on Projects*”を著しぬ、こは道路改良の事、救貧銀行設立の事、保險事務の事、佛蘭西のにひとしき大學設立の事、陸軍大學校の事、強募隊廢止の事、女子大學校設立の事、等に關する私見とを述べたる者なり、金錢貸借法改良案さへも論じたり。又曾て軍用金徵集に關する方案を發表してウイリヤム三世王に知られ、一千六百九十五年其の賞として玻璃稅局の事務官に任ぜられしが、後四年玻璃稅の廢止と共に其の職を罷められき。當時、國內ウイリヤム三世を正統な

る英國皇統の君ならずとして非難する者多く、中には「異邦人」と題したる惡詩を作りて王を誹謗するものありき、デフォー乃ち王と和蘭國とを辯護するの主意にて諷刺詩“*True born Englishman*”「正統の英人」といふを世に出だしぬ。世人争うて此の詩を購讀せしかば、瞬くうちに無慮八万部を賣り盡くしきといふ。此の詩の劈頭なる、上帝が祈禱堂を建設する處、惡魔はた常に拜堂を設く、而して検査すればすなはち後者の會員ははるかに前者の數にまされりといふ主意の四句は、世の人口に膾炙せる者なり。此の詩篇に次ぎて著し、は“*The Shortest Way with the Dissenters*”『折伏捷徑』(一七〇二)なり。此の著の中に冷語を下して曰はく、異教者を信服せしむべき良策は、彼等の耳を切り、鼻をそぎ、頸手枷臺に曝し、牢獄に幽閉するに如かずと。而も世人此の書を誤解せしかば、更に其の解説を物せり、當時の國教黨之れが爲に驚きき、下院も此れを以て甚しき誹謗の文字なりとし、デフォーを逮捕せんとしたりしかば、彼れ逸早くも其の跡をくらしぬ。さて深く潜伏して人に知られざりしが、論文の發行人と印刷者とに累を及ぼしたりと聞きても、だしがたく、そを救はんとて自首し、二百磅の罰金を科せられ、三日の間頸手枷臺に曝され、剩へ女王の

心とくるまで(當時ウィルヤム三世王既に崩じて女王アーンの御宇となれり)禁獄せらるべき身とはなりぬ。彼れは頸手枷臺の上にありながら、刑臺を象字形のゆゑしき器械と呼びて、戯れに其の頌歌をものしき。"Hymn to the Pillory" 是れなり。デフォーはニュートンの牢獄に在りし間も、決して光陰を徒消せざりき、此の際彼れは其の『評論』(カウ)英國に於ける文學兼政治雜誌の嚆矢(カウ)を創製しき。初めは毎月二回の發刊なりしが、後には三回發行するとし、徹頭徹尾己れ一人にて編輯しき。是れ後に『タトラア』『ガーヂヤン』『スペクテーター』等の諸雜誌を呼び起すべき導火線となりき。(獄を出でし後も依然『評論』に筆を執り、八年間其の業を繼續しきといふ、或は十年間ともいふ)。獄中に在りしと殆ど二年、一千六百年に至りて赦され、後幾程もなく女王アーンの刺を奉じて英蘇兩國合同事件の委員となり、専ら其の事に努めしが、元より商事に長じければ兩國の貿易上の關係につきて技倆を顯し、事少からず。

一千七百十三年(五十二歳)再び其の筆によりて思はぬ災を招きし。即ち「ハノロブ」家の繼承を難ずるの理由「フリテンダア」來たらば如何「何人も思念せざる間に對する答、即ち女王陛下かくれまさは如何」の三論文を草し、忌諱に觸れて禁錮せられき。

一千七百六年には『ギール夫人の幽霊』を著し、一千七百九年には『英蘇合同史』を出だし、同十五年には『家庭の師』といふ教訓の書をものしき。彼れは今や既に六十に垂とし、常人なれば氣力大概は消耗し、物の用には立つまじき年齢なれど、彼れの不屈不撓なる精神は、老いて益壯にして、一千七百十九年四月に其の名著『ロビンソン、クルソー』の第一巻を作しき。それより同八月に至りて、第二巻を、又翌年八月に第三巻を出だしぬ。此の書の好評判前古無比なりしかば、更に引きつゞきて三種の冒險物語を出版しぬ。"Duncan Campbell" "Memoirs of a Cavalier" "Captain Singleton" 是れなり。一千七百廿二年又た三種の書をものしき。"Moll Flanders" "History of Plague" (倫敦大疫病記) "Colonel Jack" 是れなり。『龍動大疫病記』殊に名高し。又一千七百二十四年には『ロキザナ』、『幸福なる夫人』及び『大武烈顛漫遊記』を作し、一千七百二十五年には『世界新航行記』、『完全なる英國商人』を出だしぬ。前者は例の如き冒險物語、後者は商人必携とも稱すべきものなり。それより後ち一千七百二

十六年には『The Political History of the Devil』『悪魔の政治史』を出だし、一千七百二十七年より二十八年にかけて『The Plan of English Commerce』『英國商業策』を出だしき。

當時デフォーはストーク・ニュー・イングトンに住し、暮らし向き贅澤にして、収入に超えたる奢侈に耽りしため、負債山の如く、遂には逐電して身を潜め、後にはムーアフィールド邊に卜居せしが放逸なりし六人の見思ひくりに離散して、毫も父を顧ざりしかば、此れがためにも少からず心をいたため、加ふるに老衰漸く至り、一千七百三十一年竟に溘然として七十一年の煩生涯を終へき。

デフォーを論ずるもの、何れも斷言して曰ふ、彼れは到底親み交るべき人物にあらず。彼れは口常に廉潔を唱へながら、行ふ所常に卑劣なりき、一方にてはチャコピン黨の爲に筆を執りながら、一方にては時の政府より保護金を受けてチャコピンに反するの舉動ありきと。或傳記家は彼れを評して、恐らくは未曾有最大の食言者ならんと言へり。

デフォーが文學上の著書の中、最も有名にして又最も見るべきは、言ふまでもなく

『ロビンソン・クルーソー』なり。此の書の、その作者に於けるは、猶『失樂園』のミルトンに於けるが如く、『ロビンソン・クルーソー』といへば、隨うてデフォーを憶ひ起こし、デフォーといへば隨うて『ロビンソン・クルーソー』を聯念す。彼れをして英國文學史上に不朽の大名を博せしめたるものは、實に一部の『ロビンソン・クルーソー』なりとす。故に此の書の委曲を解すれば、彼れが文學的著作の全斑を推するに足るべし。

按ずるに、デフォーの時を距ること遠からざる前に、アレクサンダア、セルカアク(或はセルクレイク)といふ水夫ありしが、太平洋を航海せし中、船長ウィヅ、ロイヤルと争を生じ、其の結果只一人チャアン、フェルナンデスの無人島に取り残されて、孤棲數年に及びたるが、其の後船長ロイヤルに助けられて本國に歸り來りき、其の事の顛末は載せて、ロイヤルが自著『世界周航記』の中にあり。デフォーが『ロビンソン・クルーソー』は此の事實に基きて構案せしものなると明かなり。例によらば、こゝに此の名作の梗概を紹介すべきなれど、又思へば、此の書のあら筋を心得ぬは世に稀なるべく、煩を厭ひて悉く畧しつ。

シローは此の書を評して曰はく

クルーソーは、あくまでも普通の人間なり、故に老若男女を問はず、彼れに同感し、彼れの喜憂を見ること、猶自己の喜憂を見るが如くす。クルーソーが智も、クルーソーが先見の明も、一として人間の普通性以上には出でず。例へば非常に辛苦して獨木舟を造りたるも、初より其の舟の重くして船卸に堪へざらんを悟らざりしが如きは是れなり。されば、讀者の中、百中の九十九は、我れも斯かる場合に、斯かる先見に暗き事を爲すならんと思ひて、容易くクルーソーに同感す。思ふに、年若きものに此の書を讀ましむるは恐らくは、多少の害あるべし。此の書が、如何に多くの兒童をして水夫とならしめしが、測り知るべからず。

と。げに、此書の價値は、主人公クルーソーが奇傑の士にあらざる所にあり。彼れは常人の力量と常人の知識とを有せし人に過ぎず、而も如何なる災厄、失敗、困苦にも堪へ、常に件の力量と常識とを用ひて、自ら工夫して其の難を免れんとする所、實に萬人の同感に適す。この書が内外教育界の珍寶となりて幼年者が心力開發の好材とせらるゝは故ありといふべし。博士ヂュンソンは曰はく、「一人の手に成れる著書にして、讀者の卷を終ふるを惜しむは『ロビンソン、クルーソー』と『ドン、キホー

テ』と『天路歷程』とを除けば他になし」と。以て此の書のもてはやさるゝを知るべし。デフォーは一世に珍しきばかり健筆多作の人なりしかど、元來詩人、美術家の資にあらざりしが故に、その想像や、觀察や、すべて實務家的にして、只管に事相の要領を逸せざらんとを眼目とせしに似たり。さればその文を草するや必しも結構、修飾を力めず、日常の座談にひとしく、任意に述べ去るを常としたり。語句の重覆、句調の良否、感興の深淺などは初めより問ふ所にあらざりしなり。さもあれ、事實らしく見することには心を注ぎ、事を叙すれば、年月、日及び時刻さへももらすことなく、僅かに風ありと記すにだに必ず方角を精示せりき。かゝる蕪雜煩瑣の記叙の筆が讀者をして卷を措く能はざらしめしは驚くべきに似たれど、彼れの作を讀みて起す感興は、大方世變、人事の實感にして、毫も詩的想像より來る漂渺の興にはあらざりしなり。傳へていふ、オックスフォードの市長某深く此の書を愛讀し、暇ある毎に繰り返すを無上の樂とし、これを徹頭徹尾事實の記録なりと思ひ居りしに、或日其の友某より此の書の全く作物語なるよしを聞きて大に嘆息し、我が老後の最大快樂を奪はれきとて其の友を怨みきとなん。此の書の如何にも實らしく書き做

されたるかは此の一事にても著けし。但し、シーの言へる如く、クルーソーの如き境界に臨まば、何人も其の云爲するところクルーソーに異ならざるべし、即ちクルーソーは人間に普通なる性情のみを具へて未だクルーソーに特得なる性格を有せず。又此の書は、其の結構よりいふも、書きぶりよりいふも、美文的にあらず、即ち起伏の妙なく、省筆の奇なく、篇中一として複雑なる人事の纏綿せる箇所なく、濃厚なる人情の味はるべき箇所なし。是れ即ち此の書を眞小説と名くべからざる所以にして、隨うて又デフォーを眞小説家と稱すべからざる所以なり。

四四〇

第七章 サミエル、リチャードソン

リチャードソンの生涯——書信牋の小説——著作——『パメラ』——その批評  
——『クラリッサ、ハーロー』——その批評——『士爵チャールズ、グランサソン』  
——その批評——總評

デフォーの『ロビンソン、クルーソー』は、當時に於ては、眞に斬新の作なりしが、事の實を寫すに審なるも性格の實を寫すに粗なりしかば、未だ眞の小説とはいふべからざりしに、サミエル、リチャードソン、いづるに及びて心理小説の緒始めて發

かれたり。リチャードソンの名を著し、は、一千七百四十年以後のことにして、其の作家としての全盛期は、須からく十八世紀の第二期、即ちゴッス氏の所謂デ、ン、ン、ン時代に屬せしむべきものたること勿論なれども、こゝには英國小説發展の大順序を同時に通覽するの便宜を思ひ、態と第一期中に攝入し、兼ねて其の他の諸小説作家、ファイルデング、スモーレット、スタアン、等、すべて第二期に屬せしむべき諸家を併叙したり。讀者は宜しく此の意を會してリチャードソン以下の作家は、其の年代の順序よりいへば、デ、ン、ン、ン以後に來るべきものたることを記すべきなり。

リチャードソンが經歷は、單純なれば、格別にとり出で、叙すべきほどの事なし。彼れはデルビ州なる指物師の子にして、謹慎勉勵なる買人なりき。一千六百八十九年(我が朝元録二年、井原西鶴四十八歳)に生まれたりしが、父の資産豊ならざりしかば、僅かに其の地方の小學に送られて尋常の教育を受けしのみ。幼きより物語をなすに巧なりしかば、其の小學校に入りしや、衆童に愛せられしと、ウォルター、スコットの幼時にひとしく、常に群童に圍繞せられて種種の物語をなしきといふ。且つ其の柔和温良なる性は、自然に女性の同感を呼ぶに適し、此の未來の小説家をして夙

に婦女社會に接せしめき。而して女性の中には、夙にリチャードソンの才能を認め、て奇なる役目をなさしめしめしもあり、すなはち其の情人に艶書を送るや或はリチャードソンをして代筆せしめ、若しは拙きを添削せしめき。按ふに、リチャードソンが特に婦人の性情に通曉せしは、一つは其の性質にやゝ女らしき所ありしにも因るならめど、又一つは斯かるめづらしき便宜を有したりしにも因るならん。十五歳の時、父の吩咐にて倫敦におもむき、ジョン、ワイルドといふ活版師に奉公し、七年の年期を終へて後も、尙植字方、校合方となりて五六年を過ごし、後遂にソールズベリ、コートにてみづから業を營み、舊主人の女を娶りて妻となしき。彼れは爲人柔和廉潔なりしのみならず、頗る事務上の才能に富み、加ふるに市人としては稀有の文才を備へたりしかば、書肆皆彼れを重む、或は書籍の索引を作らしめ、或は序文、贈呈の辭等を作らしめき。就中、書肆リギンクトンとオスボオンとは彼れが書信文に巧なるを知りて通俗用文を綴らんことを乞ひしに、リチャードソン曰はく、むしろ教訓兼帶の者とせば如何と、書肆、更に妙なりといふ、リチャードソンすなはち其の著けりと加へりしが、ふと思ひつきて、若し此等書信文を互に關係あるものとして連続

せしめ、且つ成るべくまことらしく物して一篇の物語となさば、或は文學上に一新體を開くにも至るべく、兼ねては荒唐奇怪なる傳奇小説をよろこぶ讀者を宗教道徳の方面に向かはしむる一助ともなりぬべし、と思念し、嘗て一友人より聞きし話の尙記憶に残れるを幸に、そを一篇の骨子として、遂に書信體の小説をものしけり、*Pamela*一名『美德のむくし』是れなり。『*Pamela*』は、蓋し、シドニの『*アーカヂヤ物語*』に見えたる女性パメラの名を借りたるなるべし。一千七百三十九年十一月十日起稿、翌一月十日脱稿、全部二冊、一時の出版なり、リチャードソンが五十歳の處女作なりき。此の書の評判たゞちに全國に傳はりければ、人々争うて購讀し、就中年少婦人の歡迎は殆ど崇拜の度に達しき。此の著はひとり俗間にもてはやされしのみならず、アレクサンダー、ポープの如きも、此の書を評して人を感化するの力、説教文二十卷にも勝るといひ、博士シユルックもまた、其の説教壇上にて、此の書を世人に推薦せしかば、發賣後一年にして五版を賣り盡し、和蘭、佛蘭西等の外國もまた相ついで之れを翻譯するに至りき。

英國從來の小説類は、前にも言へる如く、大抵其の材料を荒唐奇怪なる、あるまじき



事柄に取り加ふるに作中にあらはるゝ人物も概して貴公子、貴婦人と限られ、剩へ人物の大概は現實の人間といはんよりは、むしろ一種の怪物ともいふべきが多かりき。デフォーが作は、此の常套を破りて、大に新趣味をもたらしたりしが、尙其の結構に、叙寫の法に、未だ眞の小説たる體を具へず、且つ前にもいへる如く、其の人物も單に通性を具へたるのみにて、殊別の個性を現せざりき。然るにリチャードソン出るに及びて、眞成の寫實小説の端を開き、ひとり人物と事件とを實際に取れるのみならず、因縁の關係を複雑にし、心性の秘密藏を聞き、個々の人物をして殊別の性情を現せしめき、リチャードソンを以て英國小説の鼻祖なりといふは此の故なり。但し、其の餘りに煩瑣冗長なるが爲に、尋常讀者の嗜欲は、スコット、サッカレー、ヂッケンス、エリオット等の鹽梅せる一層甘美なる珍羞の方へ牽かるゝや疑なしと雖も、さりとして彼の舊傳奇の陳腐爛熟なる調進に比し來たれば、其の料理の精妙なる、眞に驚くべきものあり、ひとり當代に愛玩せられしのみならず、近くは佛獨の文壇にもてはやされて、間接に佛國及び獨逸新文學の導火となりしこと、異しむに足らざるなり。リチャードソンは人のすゝめによりて後更に(一千七百四十一年)『バメラ』の續篇二

卷を綴りき、但し、こは前二卷に比していたく劣れり。

『バメラ』の成功の未曾有なりしによりて、著者は更に第二の作に着手し、一千七百四十八年其の傑作と稱せらるゝ“*Clarissa Harlowe*”を著はしき、全部七卷、こもまた書信牒の小説にして、第一卷と第四卷とに訓誡の旨を述べたる文を添へたり。此の書の世に出でしや、好評『バメラ』にもまさり、年少婦人等は、其の女主人公が、ありとある災厄に遭遇せるを見て、結局如何に成ゆくらんと心を痛め、わざ／＼著者に書を送りて主人公を災厄の中より救ひ出だしてよと乞ふもの、引きも切らざりきといふ。一千七百五十四年更に第三の小説“*Sir Charles Grandison*”(全部六卷)を著しき。こは競争者、マイルデンクの死に先ちしこと一年なり。此の書は明かに失敗の作なり、上流の言語風俗に爛はざる作者が、ひとへに訓誡を眼目として、力めて上流の(而も理想の)人物を描かんとしたれば、無理なる處甚だ多し。

さるほどにリチャードソンの名聲やう／＼高く、其の信用將た他に超えしかば、遂に衆議院の印刷物を一手に引受くるの特許を得、一千七百五十四年頃には、選ばれて文房具組合の會長となり、一千七百六十年には國王の御用印刷株の一半をさへ購

ひき。ソールズベリ、コールドなる其の印刷所と倉庫とが、大なる家八棟までを取毀し、跡に建てられきといふをもても、其の業務の盛大なりしを察すべし。一千七百五十五年までは、市中の北端なるハンマテスミスに住居せりしが、同年パーンス、グリーンなる住家に移りき。一千七百六十一年、七十二歳を一期としてみまかりぬ。先妻は之れより先き一千七百三十一年にみまかりたり、後妻は一書買の妹なりき。先妻の腹に五男一女ありて、後妻の腹に五女一男ありけり、其の中男子は悉く夭折し、女子も二人だけは早世しき、残りし四人の女等は皆よく父に事へきとぞ。

リチャードソンの著作は『バメラ』『クラリッサ』『グランヂン』の三篇あるのみ。此等皆心たゆまるゝ書信牒の小説にして、通讀せられざるを常とすれば、管々しけれど作の大筋と聰明なる評論の一斑とを擧げて、其の品質を窺ふの便に供せん。まづ『バメラ』一名『美德のむく』の概略を言はん、或老刀自の召使に、バメラといふ清淨無邪氣なる齡三五ばかりの一少女あり、刀自の子なる若主人 Esquire B. といふも、バメラの容色に迷ひ、さまざまに挑めども、心正しきバメラはなびかかん色なし。

果は怒りて、罵り、はづかしめ、或はすかし、或は物をとらせ、或は苛責し、或は幽閉し、待遇非道を極めたりき。さりながら、此の肉牒の苛責よりも、バメラに取りて一層つらかりしは、我が良心の苛責なりき。人こそは知らざれども、我が心もまた、ひそかに若主人を戀ひ慕へり、さはあれども、處女の操の清淨を犠牲にして人のもてあそびとならんとは、道心堅固なるバメラが心の許さざる所なり、さりとして正妻となり得ん望も無し、こゝに於てや、あくまでも身心の苦痛を忍び、露ばかりも誘惑に應ずるの色なし。バメラは實に今の英佛の理想的女子に似たらんよりは、はるかに我が女大學的淑女に似たる、内氣にして小心なる少女なり。さて此の間に意地悪き女性などもからまりて、バメラの災厄殆ど極點に近くちかに及びて、非道なる若主人も遂に動かすべからざるバメラの清徳に感じ、驟然其の邪なる心を改むるに至り、やがてバメラを擧げて正妻と爲すに至る。云々。

以上『バメラ』の骨組なり。篇中の書は概してバメラより其の父母に送りたるものなり。

當代の士女が、思ひがけなくも此の書に接せしや、さながら虚偽、不自然の境を脱し

て、真理、自然の境に歸りたらんが如くに、感じ、如何に甚しく喜悅せしかば、スコットの嘗ていへる如く、彼等が催眠と欠伸とを禁ずる能はざりきといふ、彼の荒唐無稽、蕪雜平板なる舊傳奇の一二種を繕きて相照し見ば、之れを知るに足らん。道義の理想一變したる今日より見れば、リチャードソンが女主人公の品性が完全ならざること論を俟たざれど、又其の餘りに優柔脆弱にして凜然たる氣概に乏しきが如きは、専ら訓誨の爲に作られたる主人公として見れば、殊にうなづきがたき所なれど、之れを當代の寫實的小説の主人公として見れば、近世小説の中にだに容易く見いだしがたき妙趣あり、バラムは尠くとも此の書を耽讀するの間普通の讀者をして知らずく、其の善良なるに同感せしめて、他を思ふに遠なからしむるの魔力あり。

『クラリッサ、ハーロー』のあら筋は左の如し

豪家の女クラリッサは才色兼備、實に當代の理想的淑女なり、而して其の父、其の兄、其の姉、其叔父、皆當代に實在せし種々の惡徳をもてる不仁の人物なり。頑固專斷なる父はクラリッサを強迫して卑劣なる人に嫁せしめんぞす。クラリッサが之れを諾はざるより全族一致して之れを虐待す。クラリッサ遂に堪へられて其の意中の人ラヴェー

スの許に身を寄す。ラヴェーリスは輕薄無慙の徒にして、好才子の雛形なり、其のクラリッサを愛すまじふは只一時のもてあそびにせん、心に外ならず。假面漸く墮ち來るや、彼れの非道の振舞のクラリッサを苦しむること限なし。クラリッサ、情に於ては彼れを戀ひながらも、理性は、其の爲人の卑劣なるを賤し、結婚を拒み、竟に悲のあまり斷腸して死す。奸人ラヴェーリスは一旦英國を去りしが、後クラリッサの親戚、大佐モルデンと決闘して殺さる、云々。

篇中の書信はクラリッサと其の友なる一嬢との間の贈答、及びラヴェーリスと其の友デモン、ベルフォードとの間の贈答より成れり。

此の書はリチャードソンが最傑作なりと稱せらる、そのころ、佛蘭西にて、此の小説の名聲頗る高く、デドロアの如きは、ホトマア、ユーリビヂーズの著と并稱し、又ルッソは明かにこれを模倣して其の小説を作り、アルフレッド、デ、ムーセの如きも、これ實に世界最良の小説なりと稱しき。ショー曰はく

リチャードソンは、其の天性、境遇、ふたつながら、男性を描くよりも女性を描くに適したれども、此の篇のラヴェーリスの如きは、描寫間然すべきなく、靈妙精緻、一切の文學中、稀に見る所なり。ラヴェーリスといふ名の、何れの國語にても、女殺の手管に長けたる遊治郎の變名となれるが如きは、其の人物の活けるが如くに描かれたる明證とすべし。

と。ヘッス氏は曰はく

男性に於けるも既に然り、まして女性たるクラリッサに至りては、文學中に於ける最も活動せる又最も同感を表すべき婦人の一人なり、彼の女の缺點の却りて彼の女をたふさき者とし、彼の女の弱點の、却りて其の節操に勝利の冠を與へしめたる、即ちリチャードソンがクラリッサを寫すの巧妙熟練なる所以なり。(中略) 著者がラヴェリースの性格を寫すや、苦心大方ならざりきといふ、何ぞなれば彼れをして純粹の惡漢と作りなせば、全篇の主意これが爲に破壊せられん、故に機懸敏捷なる人物に作りて、當時の風流紳士の難形を現したり、且つハーロー家の親屬にして、現にクラリッサの死を目撃せし大佐モルアンをして、彼れと決闘せしめ、竟に之れを殺すこととなして、應報の理を示しき。云々。

『サー、チャールズ、グランヂソン』の主人公グランヂソンは、才徳兼備の紳士なり。此の作には女主人公二人あり、一人をクレメンチナといひ、一人をハリエットといふ、いづれも令徳の淑女にして共にグランヂソンを慕へり。クレメンチナはグランヂソンがハリエットと婚するに至りて、失望悲痛のあまり狂亂す。クレメンチナが狂亂のくだりは、本篇中尤も出色の文字なり。著者は、本篇中にて、決闘の非を論じたり、されば主人公グランヂソンをして他と決闘せしむるにも、其の拳法の

精妙なる能く武器を用ひずして敵の劍を奪ふとやうに作れり。ショーの批評は、能く此の篇の長短を盡せるものなり、曰はく

蓋し、リチャードソンは三小説をもて三種の階級を描かんことを試みたり、即ち『パメラ』にては下等社會を、『クラリッサ』にては中等社會を、『グランヂソン』にては上等社會を寫さまくせり。されど、彼れば、其の教育の上よりいふも、位置の上よりいふも、上流社會に於ける思想感情に通ぜざりしかば、其の叙寫は多く推測より出で、不具なり、所詮彼の大世間の風習に慣れざる、教育の不完全なる人の陥りやすき誤謬を免るゝこと能はざりき。彼れは絶えず上流の用語を描さんとして苦心せしかば、其のギクシヤクとして殊更めける言語は、之れを實際と對照し來たれば、甚だ笑ふべきものなり。夫れ、上流に立てるやからは、上に模倣すべきものなければ、舉動おのづから虚飾を脱し、用語なども平易自然なるを例さす、然るにリチャードソンが嘆美すべしとせざる人物を見るに、俗に謂ふ牛可通とも稱すべきものにて、小説中に在りても、實際に在りても、厭はしきものなり。されば此の篇の中に、吾人の同感し得べきは、若干の弱點過失ありて不自然なる圓滿の弊を脱し、人間らしく見えたる人物のみ、例へばクレメンチナが狂亂の如きは、フレッチャーの筆さしても耻づかしからず、其の哀れ深く物せられたる、グランヂソンよりもハリエットよりも一層旨味深し。リチャードソンは其の性女性に似たり、彼れが叙寫の長やかにして、綿密なるは其の自然の結果なり。ハズリットは曾て此の篇を讀みて、著者がグランヂソン夫婦が、新婚の職衣を叙狀するに十二頁を費したりきて咎めたるが、

後に或少女が、此のくだりこそ篇中の最も感動すべき挿話の一つなれど、現に其の全文を寫せるを見出だして驚きぬ、以て其の如何に女性に愛讀せらるゝの特色を具へたるかを知るべし。はづめリチャードソンが此の作を編まんぞせしや、其の中なる上流社會の用語に誤謬あらんことを恐れ、或貴女につきて是正を乞ひしに、誤謬矛盾餘りに甚しかりければ、遂に正誤の望を絶ちきざ。按ふに、人間、就中女性の性情を根氣よく解剖したる點に於て、又微細なる出來事及び綿密なる叙寫をいやが上に積聚するの傾ある點に於て、并に其の感情のやゝ不健全なる點に於て(勿論國民及び時代の異なるありさいへども)バルザックとリチャードソンとの間に著く相似たる所あり、云々。

要するに、リチャードソンは神經質にして誠實温厚の人、やゝ悒鬱病ヒステリヤの傾ありて滑稽の能と敏捷なる才氣とは缺如たりしかど、女性に對する異常の洞察力と一種の文才(少くともその所思を十分に表現するの技倆)を有せしなり。冗長は彼れの失なりしかど、その綿々として際限なき冗筆の間、部分の描寫の、全體の結構に照らしてその割合を誤らざりしは多とすべし。この點に於ける彼れの技倆は、フィールディング及びスモレットの上にある。

## 第八章 ヘンリ、フィールディング

リチャードソンとフィールディング——フィールディングの本領——生涯及び

著作——「ザロセフ、アンドリュース」——「ザロナサン、ワイルド」——「トム、ザノンス」——「アマイヤ」——總評

粗豪磊落個人としても、作家としても、リチャードソンと直反對なりし作家をヘンリ、フィールディングとなす。コールリッチ、嘗て一家を評して曰はく、リチャードソンの作を讀みて後に、フィールディングの作を讀めば、暖爐もて暖められたる病室をぬけ出で、風薫る夏の初めに、廣やかなる緑野を逍遙するが如しと。リチャードソンは哀傷し、フィールディングは戲謔す。彼れは沈鬱にしてこれは快活、彼れは常に愁へ、常に怖れ、常に懸念し、常に苦慮し、嘗て安心する能はざる神經家の如く、此れは放言笑諷、嘲罵冷刺、念頭些の苦勞を感ぜざる多血男兒なるが如し。リチャードソンは女々しき悲劇の旦末に比すべく、フィールディングは荒々しき喜劇の淨丑にくらぶべし。リチャードソンは個人としては謹慎敬虔の良市人なり、フィールディングは放逸粗豪の遊蕩子也、前者は常に神明を畏敬し、後者は屢、酒色に荒みき。小説の作家としては、リチャードソンは狭けれども深く、フィールディングは廣けれども淺く、前者は専ら女性的人格を畫くに長じ、後者は廣く諸性癖を寫せり。要するに、リチャードソンは個人

としても、作家としても、終始規矩準繩によりて進退し、フィールディングは之れに反し、一舉一動、ひとへに自然の性に從へり、かるが故に、一は窮屈に狭く、一は自由にしてのびらかなり。フィールディングの作中にあらはるゝ人物は、男女老弱を問はず、皆活潑なり、皆快活なり、善く談じ、善く歩し、善く食ひ、善く飲む。就中、男性に在りては、喧嘩、口論、争鬭、刃傷は不斷の事たり、隨うて作中の人物、一人として多少の缺點を具せざるはなし。痴愚ならざれば、頑陋なり、頑陋ならざれば、浮薄輕佻なり、浮薄輕佻ならざれば、僞矯、僞矯ならざれば、貪婪、貪婪ならざれば、多情、いづれも道德上より謂ふときは不具の徒なり、約言すれば、式亭三馬が戯作中の人物に一層判然たる性格を附與せるが如きものは、是れフィールディングが最も得意とせし第二流の人物なり。また彼れが小説は、概して郊外の事に關す、リチャードソンの小説の主まに深窓及び室内の事に關せるとは反對なり。フィールディングの作は、一面よりいへば旅行記に類す、譬へば、我が武者修行の物語を一層世話に崩したるが如し、回毎に局面あらたまり、新事件起こり、新人物出づ、殆ど應接に遑あらず、而も一篇の主人公は猶光る君の『源氏物語』に常住オムブレセント常現なるがごとく、彌次郎兵衛、喜多八の『膝栗毛』に通在せるが如く、毎

に其の間に出没し、對手變はれども主變めいはらざる脚色なるが故に、首尾相つながら、脈絡相貫くを得たり。

按ふに、リチャードソンは、強ひて人性の高雅なる側面を寫さんと欲して文に流れ、フィールディングは、只管當時の實相を模寫し來たりて、おのづから野に失したり。リチャードソンは十八世紀の理想的人格を描かんと力め、フィールディングはありのままを寫すことを悦べり。小心謹直なるリチャードソンは、當時の亂倫に寒心して殆ど笑の能力を遺却し、蕩迭磊砢なるフィールディングは、此の大自由の生活に流連して殆ど其の涙を失はんとせり。フィールディングも、もとは多情多感の才子なり、時に自他の爲に流涕せしことなかりしにはあらず、彼れは優かにユーモリストたるべきの資格を具して、哀傷ペニスを寫破するの筆は、た頗る見るべき者あり、されど惜むらくは、彼れが同悲は膚淺ならざれば、暫且、暫且ならざれば、浮泛フエツなりき。蓋し其の落々たる氣質は、長く一事に執着して、深く沈想する能はざりしなり。要するに、武人的にして詩人的ならず、男性的にして女性的ならず、活動的にして瞑想的ならず、是れフィールディングの小説作家としての特質なり。彼れは十八世紀の大腐敗を觀るも、他

の情に脆き詩文人の如く、徒らに悲愁憂悶し、沮喪絶望するの女々しさには陥らざりしが、さりとして此の墮落に感慨して、まづみづから己れを淨うし、進んで同胞をも淨うせんなどの大なる志望を抱きしとも無し。こは其の作の滑稽的なるが故にいふにあらざり、作意の表よりいへば、彼れもまた一種の勸懲主義者の如く思はるゝがゆゑにいふなり。彼れは現に其の作「ジョセフ・アンドリュース」の序中に曰はく、悲哀嚴格の調子は却りて世をそこなふの虞あり、談話滑稽こそはむしろ人をして善良なる氣質を養成せしむるものなれど。こは或はリチャードソンが作意を嘲らん爲に、殊更に立てたる言にもあらめど、其の所謂談話が純乎たる無邪の滑稽にとまらざりて、其の裏に諷刺教誨の旨毎に籠りて、會釋なく不徳弱點を指摘し、剔抉し、暗に當代を矯治せんの意のほの見ゆる以上は、彼れはた勸懲家たるの名を辭する能はざるべく、また決して辭退せんと試みざるべし。彼れは自然を愛するも、彼のシェイクスピア、ゲーテの如く無私公平に愛せしにはあらず。彼れは毎に是非善惡を批判す、即ち純粹の美術家にあらずして、アングロサクソンの美術家なりき。されば、其の人の性格を描くや、之れを自然の勢力として描けるよりも、むしろ褒貶すべ

き世間の勢力として描けるものゝ如し。すなはちフィールドングは、心理家にして兼ねて裁判官なり、諷刺家なり、勸懲家なり。但し、嚴密にいふ時は、フィールドングをして勸懲家たらしめしは、時勢、時尚の然らしめし所なるべく、而して其の作の野に失して高雅の側面を逸したるも、ひとしく時尚の所爲とやいはん。彼れにして若し十九世紀の文壇に生まれれば、豈必ずしもかくの如く野ならんや、技倆の上よりいへば、彼れはデッケンス、ザッカレリ等に比して、或は優るとも劣ることは無かるべきなり。

ヘンリ、フィールドングの父はデンハイ Denhigh 伯爵が孫にして、陸軍の將官なりき、其の母はた一裁判官の女なりきといふ。一千七百〇七年四月、我が朝寶永四年、湯淺常山生誕の前年、サマアセットシャヤなるシャープハム、パークにて生まれき。其の父家眷おびたしく、而して經濟に拙かりしかば、家計風に不如意となりき。ヘンリは其のはじめ、イトンの學校に入學し、後和蘭オランダに往き、ライデンの學校に入り、法律を修むること二年、二十歳の時、學を廢して本國に歸り、作劇家となりぬ。其の初作「Love in Several Masks」は一千七百二十八年に成れり。爾後五年間に作せし

脚本都合十七篇、其の中にて「Tom Thum」と題せる滑稽劇は尤も世にもてはやされき。されど、文學上の價值よりいへば、此等は皆失敗の作と稱すべし、フィールディングは寫實小説家の鼻祖としてこそ頗る稱すべき價あれど、劇の作家としては重きを置くに足らず。彼れは、其のころ某資産家の女を娶りて、家計やゆたかなるを得たりしかど、性來の放蕩と奢侈との爲に、幾ばくもなく此の新家産をも蕩盡し、進退谷まるに及び、千七百三十七年、處世の方針を一變し、法學中院に入りて法律學を學び、同四十年狀師たることを公認せられき。されども其の微薄なる所得は、家政を維持するに足らざりしかば、舊時の如く屢、新脚本に筆を染め、若しくは政治上の小論文を草し、之れを賣りても糊口の資とせり。其のころ、政治上に執れりし主義は、デフォー等にひとしく、民權自由の説なりき。一千七百四十二年、リチャードソンに對抗して始めて小説に筆をつけき。「History of Joseph Andrews」「ヂョセフ、アンドリース物語」是れなり。蓋し、フィールディングは、彼の徹頭徹尾訓誨的にして、不自然、陰鬱なるリチャードソンが作を讀みて、痛く不快を感ぜしや明かなり、こゝに於てや、一は此のかたはら痛さを癒やさんと欲し、一は競争の念も加はりたれば、好評噴

々たる「バメラ」を取りて翻弄一番せんと欲し、こゝにバメラの兄ヂョセフ、アンドリースといへる者を作り設け、バメラが處女の潔白を守りて若主人の戀に應ぜざりし如く、アンドリース將た青年男子の貞潔を守りて、一向に一寡婦の愛着を排斥するくだりを以て筆を起し、それより筋を轉じ、脚色を設けてバメラの作意を諷刺するうち、そゝろに詩興を催し來りて、遂に純然たる一部の滑稽小説を綴り終るに至りしなりき。「ヂョセフ、アンドリース物語」はかゝる手續にて成りしなり。著者はこの書の表紙に「サアヴンテスに模すと記し、又緒言中に「散文の滑稽叙事詩なり」と言へり。もとより偶然に成りたるにひとしき作なれば、その体裁の不整頓なるを推して知るべく、著者自らもまた「バメラ」の諷刺にとて作れるなれば、已むを得ざる由を屢、ことわれり。されど篇中の人物バーノン、アダムス及びフリービー女の如き、いづれも其の得意の人物なれば、諛語百出して言動活けるが如く、優かに滑稽小説の一傑作たるに恥ぢず。

翌年『雜集』三冊を著せり。「A Journey from This World to the Next」「この世よりあの世への旅」及び「Mr. Jonathan Wild The Great」「大盜ヂョナサン、ワイルドの傳」の二著はこの



中に含まれたり。後者は當時の記傳家が人物の傳をものするに當り、偉大といふ點にのみ眼を注ぎてその善徳といふ一面をば遺却し、ひたすらに浮華溢美の辭を弄するを諷刺し、偉大なる悪人デナサン、ワイルドの逸事をわざと放大浮靡なる時様文を以て綴りたるものなり。篇中また叙事の妙文に乏しからず、作者の聞見知識の博廣なることを窺ふを得べし。この書、實は『ジョセフ、アンドリュース』よりも前に脱稿せしものなりといふ、果して然らばワイルディングが近世社會小説の祖となりし素の既にこの際に成れるを見るべし。

それより數年の間ワイルディングの消息は杳として知られざりしが、恐らくは債鬼に攻圍せられたる窮生活中にありしならんか。その間に、或政治新誌に關係し、その縁にて初めて貴族リッタートンと相知り、その人の周旋にてウエストミンスター區の警視總長となることを得たりき。リッタートンは更にまたワイルディングを眷顧扶助して、遂にその一代の傑作『The History of Tom Jones, a Foundling』(孤兒トム、ジョーンズの傳)をものせしめき。この書小説として少くとも空前の名作なりしと衆批評家のいへるが如し。殊にその文章はワイルディングがあらゆる困苦を凌

ぎて推敲し出だし、ものにて、巧妙なり、とりわけ各篇の序詞の如きは、サッカレー及びジョーエル、エリオットさへも模倣せし程の名文なり。さて此の小説はオールトオマーといふ獨身の一紳士が倫敦市より家に歸りて、不思議にも、己れが臥床の上に可憐の孤兒を發見すといふことに筋を起し、この孩兒トム、ジョーンズを主人公として綴りいだしたる長篇なり。篇中の人物中、紳士オールトオマー、郷士ウエストアン、可憐嬢ソフィヤ、卑むべきフライフィル、をかしきバートリッチ、及び作者の分身とも見るべき主人公トム、ジョーンズの如きは、この書を一讀したる者の長く忘るゝ能はざる性格なり。但し、全篇に通して無用の支譚、挿話の頗る多きと、其の匆忙として不自然の收結に終れると等は、其の大なる缺點なるべし。

二年を経て『アマリヤ』(Amelia)と題せる最後の小説出でたり、女主人公アマリヤは作者が最愛の亡妻を標本として成れると疑ふべからず。この著前作に比すれば大いに活氣を減じたれど、其の人生觀察の頗る沈着となりたる處あるより、サッカレーの如きは『トム、ジョーンズ』及び『ジョセフ、アンドリュース』には反感を抱きながら『アマリヤ』には全然たる賛意を表しき。ワイルディングは、晩年善く職に努め、

倫敦府内の鼠賊を蕩攘して名ありき。然れども壯時の蕩逸は其の老時に報い、身心漸く衰弱せしかば、一時英國を離れて葡萄牙のリスボンに遊び、治療に手を盡し、かどつひに其の効なく、一千百五十四年バイロンが激賞して“the prose Homer of human nature”（人性を描ける大叙事詩家）といへる此の一作家は、齡未だ知命ならずしてみまかりき。翌年絶筆『航海日誌』出版せられき。

フィイルデンクの作は、決して高雅とは稱すべからざるも、常に強健にして辭々風發の概あり、人事の全豹に通ずるとリチャードソンに數倍し、滑稽洒落の文辭ながらに推敲洗鍊を重ねたりしとはた『バラメ』の作者若しくはスモーレット等の比にあらず。英國社會小説の開山としてその名近世に高きと、所以ありといふべし。

### 第九章 スモーレット及びスタアン

スモーレット——生涯及び著作——『ロデリック、ランドム一代記』——其の

作の特質——『ハムフレ、クリンカー』——スモーレットの社會觀——人性

研究——スタアン——生涯——爲人——著作の特質——文牒

リチャードソンの如き嚴格なる道念なく、フィイルデンクの如き縱横なる詩才なきも

暢達の筆に世相を直寫し、以て一代に名を博し、面白き物語の作者として今尙ほ普通の讀書社會に歡迎せらるゝは、トビヤス、ジョージ、スモーレットなり。彼れは一千七百二十一年我朝享保六年、建部涼岱三歳（スコットランドの一名家に生まれ、祖父の手に育せられて人と成り、十二分の教育を享けたり、然るに二十歳の時祖父を失ひ、忽ち生計に困窮せしかば、乃ちまづ詩文を以て身を立てんと欲し、かねて綴り置きし處女作“*The Regicide*”（弑逆）と題せる一悲劇を懷にしてロンドン市に上りぬ。かくて此の作を名優ガリックに示し、直ちに之れによりて梨園文壇に位置を得んの心なりしが、採用せられざりしかば失望し、其のはじめ醫學を修めたりしを傳手に一軍艦附きの外科醫の助手となり、爾來まづ海外に航遊し、一時は西印度に寄留せしともありき。其のチャマイカの島にありしや、多少資産ある一女子を娶り、更に幾多の變轉を経て、一千七百四十四年、再びロンドンの都に歸り、醫術と文學とによりて身を立てんと試みき。一千七百四十八年、初めて小説の作あり、上下二卷、是れ其の傑作にして“*The Adventures of Roderik Random*”（『ロデリック、ランドム一代記』）と題せる者なり。スモーレットが特殊なる筆致及び其の長

短所は、尤もよく此の作にあらはれたり。此の作は當時流行の自叙傳小説にして、主人公は蘇國人なり、其の一代の閱歷、境遇、行爲、性質までも、著く作家自身のに似たり、按ふに、全體の結構は、佛の名家ルサーツ(Gilbert)の著者(著者)を學び、事件及び人物は重に自家の閱歷を本とせしならん。されば主人公ランドムが三度海外に漂遊せし狀を寫し、殊に粗朴なる水夫の生活を叙せるあたりは、宛然活畫に臨むの感あり。この作いたく時尙にかなひて、文名立どころに揚りしが、スモレットはもと創才にあらず、又結構の妙才をも有せず、いはゞ豐饒なる見聞を自在に報告する底の文才たるに止まれり。彼れは韻語をも能くし、脚本を作り、又屢、政論乃至諷刺文を物したり。彼れが多々益、辯ずる力量は異とすべきも、その千言萬言は、一として讀者を驅りて詩的別境に入らしむるあたはずして、たゞ俗懷を悦ばしむるに足るのみ。彼れは、人性を觀察するの力より觀るも、脚色を布設するの伎倆より見るも、また、美術的品位より見るも、到底リチャードソン若しくはフィールデンクに及ばず。その作意、筆跡を概見するに、狡猾は之れ有るも、巧妙はいまだし、談諧は之れ有るも、諷諧はいまだしと評せざるを得ず。其の作中に見いださるゝ奇事異聞は、卑猥なら

ざれば慘刻、慘刻ならざれば奇怪なり、讀者にして識見高ければ、眉を擧めざるを得ざるべし。されば、彼れもまた一個のユーモリストなり、時に人情の琴線に觸れて眞に他を悲喜せしむるの伎倆なきにしもあらず。たゞその多數の作中にさる妙處の寥々たるを憾むべしとなす。按ふに、これもまた時尙、時風の然らしめし所なるべければ、ひとり作家のみを咎むるは酷なるべし。

一千七百五十一年『The Adventures of Perigrine Pickle』四卷を作せり、嘲諷餘りに露骨にして淺俗の失溢れたれど、流石に簡捷にして諷諧の妙なきにしもあらず。翌々年『The Adventures of Ferdinand, Count Fathom』を著しぬ、作者は傳奇的小説たるべき心算にて物せし由なれど、その主人公が斗屑の小人たりし爲め、傳奇風の跌宕飄逸の氣品なく、頗る不評なりき。是に於いて、スモレットはその方面を轉じ、『ドン、キホーテ』を翻譯し、又『Critical Review』、『評論』の定期刊行物を起しき。該誌面大半は主筆一人の筆に成りきといふ。既にして彼れは舊怨ある某將軍を捉へ、匿名にて譏誣の筆を揮ひたりしが、遂に發覺して罪を得、去ばらく獄に繋がれき。獄中にてサブグラテスを模したる小説『The Adventures of Sir Launcelot Greaves』を物せしが、とり

出で、評するに足る作にあらず。

出獄の後、國史の編修に従事し、一千七百五十八年“Complete History of England”『英國全史』を脱稿して出版し、この書はシーザアの攻略に筆を起し、一千七百四十八年を以て畢れり。生來史家の資にあらざりしが故に、この編の如きも只雜然と不確定なる事跡を臚列したるに過ぎざりしかど、近世の事を敘するに及びて其の筆意を改めしかば、記叙活動の妙あり、爲めに彼れをして當時第一二流の史家たりといふ世評を博せしめき。然るにその頃より健康漸く衰へければ、醫師と友人とを携へて大陸に歴遊すると二年、旅中“Travels in France and Italy”を著しき。この紀行文彼れが晩年の名聲を添ふるに力ある作なり。かくて伊太利のレクホルンに滞在中、最後の精力を集注して“Expedition of Humphrey Clinker”三卷を作しき。この書實に一世の傑作たりしなり。版成りて數週の後、溘焉としてみかまりき。時に一千七百七十一年。

『ハムフレ、クリンカー』は、全篇書信體にて成れり。主人公マッシュ、フランナルがその健康を恢復せんが爲めにバスに行き、ロンドンに行き、蘇格土の高地に行き、又クロースタアに行きし結構などは、恰も作者が閱歷と境遇とに似たり。この一行の出來事は本篇の骨子となりしものなるが、ハムフレはフランナルに陪從せる者の隨一人に過ぎざるが故に、この作正しくは『マッシュ、フランナルの漫遊』と名づけつべきなりき。概しては、例の滑稽にて、輕妙の致もまた例の如くなれど、その諸人物のいづれも歴たる性格を備へたる、その筆意に人類全體に同感を寄せたる跡あるなどは注意すべし。この傾向を具ふるに及びたる際に更に數年の修練を積ましめしならば、スモーレットの進境或は大に見るべきものありしならんに、天壽を假さざりしは惜むべし。

ゴッス氏は、最も高き見地に立ちてスモーレットの小説を見れば、その不具拙劣の點躍として先づ目に入ると共に、その明かに一家の軀を具へて、近世の大家に少からぬ影響を與へたる跡あることも蔽ふべからず見ゆ。フィールディングなくしてサッカレーよくサッカレーたると能はざりきとすれば、スモーレットなくしてはヂッケンスもよくヂッケンスたると能はざりしなるべしと。それ或は然らん。

スモーレットの小説は、總評すれば、武人的ともいふべきなり、彼れが描ける社會は、之

れを十八世紀の社會として見るも、尙あまりに亂暴狼藉に過ぎたり。彼れが描く所の社會を實際の社會なりとすれば、眞に厭ふべく、怖るべき社會なり。少女若し誤りて一たび此の社會にさまよひ出づる時は、或は忽ちに成女となるべき虞れあり、男子一たびこゝに出づれば、或は復た歸ることを得ざるべき恐れあり、鼻をそがれ、指を失ふが如き事は室内街頭に於ける尋常普通の爭論の結果なりしが如し。要するに、毆打殺傷は、當社會に於ける不斷の出來事にして、鮮血淋漓の慘狀は常に目に觸るゝ現象なりしが如し。女性も怒れば男子の面上に鋭き爪の痕を印し、ベレクリン、ピックルの如き上流の紳士も、時々嚇怒して、會釋もなく他の紳士を痛打す。買色などは殆ど公然に行はれ、更に厭ふべき非倫の姦淫すらも行はれたりしものゝ如し。總じてスモーレットの畫ける人物は、主人公の位置に立てる者すら、私慾甚しくして殘忍なり、其の酒に耽り、情に溺るゝ點は、フィールディングの大差なしと雖も、後者のゝ如く洒落ならず、快活ならず、將た善良ならず。スモーレットの主人公は粗野にして狂暴なり、其の情甚しく熱したる場合には、甚しき破廉耻をも敢て行ふ。到底今日の讀者の深く同感する能はざる所なり。况んや主人公以下の男女に至

りては、宛然たる娼婦、マドロスに似たるもの多し。

若し實にかゝる亂倫狼藉なる世間事相を英國十八世紀の世相なりとし、之れを活寫せるを當代の社會小説なりとし、之れを喜び讀めりし者を當時の公衆なりと思惟せば、人皆其の何故に一大革命の機運の急ぎ迫らざりしかを異しまざるを得ざるべし、然れども、由來寫實的小説は、就中諷刺の旨を含める者は、世間相の美なる側面には簡疎にして、をさく醜惡なる側面を誇張する者なり、彼のスモーレット等の作に現れたる卑陋と猥雜と殘忍とは、明かに英國十八世紀の醜惡なる一面を誇張せるものにして、ティヌの所謂其の高雅なる部分、は之れが爲に寫し洩らされたる趣あり、隨うてスヰフト、スモーレット、フィールディング等の作を、若しさながらに其の時代の實相なりきと信ずる者あらば、そは甚しく史的觀察を誤る者なりと評せざるべからず。よし假に一步を譲りて、英國十八世紀の世態は眞にかくの如くなりきとするも、尙おのづから一種の防腐劑ありて、一方には能く社會風俗の壞亂を防ぎ、他方には能く作家品性の大墮落を防ぎたりし事實あるを記せざるべからず。防腐劑とは、他無し、英國人の本性と當時漸く弘通せんとせりし**人性研究**の氣脈

となり。彼等の聰明なるものは、單に社會の外面を觀察し、實寫するのみをもて満足するものにあらず、更に進みて其の由りて來たる原因、即ち人心内の機微をも探らんとするなり、是れ彼等をして墮落の中道にして自省自誠せしむる緣たり。例へば、スモーレットの放縱と粗野とを以てして、尙彼の『ハムフレ、クリンカー』の著あり、こは小説に似て小説にあらず、種々の人物の通信に擬して、英蘇各地方に於ける人情風俗の精緻なる觀察を録せるものなり、すなはち種々の人物をして交、其の特殊なる觀察の結果を語らしめ、よりて以て其の特殊なる性格を表現し來たる、名けて一種の氣質物とも稱しつべし。此の人性研究の氣脈は、早く已にチョーサーの作にも見え、エリザベス時代の諸劇にも見え、ベン、ジョンソンの作にも見ゆ。之れを名けて内、人の研究といふ、而して個人の場合に在りては、自省と名づく。個人にして自省の念あらば、其の徳性の墮落を救ふに足るべく、社會に心性研究の風盛えて所謂主觀的觀察流行せば、また以て其の大腐敗を防ぐに足るべし。而して英の十八世紀に最も著く此の氣脈を代表せりしものをローレンス、スタアンとす。

ローレンス、スタアンは一千七百十三年に生まれ、同六十八年にみまかりき

(我朝平賀鳩溪と約同時代)。その性質はその作物の奇なるが如くに奇なり、真個崎人傳中の人物と評すべし。愛蘭土の出生にして家甚だ貧しく、父の下士たりし爲め、其の部屬の變移する毎に父に隨うて諸處に流寓し以て幼時を送りき。父歿して後、母かたの親戚に扶持せられてケムブリッジの大學校に入り、三年にして業を了へ、出で、僧となりて教會に就職しき。こは彼れにとりては、曩も不得意、不適任の職務なりしに、奇なる哉、彼れは、一千七百三十六年より同五十九年まで二十三年間、無言の田舎牧師を以て満足し、毫も他を顧みざりき。一千七百四十一年、資産ある妻を娶り、一時に窮困を免れければ、それより後は繪畫と提琴と銃獵とを是れ事とし、復た業を修めず、或は同僚の僧と争ひ、或はその妻を虐遇する等、放縱不羈に至る所なかりき。かくて千七百五十九年、齡五十六にして始めて文筆に従事し、翌年一月『トリストラム、シャンドンデー』『The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gent.』二卷を著しき。こは後年作者をして一世に名を成さしめし長篇小説の發端にして、兼ねて彼れが眞生涯の端緒なりき。その第一卷は、脚色にも文章にも一奇なけれど、第二卷よりは漸く蔗境に入り、文辭また奇警、大に時人を驚しき。於是、

スタアンは機を外さず、先づ“Sermons of Mr. Yorick”の『説教集を出だし、翌年更らに『トリストラム、シャンデー』の第三巻及び第四巻を著しき。文致の奇異斬新、観察の穿細深刻いよ／＼、讀書社會の注目を牽きぬ。然るにこの頃よりスタアン漸く健康を損じければ、暫く執筆を廢してひたすら酒食を慎みしかど、快活猿の如き質とて、久しくかくてある能はず、又放縱に立振舞ひ、且つ前作の後篇五巻及び六巻を綴りなどして大いに病勢を進めしかば、竟に伊太利に轉地するの已むを得ざるに至りぬ。かくて三年を経てその第七巻及び第八巻を携へて本國に歸りき。これ本篇中の歴卷なり。さて翌年は『説教集』の續篇を出だし、翌々年は『トリストラム、シャンデー』の第九巻即ち終巻と“A Sentimental Journey through France and Italy by Mr. Yorick”とを著しき。是れより先き、再び伊太利及び佛蘭西に遊びしが、歸る程もなく倫敦の寓居に於て、知己縁者もなき假居中に、病あらたまりてみまかりき。スタアンが作は、おしなべて、亂雜不秩序なり、筆にも想にも矛盾の個處甚だ多く、其の人生觀粗厲ならざれば、刻薄、寛雅、温潤の致なし。然れども、其の得意なる諷諧の警句を用ひたる箇所を讀むに及びては、そ／＼に人をして髣髴シエイクスピヤの面

影を想起せしむるもの少なからず。一言に評すれば、彼れが作は常に恰も作者その人の如く常經を脱す、容易に端倪すべからざるの概あり。テース彼れを評して曰はく

「スタアンは眞に奇才といふべし。彼れはブライドフツスインサイト盲明ブライドフツスインサイトの混合なり。恰も網膜病の患者の如し、神經の刺激甚だ激烈にして而も劇變測るべからず、忽ちにして遲鈍、驟忽ちにして穿鋭透徹、時として普通人の見る所をも見得ざるこゝあり、時として精銳なる眼力の尙ほ及ばざる所を觀破することあり。彼れは實に病的偏心偏長の質なり。僧にして兼れて蕩兒、提琴彈きにして兼れて哲學者、母の餓死するを忍びながら死にたる驢ドンキを見ては酸鼻せし奇癖家。(中略)。彼れは謹嚴莊重なるものをいやしみて偽善矯飾なりとし、痴呆の情態を見て可憐なりさせり。彼れの作中の僧にして奇人たるヨリックは明かに作家の半身なり。

ど。以てスタアンの爲人を知るべし。ヨリックは『トリストラム、シャンデー』の假設の話說者、又彼の『センチメンタル、チャアチー』の話說者なり。すなはち作者スタアンが假に此の名を被りて、例の自叙傳の筆法にて、シャンデー一家を中心として、生活の内幕を叙寫せるもの、之れを『トリストラム、シャンデー』となす。篇中の主なる人物は、終始影の如く朦朧たる主人公のトリストラムにはあらず、其の父ウオルター、

シャンドーといふ商人の隠居、其の妻エリザベス、及び其の叔父トビー、シャンドー、並びに其の僕コオラル、トリムなり。通篇ことさらに次第を錯亂し、げに畸人の物語るはかくもあらんと思はるゝやうに、奇談百出、縦横滅裂、警句險語沸くが如し。要するに、彼れが作の第一の特質は、人物の性癖を描畫する筆の平叙的にあらずして、暗示的なる所、即ち讀者をして言外の隱微を冥悟せしむるやうに物する點にあり、之れを劇詩的筆法といふ。而して第二の特質は觀察の穿細なること、第三のは通篇何等の脚色も無きこと也。

テーム又評して曰はく、健全なる思想の前進するや、個々の想念打ち揃ひて次第を紊さず整々として進行す。病的思想の進行に至りては、個々の想念相排擠し、顛動亂争して、めい／＼に競進す。(中略)。スタアンが調子は二分間とも同様なる能はず、忽ちにして笑ひ、忽ちにして激し、忽ちにして怒罵し、忽ちにして驚愕す、慘として惻むと見れば、哄として大笑す。亂脈又亂脈、事物を顛倒し、條理を滅裂して顧みず、而もその自在に讀者を玩弄する趣は、猶操り師の偶人を弄するがごとし。彼れが尤も好みて牽く操り絲二條あり、一條は女性的愛憐といふ線にして、今一條は譏刺

諷嘲の線なり。彼れは小き蠅蟲の爲に流涕し、死にたる驢の爲に嗚咽し、若しくは籠鳥に同感して泣く、而も能く讀者をも泣かしむる力ありと。スタアンが譏刺滑稽に巧なると同時に讀者を泣かしむる悲哀の筆力あると、寔にテームの言の如し、而も其の實は甚しき爲我者にして忘我の清徳ありし者にあらず、眞慈仁の人にあらず。所詮、スタアンは有數の奇才なるのみ。

終りに、彼れが文章につきて見ん。彼れは古人の何人の體にも據る所なかりしかど、自己の一風を開くに至りし經營は大方ならず、殊にその晩年の作を見るに、辭々銑鍊を重ね、句々推敲を經、詞致と節調とを兼ね具へて、而も斧鑿の痕を止めざるに至りて止めり。當時の作家は、大概特殊なる文體を用ひしかど、スタアンの如くに全然創規に屬せるものは稀れなり。彼れは常に佛蘭西の諸家の文を精讀しきといへば、その筆は或はそこに胚胎せしならんか、兎も角も後の Dickens 等に資する所ありし功績は認めざるべからず。

## 第十章 其他の小説家

小説發達の第一期——四名家の特質——其他の作家——フィールゲン

英文學史 第四篇 第九章 其他の小説家



英國小説發達史の第一期は、一千七百四十年の『バメラ』に始まりて同七十一年の『ハムフレ、クリンカー』に終りき。その間三十一年、名家の數僅かに四人に止まりしも、尙寫實の一面を開いて近代小説の導火となりしは多とせざるべからず。件の四家は精査すれば、その特質の、異なりと雖も、その間また相通同せる性質なきにあらず。其の主題の、いづれも人の性情なりしは其の一にして、其の作するに至りし動機の訓誨、教導にありしは其の二なり。リチャードソンが勸懲、フィールディングが諷刺、スモーレドの憤怒、スタアンが諷諧皆其の實證たり。當時、この四家を中心として小説壇に打出でたりし諸作家は、いづれもまた期せずして同様の目的と方法とを取りにき。其の中伎倆と作意とに於てや、重きを置くべき者は左の如し。

サラ、フィールディング(一七一〇——一七六八)はヘンリ、フィールディングの妹にして一千七百四十四年『David Simple』(小説)二巻を作しき。この書の結構はリチャードソンとフィールディングとの中間にあり、即ち前者の如く柔弱ならず、後者の如く粗暴

Sarah Fielding.

Johnson

ならず、殊に友誼の情の切なるを寫して要を得たれど、筆力の兩家に及ばざるは勿論なり。阿兄の文名高くなりし後は、また筆を染めざりき。

リチャードソンの筆法を進めて一段哲學的たらしめしものを博士サミュエル、ジョンソンの『ラセラス物語』(Rasselas, Prince of Abyssinia)となす。是れ作家が窮困のうち母を喪ひ、其の葬式の費用に充てんとて、筆を執ること僅か八夜にして作りき、と傳ふる作なり。人生の希望の大かたは空だのめなる由を具體に寫し、いたしたる寓意小説なり。十八世紀の後半を代表せし一大家の人生觀を窺ふ料として永く讀まるべき運命を有す。

ジョンソンと同傾向ながらも、流石にジョンソンの如く理窟に趨らずして、先進諸家の裏を折したるが如き作は、詩人オリヴァ、ゴールドスミスの小説なり。ゴールドスミスの生涯と事業とは、別に韻語の詩人として下にトムソン、グレイ等と共に語るべければ、今は只、其の小説の上のみにつきていはんに、彼れが小説家としての名譽は、ひとへに其の唯一の傑作『The Vicar of Wakefield』のみによりて繫がれたり。此の作は其の脚色の上よりいへば、取りわけて其の下半の結構には、頗る不自

Goldsmith.

然なる箇處も多くて非難をまぬかるゝ能はされども、其の感想の清、其の田家生活を目に見る如く、愈寫したる筆の妙、主人公ドクトル、プリムローズといふ地方牧師の善良なる性格及び其の他の數多き人物をして、髣髴活現せしめたる靈妙の想像は、長永に翫賞せらるべき價值あり。ゴールドスミスが此の作を公にせしは、一千七百六十六年(三十八歳の時)なり、即ち其の詩人としての名聲已に世に高かりし頃なりしが、出版の當時には世間はいまだ此の作の妙を認めざりしものゝ如し。近時の考査によれば、此の小説をして大名を博するに至らしめしには、獨の大詩人ゲーテの評與りて大に力ありきといふ。ゲーテはいたく此の作を稱美し、面白く巧みに物せられたるのみにあらず、こは實に不滅の物語なりといへり、其の不易の價值あるを稱へたるなり。げに、この作の長所は、その思想の僻せざる所にあり。ゴールドスミスは、ジョンソンと同様の悲風慘雨を経來りしかど、その結果、彼れに於ては剛愎の人を作りたれど、此れに於ては溫柔の人を作りたり、ゴールドスミスはジョンソンの如く失敗を経るごとに我強くはならずして、次第に薄志に流れたりし如し。さればゴールドスミスの作は、作者の意識したるまゝの意味にては、何程の内

## Francis Burney.

容もなきことなれど、十九世紀に至りて、他人別に新釋を附し、大に作意を擴充するに及び、價值更に加はりぬ。ゲーテ率先して評すらく、こは人生のあらゆる迷路より人を救ひ出だすものなりと。ゴールドスミスは、もと韻語詩人なるがゆゑに、散文の筆致ながら詩旨の飄渺たる叙記少なからず、『ギカア、オフ、ウエイクフィールド』は、こゝかしこ優かに散文の詩として讀むに足る。

ゴールドスミスの外に、特に注意すべきはフランシス、バアチーなり。フランシス、バアチー女史は一千七百五十二年に生まれて、一千八百四十年に逝りし半ばは十九世紀にまたがれる女作家なり。後にダーナレー夫人 Madame D'Arley と呼ばれて、文名一世に震ひたり。當時女作家いと多かりきと雖も、サラ、フィールディングとチェーン、オースチンとの間に立ちて、男性作家と相伍して作家中に錚々たりし者は、此の『エヴライナ』(Evelina) の作者なり。女史は有名なる音樂史家ドクトル、バアチーの女なりき、其の著す所の小説は『エヴライナ』の外に、『Ocellia, or the Memoirs of an Heiress』、『A Picture of Youth』等あれど、今尙讀まるゝは前に引く『Evelina, or a Young

Lady's Entrance into the World" と題したる小説のみ。此の『エヴライナ』は女史が廿六歳の時世にいてしが、作せしは十何歳(或はいふ十五歳と)の時なりき。はじめて世の中に立ち出て、種々の甘酸を閱歴せる年少女子の自叙説に取り做せる此の作をはじめは名を隠して出版し、父母にすらも知らせざりしかば、Little Fanny の作たることは、暫らくは何人も知らざりしが、後に其の名の喧傳をんとするに先だち、博士サミュエル・ジョンソン之れを聞き知りて大に感じ、リチャード・ハンのにもはぢざる妙句あまたありと褒めたへき。

Jane Austen. さいはいへ、十八世紀末葉の女作家、否、社會小説の作家中に、自然群を抜ける第一の俊才は、ジェーン・オースチン 女史たること、今は殆ど動かしがたき輿論たるに近しと雖も、予は講述の都合によりて、女史をば十九世紀の文壇に屬せしめ、一旦十八世紀の小説史を結收せんと欲す、而して若しオースチン女史の作を十九世紀の文壇に屬せしむれば、十八世紀の小説作家中、他に取りいでいふべきは、"Chrysal, or the Adventures of a Guinea" と題せる スモーレット 風の卑陋なる戯作に一時の虚名を博したりし チャールズ・ジョンストン。"Castle of Otranto" とする傳奇風ロマンチックの小説を

作りて傳奇派の中興とも見做さるゝホレリス、ウォルポール、スタアンを學びて種々の沈鬱なる小説を作し、"The Man of Feeling" に今尚文名を傳へたる ヘンリ・マッケンチー など、數名に過ぎず、要するに、皆第三流以下の作家也、十八世紀に於ける小説文學は スモーレット、スタアン に至りて一頓挫し、其の後數十年間は著き進歩無かりきと評すべし。彼の チェーン、オースチン と ウォルター・スコット とが如何に此の沈滞を翻轉して新清流を聞きしかば、近世文學史のはじめに説かん。

## 第十一章 サミュエル・ジョンソン

十八世紀の前半と後半——風尚の平等時代と差別時代——ジョンソン が一代に覇たりし所以——ジョンソン の傳——其の著作——『英國大辭典』——『ラセラス物語』——文學會——『詩人傳』——ジョンソン の特質

十八世紀の前半は、言はゞ文學上の中央集權時代にして英國の文運は首都ロンドンなる或詩社、文人社の左右するに任したるものゝ如く、所謂擬古詩風の最高潮に達するや、苟も詞壇に立つ者は此の風潮に逆ひては殆ど生存せんこと難く、想も筆も、毎に中央文學の趨向によりて拘束せらるゝを例としたりき。これが爲に

彼のライマ、一輩の詩學論の唱へらるゝや、全國の月旦靡然として皆之れを準とし、アレクサンダー、ポーアの詩王と崇めらるゝや、全國の製作翕然として皆彼れが作を師表となせりき。按ふに、こは必しも當代の作家等が特行自主の操志に乏しかりしが爲にあらざり、詞客と詞客との交際、就中、主なる詞客間の交際、親密にして、斷えず相往來して談論するの結果、知らず識らず異色を抹殺し、圭角を削除し、相感化する事著かりしかば、文致も、觀念も、詩學說も、修辭論も、次第に同準に歸着せざるを得ざるに至り、いつしか風尚を平等にし、同規同律の果を致したりしなるべし。然るに第二期即ち所謂 デ・ンソン時代 に入りては、此の風漸次に變移し來り、詞客の夥しく輩出すると同時に、其の自然の結果として、其の相互間の交際は疎遠となり、中には一生相見ざりし程に疎遠なりし者も多く生じ、文學上の中央集權は日を追うて衰運に向ひ、好尚、詩風の統一も次第に破れ、めい／＼思ひ／＼に想を凝らし筆を使ふとなり、竟に其の末年に及びては、詞壇全く自由となり、幾多革新派の作家をさへ呼起すに至りき。此の前後二期に於ける著作風の差別は、さすがに其の文致、風調の上には未だ歴々たらざるともあれど、其の作意、觀念の、如何に前半

期は個々相似て、如何に後半期には相逕庭せるかを見れば、十八世紀の第二期が自由革新の太氣を漸次呼吸しつゝありし跡明かなるべし。前半期には、唯一人のス・フットを除くの外は、また大異彩あるを見いだす能はざるのみならず、其の唯一の大異彩すらも、其の文致の上より見れば、決して大異彩たること能はざりしものなり。然るに、後半期の諸作家は之れに反す、例へば、フィールディングのリチャードソンに於ける、スタアンのスモークレットに於ける、デ・ンソンのゴールドスミスに於ける、ヒュームのギッポンに於ける、同じ種類の作品を物しながらも、其の各自の特質は前後截然として相隔たれり、蓋し時勢の然らしめしところなるべし。之れを要するに、前半期は寡人政治的の文壇にして、後半期は民主政治的の文壇なりしなり。ドクトル、サミュエル、デ・ンソンは、此の後半期中に盛譽を博して、殆ど文壇の霸王たる觀ありしが、其の實、デ・ンソンが詞客としての資性、品質は、主として前半期に屬せしむべきものなり、彼れは、いづれかといへば、尙古派の文士にして、其の批判眼の如きも、殆ど新派の美を觀取するに堪へざりしものなり。而も此の老博士が前後數十年の間、中央の詞壇に君臨して、あらゆる方面に威信を有せしは如何。他なし、其の

博覽精通の學、其のさすがに群を抜ける見識、其の多方面の詞才、其の富贍なる閱歷と常識、其の堅忍剛毅、自尊傲岸の性格、其の後輩及び社會に對する誠實、其の廉正謹嚴の行爲、これらの諸徳と諸長所とが相合して、深く儕輩を心服せしめしが爲なり。彼れは英國十八世紀文學の殆ど全範圍を代表するの資格を有しき。先づ雜誌氏としては、アヂソン、スチールの次に位すべく、詩人、劇詩家としても第三流以下には下らざるべく、小説家としても相應の聲譽を博し、傳記家としても當代にもてはやされ、今尙幾分か愛讀せらるゝの價値を具へき。加之、英國の大辭彙は、ジョンソンの編せる者を以て其の最古の良字彙となすべく、シェイクスピアの註釋も、彼れの經營に係れるもの、他の同代のに比して遜色なし。而して批評家、修辭家としては、其の新派に對して不明なりしにも係らず、明かに當代の第一流たりしなり。其の雅俗に敬重せられて、一代に霸たりしこと偶然にあらざるなり。

サミュエル、ジョンソンは一千七百〇九年七月十八日(我朝寛永六年、新井白石五十三歳)に生れ、リッチフィールドの書肆マイケール、ジョンソンの子なり。幼にしてリッチフィールドの校舎に學び、一千七百二十八年オックスフォードの大學に入りぬ、されど、

Samuel Johnson,

そこのヘムプロック校に在りしと僅かに十四ヶ月ばかりにして一旦退校し、同三十一年に至りてまた更に入學せしものゝ如し。同じ年父みまかりて家計は艱難を極めたりき。爾後五年間の事蹟は詳かならねど、彼のヘイウッドにて暫時私學校の教師たりしは、正に此の間のことなりといふ。又『アヒシニヤへの航海』と題せる抄譯物を某書肆の爲に物せしも此の間なり。それより二十年間は彼れが生活的鬭争の時代にして、衣食の爲に俗書肆に役使せられ、鬱憤を忍び、不平を吞み、病を力めて筆を執り、而も屢、衣食に缺乏を感じたりし時代なり。彼れは倨傲にして怒り易く、加ふるに怖ろしき顔色して學童等を叱咤する癖ありしかば、教師としては悉く失敗し、著述家としても兎角に讀者受け妙ならざりき。其のころ自家よりも廿一歳ほど年長なりし寡婦と婚して、其の財産もて一時其の私塾を維持せしかど、これすら水泡に歸するに及びて、一千七百三十七年、僅かに二ペンス半を懐にして、其の弟子ガリック(後に英の拍箋とも稱すべき名優となりしがリック)と共にロンドンに立ちいで、種々困苦の後『紳士雜誌』(The Gentleman's Magazine)の發行者エドワード、ケイツといふ者の雇となり(一七三八)ついで『ロンドン』と題したる一篇の諷刺詩

を公にしき、こは羅馬の名家チユエナルの作を摸倣せるものにて、之れに對する報酬は十キニーなりきといふ。是れチンソンの文名の世に知られしはむめにて、未だ所謂クラブ、ストリートの生涯を脱却せざりし頃の事なり。

一千七百三十九年より同四十四年までは、主と嘲世諷俗の筆を揮ひし時代にて、彼の『Debates in Magna Lilliputia』と命題して時の國會の傍聽筆記を四年間『紳士雜誌』に物せしは此の間なり。其のころ詩人サエーと交はり、其の死を悼みて、同四十四年に『The Account of the Life of Mr. Richard Savage』を著しき。こはチンソンがもせし傳記中の最長篇にして、且つ最も成功せるものなり、篇中、逸事瑣話を挿むこと甚だ多く、辭々、句々生動の妙あり。好傳記書に渴したりし當時の讀者が歡迎せしは論を俟たず、今に至るまでも讀書社會の珍重する所たり。さて、同四十五年にはシェイクスピアが『マクベス』を評論せる一小冊子を著はし、同四十七年には未曾有の英國大辭典編纂の案を起こし、チェスタアフィールド卿にたよりて此の大業を成さんと欲して其の志を得ず、空しく八年を經過しき。之れより先き一千七百四十八年、ハムナチデッドに暫時閑日月を楽しみ、其の間に其の傑作の韻語『The Vanity of

Human Wishes』を作し、翌年に至りて出版しき。是れはたチユエナルの諷刺詩第十を模せしものなれど、其の前作『ロンドン』に比すれば幾等か優り、且つ著者が博學と卓識とを窺ふに足る佳作たり。さもあれ、單純なる諷刺と淺露なる句法とにのみ耳慣れたる當時の俗衆は、この詩に對して、恰も希臘語を讀むが如き困難を感じきといへば、作者の之れによりて名を成す能はざりしや論なし。

此の時に當たりて其の舊弟子ダギッド、ガーリックは其の名優たるの聲譽已に隆々として、今や首都に在りて有名なるDrury Lane Theatre(ドリュアリー、レイン座)の座主となり、彼れ其の舊師の未だ其の志を成さず不遇の境にあるを痛み、懇にチンソンを勸諭して其の舊作脚本に若干の筆を加へしめ、竟に之れを時の劇壇に上せたり(一七四九二月)『マホメットとアイレン』と題したるものは是れなり。チンソンは此の作によりて、凡そ三百ポンドの潤筆料を得たりきといふ。後に此の劇を修正して世にいだし、改めて『アイレン』と名けたるが、こは脚色も單純、人物の性格も甚だおぼろげなる劣作なり。

今やチンソンの名聲は漸く世に知らるゝに至りたり。彼れはアチソン、スチール

以後暫く中絶の姿となれりし定期刊行の社會的論文を發行せんと計畫し、一千七百五十年三月はじめて『Rambler』『逍遙者』といふ雜誌やうの定期物を發兌せり、こは同五十二年の三月まで續きぬ、其の間、五冊を除くの外は悉くジョンソンが單獨の筆に成れりき。はじめは主筆の名を匿したりしが、其の文致の殊別なるが爲に、程もなく世に知られき。按ふに、ジョンソンが文は、總じて華に失し、巧に流れ、誇張に過ぎ、莊重に偏したり、而して其の雜誌氏としての筆は、此の『逍遙者』に於ては尤も拙く、重くろしく、後にホークスチオスが『冒險者』(雜誌)に寄せたるものに於ては軽く巧に、更に『アイドラー』『Idler』の主筆たるに及びて漸く洗鍊の域に達せり。評論家としての彼れの最長所は人物評論なるべし。常に簡淨の筆を以て事實を狀寫し、その間に精刻なる分析を挿むが如きは、彼れが特得の長技にして亦『アイドラー』の光彩なりき。

さて彼の『英國大辭典』の編纂も、此の間に於て徐々其の歩武を進めつゝありしが、一千七百五十五年、つひに二大卷となりて世に出でき。此の辭典の卷頭に添へたる二文章は、散文家としてのジョンソンの長所、美所の最もよく現はれたるもの

なり、就中彼のチヌスタアフィールドに與へし書の如きは、辭簡に、意切に、諷刺婉曲にして鋭利なり、後年文學俱樂部に於て同人を壓倒せるジョンソンが談論諷刺の妙技は、夙にこの時に現はれたりといふを得べし。この篇は今も尙ほ諷刺文の上乗と稱せらる。一千七百五十八年四月『アイドラー』といふ定期刊行物を發兌し、頻りに社會、人物の評論文を掲げしが、幾ばくも無くして廢刊し、更に同種の小品をば『Diary』『versal Chronicle』といふ新聞紙に寄せ、同六十年の四月まで繼續しき。ジョンソンが小品は、到底、アチンソ、スチールの輕妙に似るべくもあらねど、其の人物評、就中 Dick Milim の性格を剖析せる一文の如きは、其の觀察の鋭利にして、人性の知識の深遠なりしを證するに足る。但し、同じころの作の最なる者は、彼の寓意小説『ラセラス物語』なるべし。此の作は一千七百五十九年に公にせられたり、然るに後僅かに三週程を経て、結構頗る相似たる『カンチード物語』(佛蘭士の文豪アルテールの作)世に出でしかば、ジョンソン深く其の暗合を奇とし、かく相接近して世に出でずば、二者のいづれかが他を學びたりと見做さるべきにといへりき。されど、其の相似たるは皮相のみにて、着想も、文脈も、此れ彼れ全く相異なれる者なり。此の作の性質

と眞價とは、既に前章にいへる如くなるが、其の當座は大に世人にもてはやされ、忽ちにして七八版を重ねき。

さるほどに『英國大辭典』成りぬ、英國皇室は之れを賞して年金三百ポンドを著者に賜與せり、此れよりジョンソンが家計やゝゆたかになりぬ。彼れが安樂椅子に倚りて、文壇の先輩をもて目せられ、其の博覽と其の傲岸と其の謹嚴なる行實とによりて昂然衆詩文人に君臨せしは此の際なり。彼れは一千七百六十三年にはじめて其の崇拜者にして兼ねて其の忠實なる傳紀家となりしジェームス・ボスエルと相知り、同六十四年には有名なる文學會 Literary Club を組織しき、其の會員の主なりし者は、ジョンソンを首座として、レイノルズ、バーク、ゴールドスミス、ホーキンス及びバトリック、フォックス、ボスエル等なり。之れをジョンソンが最得意の時代となす。この文學會に於けるジョンソンの談論は、細大漏らさず新聞雜誌に傳へられければ、ジョンソンは暫く評論の筆を執らず、それより一千七百六十五年に至る九年間はシェイクスピアの註釋を編むことのみ従事したりき。かくて五年の後、政事論文 "The False Alarm" を著し、翌年 "Thoughts on the late Transactions respecting the Falkland Island" を

を同七十四年 "The Patriot" を、その翌年 "Taxation no Tyranny" を著しき。かゝりし程に齡六十歳に近づき、身心漸く衰老しければ、ボスエルの勧めに任せて漫遊の途に上り、エチンバラより蘇國の東海岸に沿うて北上し、蘇國を一巡して歸り、やがて更にウェールズ北部旅行の途につきぬ。"Journey to the Western Islands" はその折の紀行也。一千七百七十五年、オックスフォードの大學ジョンソンに L.L. D. (法學博士) の學位を贈りぬ。

一千七百七十七年、英國古今の有名なる詩人を傳論せんと志し、直ちに着筆し、同七十九年より八十一年までに全部の出版を了へき。題して "Prefaces biographical and critical, to the most eminent of the English Poets" とし、今 "Lives of the English Poets" と題して坊間にあるものは是れなり。この書の價值はその部分によりて甚しき差等あり、概してミルトン、グレイなどいふ第一流の評論は拙く、第二流以下の品隲には秀拔なるものあり。

一千七百八十四年十二月、あまたの知人に圍繞せられて、倫敦なるその家にてみまかりき、行年七十五。



チ・ンソンが文章は、ポーアが韻語に於て擬古的なりしが如く、擬古的なりき、又ポーアが一向に技巧の極を求めしが如く、技巧の極を求めき。彼れはその莊重なる思想を表はさんと欲して、更らに莊重なる文牀を構成しき。是に於て、悲劇も、評論も、傳記も、辭書も、皆等しく同一様の文調をなせり。ゴールドスマミス嘗てチ・ンソンに謂つて曰はく、貴下は小魚の耳語を叙するに、だに長鯢の吼ゆるが如く物すと。彼れは、政事上に於ては熱誠なる王權黨にして、宗教上に於ては峻嚴なる新教徒なりき。於是、彼れはル・ンナーを惡みて厄病神の如く罵り、優人がリックの華奢なる服装を見てはその背に歩むことを厭ひき。常に謂へらく、著述の目的は教訓にあり、詩の目的はた娛樂のうちに教訓を遂ぐるにありと。かるが故に彼れはシェイクスピアを論じて曰はく

『シェイクスピアは詩興の爲めに道德を犠牲にせり。彼れは教訓に注意すること娛樂に注意するが如く深からず、彼れは何等の道德上の目的もなくして筆を走らせしが如し。  
 (中略)彼れは善惡の領域を明確にすることなく、惡の竟に善に抗して成功する能はざる由を示さんともせざりし如し、云々。』

以て彼れが文學評論の立脚地を察すべし。

彼れは爲人自尊剛毅なりき、かるがゆゑに清廉硬直の譽あると共にまた傲岸偏固の毀ありき。さりながら其の平素の行實の謹嚴なる、其の思慮と注意との深き、往々にして淑女子の如くなりき。談話は其の最も得意とする所なりしが、機辯輕妙にしてその文の重々しきに似ざりき。彼れが名聲は今は日に衰へゆくかの觀あれども、後の散文家にして多少チ・ンソンに負ふ所あらざるものなしといふを以て見れば、其の人物の大見るべからずや。

### 第十二章 史傳家及び論文家

史傳の著者——ヒューム——其の略傳——『大ブリテン史』——『宗教の自然史』——ロバートソン——其の略傳——其の著述——ギッボン——其の略傳——其の著述——『羅馬衰亡史』——ボスエール——其の『デ・ロンソンの傳』——論文諸名家——バファク、其の他——書簡文

哲學者としてはバアクトリー以後に世に出でし英國、否、歐洲思索家の最大なる者の隨一に位し、就中功利論の一導師として名高く、又歴史家としては兎も角も英國史學に一紀元を劃すべき第一筆と稱せらるゝは、千七百十一年に生まれて、同七十六年に世を去りしデ・ブッド、ヒュームなり。蘇都エチンバラ府に生まれて、幼きよ

り讀書をこのみ、二十三、四歳のころ已に一大著に志し、一千七百三十九年に『人性論』(Treatise on Human Nature)前二卷を、翌年に至りて其の第三卷を世にいだしき。又同四十一年と二年との交に『論文集』二卷を公にせり“Essays, Moral and Political”と題せる者是れなり。ヒュームは、其の思索の方法に於ては、あくまでも近世風なりと雖も、其の政治を論ずる立脚地は、悉く保守的、貴族的にして、常に民政主義に反對せり。其の文章は明瞭透徹、優かに論文家の師表たるに堪へたり。一千七百五十年には“Dialogues on Natural Religion”『自然宗教問答』を脱稿し、同五十一年には“Principles of Morals”『道徳原理』を、同五十二年には“Political Discourses”『政治論集』を著しき。此のころより家計やうやく裕かに、其の無神論者たるが爲の故に許多の敵ありしにも拘らず、名聲はた頗る揚がりぬ。翌年、其の名著『大ブリテイン史』の稿を起こし、一千七百五十四年其の第一卷(デュームス一世紀及びチャールス一世紀)を世にいだしき。この書のはじめでしや、讀書社會は甚しき詬罵と非難とを以て之れを迎へたり、是れ職として著者が保守主義と無神主義とが讀書社會をして不快を感ぜしめしに因るならん。みづから當時の事を叙して曰はく「予は異口同音に難

ぜられ、毀られ、甚しきに至りては嫌惡せられき。(中略)英、蘇、愛、三國中、苟も位階若しくは文字あるの徒にして予が著を忍容せし者は、殆ど一人だに在るを聞かざりき」と。かくて失意消望のあまり、一たびは姓名を變じ、長く祖國を辭して佛國に歸化せばや、とまで思ひたちしこともありしが、更に勇を鼓して、引きつゞき殘卷を公にし、竟に一千七百六十三年に及びて完結しき、而して世間また漸く其の價値を認め來り、史家としてのヒュームの名聲、一時讀書社會を震動するに至りき。

ヒュームの著は、之れを今日の史學的標準より評すれば、史材の選擇も精ならず、考證も粗漏膚淺なる所多く、事を敘述する法もまた宜しきを失したれど、史學尙甚だ幼稚にして歴史研究法の未だ具はらざりし頃の著書としては、確かに特筆する價値あるものなり。按ふに、此の著の第一の長所は、其の玲瓏透徹なる文致なるべし、彼の幽玄深遠の哲理をすら平易明晰に談論解釋するの自在を得し此の著者のことなれば、歴史的著述に於ては、一段圓滿に其の得意の筆を利用し、はじめて歴史をして一種の玩讀すべきものとならしめき。其の文脈こそ同じからざれ、ヒュームが史を綴る時の目的は、彼のマコーレーの志にひとしく、事實を傳ふるのかたはら讀者

を娛樂せしめんとするにあり、而して此の二目的のうち、後者間々前者を壓倒して興味をゆたかならしめんが爲に、幾分か事實を曲寫し、或は疑はしき野史巷説をも濫引して、正史の尊嚴をそこなひし跡、趣からぬは憾むべき瑕疵となすべし。就中、ヒュームが史の大疵とすべきは、其の政治上の偏見なり、彼れは王權を偏重して民權自由の説を蛇蝎視し、此の見解によりて史的事實を取捨推定せるが故に、殆ど正史の半面を埋没するに至りしこと、是れなり、二つには、生中に哲學家然たる口吻をもて是非、曲直を辨折せるが爲に、定見無き讀者をして判断を誤らしむる虞れあること、是れなり。さもあれ其の雅馴にして明瞭なる史筆は、趣くとも當代以前には未だ曾て見ざる所、英國史壇に一紀元を開きし率先者といふ榮稱は何人も彼れに否拒せざる所なるべし。

此の大著の印刷せられつゝありし間に、ヒュームは更に他の緊要なる一著に筆を染めたり、それは彼れが懷疑哲學の全豹を示せりともいふべき『**宗教の自然史**』(Natural History of Religion)なり。さて一千七百六十三年以後は、佛蘭西に移り住みて、三年餘はパリに駐在の英國公使が秘書官たりき。蓋しヒュームは本國に於てよ

りも、佛國人間に聲譽高く、且つ頗る優待せられき。後また英國に歸りて一千七百六十九年までは内務副秘書官たりしが、退職の後にはエヂンバラに住みて身を終ふるまで妻無く、相應に裕かなる生活を送りきといふ。懷疑哲學者としては今尙大思索家の一人として推重せらるれど、純文學の方面よりいへば、其の位置甚だ高からず、哲學的文章家としてもパークリーの熱火なく、歴史的文章家としてもキャッポンの莊嚴と瑰麗とを缺く、所詮彼れの純文學上の特長は、其雅馴と平明となり。

ヒュームにつぎて當代の史學壇に名高きは、ウィルヤム、ロバートソン(一七二一—一七九三)なり。彼れはヒュームを模倣せしにはあらねど、不思議にも其の氣脈を同うし、其の短長をも同うせり。蘇のミッドロシヤンに生まれて、一千七百四十二年、蘇國教會に入り、はじめはエヂンバラの政事界に民間の名士として知られたりしが、同五十八年『蘇國史』を世にいだすに及び、史家としての名突然として轟きたり。此の著の褒賞として、たゞちにエヂンバラ大學の總長とせられ、兼ねて蘇國修史官に任ぜられき。一千七百六十九年、『チャールス五世朝の史』を著し、ついで種々の史的著述あり、其のうち『チャールス五世朝の史』は古來筆力の供し

得べき尤もゆたかなる報償を得たりきと傳ふ。

ロバートソンの史も、考證穿鑿の精ならざるとヒュームの如く、故に嚴密に謂ふ正史的敘事は到底彼れが著に望むべからずと雖も、其の文致の雅馴にして、或は景物を狀寫し、或は事件を叙説し、過去の事蹟をして髣髴讀者の眸頭に現前せしむる筆力は、ヒュームに優るとも劣らざる妙あり、『チャールズ五世朝の史』が幼時のカーライルをして史を愛好する念を喚起せしめきといふも偶然ならんや。只揣摩臆測して、妄に過去を論斷し去る弊は、ロバートソン、ヒューム其の失を一にす。

ヒューム、ロバートソンに次ぎて、其の名と其の功と共に、二者に超ゆる者をエドワード・ギッボンとす、一七三七—一七九四。苟も文學史を講ずる者は、多少の感動無うして此の名を口にする能はざるべし。そはひとり彼れの名の第十八世紀中に歐洲文壇の産出せし最大著の隨一に相伴へる爲のみにあらず、其の著者の性行が幾多過失の之れに附隨せるにも拘らず、眞に大文士たるの勇氣と熱誠とを代表して餘りあればなり。學に篤きと彼れの如く、誇衒の失なきと彼れの如く、修辭に忠なること彼れの如く、而して終生一日の如く専ら學文の爲に身を獻むたる彼

れの如きは、今古東西に見ると稀なり。彼れは智識の爲に生活し、且つ其の智識を百鍛千鍊し、以て不磨の鐵壁とし、之れを萬古に遺さんとして生活せしなり。彼れの學を修むるや、名の爲にせずして學の爲にせり、故に人知らざるも意とせず、名著れざるも憾まざりしなり。後進の類々として彼れを凌駕して讀書社會に虛名を知らるゝ時、彼れは孜々として獨り古記録堆裡に埋頭して、未來の大著述に専念し、時勢の遷移にも驚かず、人生の頼むべからざるをも恐れず、其の業の過大至難にして成功の期し易からざるをも怕れず、泰然として徐ろに大成の機を俟てりき。其の大著に心を潜めしこと前後十五年、彼れ壽ならざりきと雖も、幸ひにも其の業を卒ふるを得て、ギッボンが『羅馬衰亡史』は永く史壇の貴寶となりき。若しヒューム、ロバートソンを以て英國史壇に新紀元を劃すべき第一筆を着けしものとせば、ギッボンが此の著は、更に一揮筆して全歐洲の史壇に新しき紀元を劃し得たるものとも稱ふべき也。

後に語るべき詩人クレーにひとしく、ギッボンは許多の同胞中たゞひとりのみ幸ひにして生存せし孱弱の見なりき。ロンドンのほとりなるパトナーに生まれき。

其の家は舊家にして、祖父の代までは豪商として知られたりしが、父の代に至りて資産蕩盡し、一家俄然として零落しき、されど古川に水涸れずして、流石に幾分の餘裕ありしかば、多病孱弱のエドワードも、醫藥の効によりて、辛くも生ひたち、齡十五歳の時、智力も學識も、尙いとく、淺劣なりしが、幸ひにオックスフォードなるマクダレン大學に入學するを得たりき。大學に於ける經歷は、些も彼れを益せざりしものゝ如し。みづから曰へらく、予はマクダレン大學に十有四月を費やし、が、是れ實に我が生涯中の最も徒爾にして何の裨益するともなかりし時期なりと。按ふに、當時の大學は、一種の精神的懶眠に耽るの處、徒らに死學を講修して靜坐默考のうち、に生氣を鎖磨するの場たりしなり。

十六歳の時、感ずるところありて、從來奉じたりし新教を抛ち、俄に舊教の信者となりき。此の件に關しては、其の自傳「Memoirs」中に頗る詳密なる記叙を遺せり。按ふに、宗教に熱心ならざるキッボンにして此の事ありしは、彼れ自からも言へる如く、全く佛の名家ボッスエー（及びバスカル）が精嚴なる論理に動かされて、智の方面より改宗せしなるべし、情と信念とは曾て其の宗旨論に伴はざりし者の如し。さる程

に、新教信者たりし父は、かくと聞きて大に駭き、キッボンに嚴命して之れを瑞西なるローサーンに逐ひ、そこの一牧師に託して更に新教に復宗せしめんと欲しき。一千七百五十四年に至りて、キッボン再び新教に復宗し、尙ローサーンの地に止まると五年なりき。其の始めて文學を研鑽せん、の志を起こし、は此の瑞西寄留の間なり。まづ希臘、羅甸の名著を博渉し、更に佛國近世の諸名著に及び、默讀晝夜を舍てず、鑑裁は尤宜しきを得たりき。さて、一千七百五十八年には英國に歸り、やがて募られて國民兵となりぬ。學業は之れが爲に阻礙せられしかど、此の兵事的經驗は書籍の供する能はざる新智識を彼れに供しき。彼れは兵職の身に適せざるを認めながらも、尙兵學に心を潜めて深く講究する所ありし結果は、其の兵戰を叙狀する筆の雄勁明透なるに現れたり。彼れ其の自傳中に叙べて曰はく、ハムプシヤ民兵の隊長も、讀者或は打笑むならめど、羅馬帝國史の著者にとりて必ずしも無用ならざりきと。彼れは未だ民兵の大尉たりし間に、其の處女作「Essai sur l' Etude de la Littérature (佛文)を著せり、文學研究論の義なり。一千七百六十三年に至りて兵役を免ぜらる、すなはち直ちに大陸に渡り、佛、瑞兩國を漫遊して伊太利に入るや、彼れ

が一生の大事業の考案は、忽然として其の念頭に閃きいでたり。みづから曰はく「正に是れ羅馬にての事なりき、時に一千七百六十四年十月十五日、予は彼の大殿堂カピトルの廢跡の間に沈思しつゝ、坐せりし時、彼の跣足の貧僧等フライトがヂュピター神の堂内にて夕勤の頌歌を歌ひつゝありし時なり、羅馬衰亡の事蹟に關する一大著をなさんの念の初めて我が心頭に躍出せしは」と。

さて、其の自傳中の語によりて案ずるに、彼れは英國に歸ると間もなく史材の蒐集に着手せしものゝ如し、然るに此の時に至りては家計いよゝゝ不如意となり、父子共に貧困に沈淪せり。かくて一千七百七十年までの事蹟は詳かならず、此の際彼れは或二三の斷片的史的著述を試みしが功を成さずして中絶しき。父の病死せしや、地方を去りてロンドンの場末に移り、獨身にて家を構へ、時の文學社會と交遊せんの企圖なりしが、其の性交際に適せざりしにや、居ると年餘、尙何等の注目をも世間より牽かざりき。一千七百七十年より同七十三年まで、ギッポンは孜孜として『羅馬衰亡史』前三卷の著述に従へり、而して其の信友すら此の著の大事業たるを夢にだに想ひ得ざりきといふ。みづから曰はく「稿を起すのはじめに當た

りてや、百事悉く茫々たりき、此の著書の標題すら、帝國衰亡の眞時期すら、其の緒言の限界すら、篇章の區劃すら、敘事の順序すら」と。かくて七年の後、草稿の成りたる分を悉皆焼き棄てんとせしことも屢ありき。ギッポンが其の修辭に苦心せしこと、眞に驚くべきものあり、後々の章はさもなかりきといへども、其の第一章の如きは三度悉く稿をかへ、第二、第三の如きも、おのゝ二回づゝ稿をかへきといふ、而も件の劈頭の數章は、全篇中の尤も妙ならざる部分なり。文の體制を一定するの困難と冒頭落筆の至難なることとの證は、ギッポンが實例に於て之れを見るべし。

一千七百七十四年より同八十三年までは、衆議院議員となりて英國々會に在りしが、政治家としては特に記すべき程の功過無し。一千七百七十六年『羅馬衰亡史』の第一卷ロンドンにて出版せられき。世人は大喝采をもて歓迎し、男女争うて購ひ讀めりき。同八十一年、第二、第三卷出づ、第一卷に比すれば辭意双つながら優りたれど、讀書社會の歡迎は第一卷に劣りたりき、曲やゝ高うして俚耳の悦ばざるためし也。加之、第一卷なる最後の二章は、頗る僧侶をして不快を感じしめ、論難詬罵漸く甚しきに至りしかば、暫く續篇の筆を止めて之れに答へざるを得ざりしかど、彼

れもと論辯の術に長ぜず、隨うて敵者と闘ふの不利なるを感じき。さればにや、敢て前説を取消さざりしも、其の基督教に對する調子は、次第に穩和となり、中正となり、復た彼の有名なる第十五、第十六章の過激なる叙説を見ざるに至りき。此の苦心經營の間に、家計ますます不如意となりしかば、やがて首都なる其の家をすて、家財を提げて遠く瑞西なるローザンに移り、舊友デイヴルダンと共に住みて、専ら其の業に潛心せり。さて第四卷は英都發足の前に成り、第五と第六とはローザンにて物せられき。彼の人口に膾炙したる巻尾の數行を綴り果てしは、實に一千七百八十七年六月二十七日の月夜、其夜將に半ならんとせし程なりきとぞ。同十八年の夏、最終の三卷も悉くロンドンにて發售せられき。それより後のギッボンが身の上は、また特に記すべき程の事なし。其の身軀の漸衰して宿痼の再發せしと同時に、引き続き其の知友をも失ひ、剩へ佛國革命の擾亂の爲に倉皇瑞西を去りて本國に走らざるを得ざるに至り、一千七百九十四年一月竟にロンドンにて逝りき。時に行年五十七。終生妻を娶らざりしかど、其の最初の意中の人スーザン、テッケルに對しては、永くアレットの戀愛を持續せりきといふ。又交友に篤く、親

戚に忠なりき。宗教に關しては、自由思索家を以て目せられ、或は懷疑家と稱せらる。又歴史家としては、前にもいへる如く、ヒューム、ロバートソンに優ること幾段なり、蓋し、他の二家の今尙史家として文學史上に推重せらるゝは、むしろ文章上の功績に由れるなれど、ギッボンは然らず、彼れが大著は今も尙信憑すべき史として讀まるゝなり。フリーマン曰はく。

近世の考證の爲に、(史壇以外に)排除せられざる、若しくは排除せられんさせざる十八世紀の史家は、ひゞり彼れあるのみ。(中略)彼れが結構(考案)は、百科全書的(周到普遍)にして、之れを實施するの鹽梅はた精確周到、成心僻見の弊無く、考證悉く據る所あり、彼れが著は永く史家に重んぜらるべし。

と『羅馬衰亡史』は、おのづから三大部に分かる、卷初よりコンスタンチンまでを第一部とし、コンスタンチンより羅馬滅亡までを第二部とし、さてそれより東羅馬の首都コンスタンチノープルの陥落までを第三部となさば、更に穩當なりしならん。實に是れ古今有數の大歴史なるを、十年一日の如く、些も倦める色無く、竟に之れを完成せし勇氣と手腕とは、眞に推服すべきものたり。さて彼れが文致につきては、其の妍媸殆ど何人にも瞭然たるべき筈なるに、不思議にも批判は今尙一定

五〇六

せず、されど嚴密に評すれば、其の雅健と流麗とは人皆の認めざるを得ざる所也、又其の些事を叙狀する筆の、動もすれば莊重華麗に過ぎて、兎もすれば波瀾變化に乏しく、洒脱快活の趣致に貧なる、是れはた敵味方の認むる所なるべし。さもあれ、此等文病は重に第一卷に於て認めらるゝ所、卷の進むに隨うて筆もまた頗る進めるが故に、全牀より評すれば、ギボンが史筆は此の莊嚴なる大歴史に相應したるものといふべく、氣力あり、威嚴あり、精嚴また瑰麗、永く史筆の表極たるに稱へり。さて、史家としては、十八世紀の文壇また以上の三名家に匹すべき者なし、されどここに個人の詳傳を著してマコーレーには傳紀家の王と稱せられ、隱然英國の文壇に傳紀の一紀元を劃したる者あり、ジェームズ・ボスエル（二七四〇—一七九五年）是れなり。波れは其の爲人よりいへば、屑々たる小人のみ、才器必ずしも俊秀なるにあらず、學識はた尋常なりしが如し、而も其の名の人口に膾炙し、其の筆に成れる一部の書の今尙愛讀すべき十八世紀文學の遺物中に數へらるゝは、そもく、また何故ぞといふに、其の理二つあり、一は彼れが才の特に社交的現象を觀察し、銘感し、叙狀するに秀絶なりしこと、一は當代第一の名家ドクトル、ジョンソンに心服し、全

力を傾けて其の言行を録せしが故に、其の叙說せる事柄其の物が讀むに足り、隨うて其の穿細なる苦心も現末の讀書社會に認められ、名聲を永く後世に傳へたるなり。

按ふに傳記は英國にては最も晩く花を着けし詞林の一枝なり。之れより先き、ウォルトンが『ドーン』及び『ハアバート』、スプラットが『カウレー』、オルチースが『ローリー』傳など、事柄の上よりも、文章の上よりも、ほゞ讀むに足るべき傳紀已に乏しからず、出でたりしが、それらは皆舊牀の傳紀にして、近世に謂ふ詳傳に近きものは一千七百七十五年に上梓せしウィルヤム・マンソンが著『Life and Letters of Gray』を嚆矢とす。此の『グレー傳』とても、尙甚だ不完全の著述なりしを、ボスエルが特得の枝倆はそれを模範として能く出藍の名著を成せり。ボスエルがはじめてジョンソンに見えしは、其の二十三歳の時（一千七百六十二年五月）なりしが、彼れが彼の博士を景仰せしは、勿論此の時にはじまりしにあらず。一千七百六十八年には、其の著『An Account of Corsica』といふを世にいたし、同七十三年にはジョンソンの推薦にて『文學會』に入り、同年の暮には夫子ジョンソンと共にスコットランド地方を歴遊し、日々の聞睹および夫



子に關する日常の些事を録すること詳細綿密を極はめたり。同八十五年に至りて『Journal of a Tour to the Hebrides』と題して出版せしは、此の旅行の日記なり。その後六年(一七九二)其の傑作『Life of Samuel Johnson, L.L.D.』(法學博士サムエル・ジョンソンの傳)成りぬ。サー・デヴィッド・レイノルズに獻呈すと記したり。世界の讀書社會は此の著を激賞して、今尙古今東西の史傳中に於ける尤も面白きもの、五六部中に算ふ。ジョンソンが一身に關する事實の其の坐臥、寢食、一舉、一動、一擧、一咳の末までも、目に睹るが如く叙説狀寫せられたるのみにあらず、英國十八世紀文壇の情況、否、當社會の模様さへも此の書を鏡として髣髴するに足る。空前はいふを俟たず、絶後の褒稱すらも、恐らくは否拒し易からざる好著なり。

此の新傳紀の特質は、著者即ち傳する者の見解、褒貶、若しくは推測的論斷等を主とせずして、本傳即ち傳せらるゝ主人公其人をして、及ぶべき限りは、みづから其の閱歷を語らしめ、以ておのづから其の性質を表現せしむるを旨とせる所にあり。こはボスエルの當時に在りては、マンソンの不完全なる一著の外に相似たる先例もなかりしことゆゑ、甚だ大膽なる試験なりしを、彼れが特長は彼れを助けて古今稀

有の功を成さしめたり、若しボスエルにして更に廣く眼を放ち、當時の全社會を觀察して叙寫すること、此の『ジョンソン傳』にひとしかりしならば、其の功名は更に幾等の重きを加へ、十八世紀の文學もまた更に一大著を加へしならん、其の固有の特長のひとり一夫子の周邊にのみ彷徨せしこと、あたらしといふべし。彼れの談話を再現するや、殆ど今の速記者もしかじ、言々句々の間、談者の性癖宛として活動す。彼れは眞に企及し易からざる劇詩的筆力に富める者なり、措辭總じて平淡、其の師ジョンソンが文の誇大過重なるに似ず。

史傳の著者につきて、こゝに紹介せざるべからざるは、時の政事上及び學理上の論文家なり。按ふに、十八世紀は、政治上にも、宗教上にも、黨派頻りに樹立して相軋轉せし時代たりしのみならず、上にも一たび叙し置きたるごとく、人々自負自尊の念強く、何事につけても互ひに固く我見を執り、我意を張りてかりそめにも相下ることを肯んぜざりし時代なれば、自然の必要よりして、辯難駁議の筆鋒研鑽せられ、就中政治界、神學界、乃至倫理學界には、許多の著名なる論文家を出だしたりき。先づ哲學及び倫理學上の論士としては、上に挙げたるヒュームにつきて、ハッチソン Hut-

chesonあり、ハートレーHarleyあり、リードReidあり、又神學上の論士には、監督チヨセフ  
 パトラアにつぎて、ウィルヤム、ペーレーPaleyあり、其の他所謂自然神論派の末輩、メソ  
 チスト宗徒の後進中にも、多少注意すべき論客無きにあらず、但し其のうちこゝに  
 特筆すべきは特リエドマンド、バアクあるのみ。

エドマント、バアク（一七二九—一七九七）は、口語上の雄辯家として英のデモ  
 スゼニーズと推稱せらるゝことあると同時に、或は英國の最大論文家とも激賞せ  
 らる。かゝる評は明かに溢美なりと雖も、其の當代に匹敵なかりしは勿論にして、  
 苟も其の學問の該博と其の嗜好の多方面と其の識見の卓拔と其の筆力の縦横自  
 在とを含味し得たる者は、所詮彼れが英國文學史中の一偉人たることを認識せざる  
 を得ざるべし、但惜むらくは、其の文壯に過ぎ、華に流れて、間々ジョンソンが筆と其の  
 病を同じうせり。バアクが政事上の論文は、こゝに枚擧するに遑あらず、其のうち  
 最も世に聞えて、今尙翫讀せらるゝは『佛國革命論』“Reflections on the Revolution in  
 France”なり。又其の文藝に關したる論文は、有名なる『壯美と優美との討究』  
 “Inquiry into the Sublime and Beautiful”にして、美學尙幼稚なりし當時の著述としては、

## Edmund Burke

其の價值頗る大なるものなり。

バアクにつぎて時の政論家中に錚々の名ありし文人は彼の覆面の文士ジュンヤ  
 スJuniusなり。ジュンヤスといへるは、時の兵務局の書記官たりしサー、フィリップ、フラン  
 シスが世を忍ぶ一時の假名たりしと、今は明かに知れ渡りたれども、其の當時は何  
 人も之れを知るものなく、第一流の爛眼家たるドクトル、ジョンソンすら、所謂ジュン  
 ヤスの書簡文をばバアクが筆ならんと推測したりき。今日より見れば、ジュン  
 ヤスが文の價值は、其の時事との關係を失へるが爲に、譬へば、殘肴冷炙の如く、其の  
 旨味の半以上を遺失したり、按ふに、更に幾十年かを経ば、單に文壇瑣話の一例證と  
 してのみ援引せらるべきものならんか。

十八世紀の末葉は、書簡文をしてはじめて一種の文學たらしめし時代なり。是  
 れ畢竟、政社、詩社、の盛んにして、交際の頻繁なりし結果なるべし。而して此の發達  
 に與りて最も力ありしは、グレイ及び其の友のウォルポールなるべく、つゞいては、  
 スタアフィールドの第四世の伯、フィリップ、ドオマア、スタンホープなるべし。伯が其の  
 庶子に與へし許多の教訓書信は、今日に至るまでも文壇の珍什とせられたり。

## Junius.

## 第十三章 ヤングよりグレイに至る諸詩人

詩風の變移——ヤンク——『夜思』——ヤングと同期の第二流詩人——トムソン——『四季の歌』——『懶惰城』——コリンズ以下の小詩人——グレイ——其の諸作——『墓畔吟』

ポープが詩風の一世に冠たりしや、庸才の徒はひとへに其の蹤を追うてポープが摸擬をのみ力めたりしが、やゝ抱負ある後進は、其の到底企及すべからざるを悟りたりしと、時尚のやゝあらたまりたりしとに由りて、漸く其の着眼を一變しき、是れ英國の詩歌に近世に所謂自然主義ナチュラルリズムの入り來たりし發端なり。一千七百二十六年にトムソンの『Winter』、『冬の卷』世に出で、同五十一年にグレイの『Elegy』、『墓畔吟』でしまで、其の間二十有五年、此の間にあらはれし主なる詩歌十篇餘り、それらは皆新詩眼に基きて成れりしものなり。概しては、詞意沈鬱にして、句々莊嚴、其の調子何となくゴシック風即ち中古風の氣脈を帶び、且つ（いまだおぼろげながらも）自然の現象を、自然の眞なるまゝに、研究せんと欲するの傾向、其の詞句の間に隱然たりき。律格の上よりいふも、從來の諸作は、其の眞面目の詩歌なる限りは、すべて彼の『ヒロイック、カプレット』と稱する昂起格アイムプリゼンの一種をもて物する例なりしが、此の格いつしかに

廢れて、當時の名作中『四季の歌』の如き『夜思』の如き『墳墓』の如きは、没韻律語をもて綴られ、『The Castle of Indolence』、『懶惰城』の如き、『The Schoolmistress』、『女教師』の如きは、スペンシリヤン解スパンもて、『The Spleen』及び『Groggar Hill』の如きは、八音格もて綴られたり。その他、クレイ、コリンズ等が壯年の作は、いづれも種々の新律格をもて試みられき。但し、一千七百五十四年に發見せしクレイが（晩年の經營に成れる）諸作の如きは、此の範圍に屬せざるものとす。

當期の詩人中、最も卓越せりし者は『墓畔吟』の作家グレイにして、之れに次げりしものはトムソンとコリンズとなり、而して當期即ち十八世紀の第二期詩壇と其の第一期即ちポープ全盛時代との關鎖となりて、おのづから其の過渡を代表せる者を有名なる『夜思』の作者、エドワード・ヤング（一六八一—一七六五）となす。

ヤンクはオックスフォード大學の出身にして僧也、其の作あまたあり、『The Last Day』、『The Force of Religion』などいふ作の外に、劇詩に『Busiris』（悲劇にして舞臺に上せし）時の成功を博せしものあり。また『The Revenge』と題せる劇詩あり、『Zanga』と云ふムリア人を主人公として作れるもの、シェイクスピアの『オセロ』と相觸れざる所ヤン

Edward Young.

クの技倆にして“Busiris”よりは優ると一等なれど、舞臺にては前作ほど好評ならざりきと云ふ。尙其の他にも、諷刺詩、抒情歌など若干あれど、最も傑れたるは“Complaint, or Night Thoughts”『夜思』(一七四二—四四)なるべし。こは九卷に分かれたれ、没韻律語無慮一萬行より成れり、形式の上よりいへば莊嚴にして瑰麗なる所、頗るミルトンの面影あり、其の瑕は語繁きに過ぎて形容虚に流れ、動もすれば花多くして實乏しく、且つあまり長篇なるが爲に、處々巧拙の差甚しく、珠玉、瓦礫相聯なるの感あり、加ふるに、其の人生及び自然に對する觀念一向に悒鬱に偏したるが故に、所説間々中正を失し、此の教訓詩をして其の價值の幾分を減ぜしむ。されど、此の瑕失を補ふべきものあり、曰はく其の當意即妙の機才、曰はく其の落想の巧、曰はく其の筆致の威嚴と力、曰はく其の律調の流麗是れなり。ヤングについで一時名を知られしは“Pastoral”と云ふる作を『Spektertoea』にいだし、ジョン、バイロム (一六九二—一七九三)、“The Spleen”と云へるは八百行の長篇を遺し、マッシュェー、グリーン (一六九六—一七三七)、ジョンソンに傳せられて後世に名を傳へし“Vanderer”の作者リチャード、サエージ (一六九八—一七四三)、トムソンの『冬』

の卷と同年に“Gronger Hill”を著し、ジョン、ダイヤア (一七〇〇—一七五八) “The Grave”と題したる凡そ八百餘句の没韻詩、教訓詩をヤングの『夜思』と同年に (一七四三)世にいだし、年壯にして世を辭し、或はヤングよりも優りたりと稱せらるゝロバート、ブレア (一六九九—一七四六)、以上數名に過ぎず。此の中ダイヤアはウェールズの人、ブレアは蘇國の人、皆第二流の詩人をもて目すべきものなり。一代の詞宗たるに叶へるはポーアの後、グレイの前、只一人のデュームス、トムソンあるのみ。

トムソン (一七〇〇—一七四八) は蘇國名族の子、神學の學生としてエジンバラの大學に學び、二十歳のころ已に筆を詩篇に着けき。一千七百二十五年、青雲を欲してはじめてロンドンに上り、衣食窮乏の間(同年の秋)“Winter”『冬の卷』一篇を作し翌年三月に至り、知音の扶助を得て、世にいだせり、詩人マレット、脚本家ヒル等之れを激賞し、喧傳せしかば、トムソンが詩名たちまちにして揚がりき。一千七百二十七年には『夏の卷』いで、其の翌年には『春の卷』、同三十年には『四季の歌』完璧となりて發兌せられき。今傳はれるは五千五百行より成れど、初め世に出でし時は行

數はるかにすくなかりきといふ。蓋し版を改むる毎に修正を施し、且つ新たに話譚、感慨等を挿加せし爲め、竟に現存せるものゝ如くなりしなり。此の有數の作は、四季の人事、景物を叙寫するに於て、趣くとも空前の光譽を荷ひ得べきものなり、其の自然を描ける筆は、未だ後のウォズワースほどに深遠なりといふべからざれど、人事と景物とを錯綜して叙狀し來たるや、讀者をして目に其の物を睹、耳に其の聲を聞かしむるの魔力あり、其の質にして實なる所、第一期詩壇の諸作と全然面目を殊にしたり。『冬の卷』尤も短く、又尤も清新の想像に富めり。而して『春の卷』は、以て作家の學識見を窺ふべく、『夏の卷』は以て其の叙事の本事を見るべく、『秋の卷』及び其の卷末に添へたる自然の徳を頌するの歌 (Hymn to Nature) は、寫景詩としての趣味の外に、作家の人生觀を髣髴するの料たるべし。

『四季の歌』を著して詩名 *ボープ* を凌がんとせし時、トムソン正に三十歳なりしが、牧師某の息が附添教師 (Governor) となりて佛、伊に漫遊せり、此の羈旅中の閱歷は其の作 "Liberty" の資材となれり。但し、トムソンの詩才は其のところより次第に萎靡し、悲劇の作なども數篇ありしが、一千七百四十八年に物せし、其の第二の傑作 "The

Castle of Indolence" 『懶惰城』の外は、取りいで、言ふべき價ひ無し。此の作は下二篇に分かたれ、上篇にては専らインドルニスと稱する一妖賊が棲める城郭を狀説し、且つそこに捕はれたる醉生夢死の徒 (懶惰者) の生活に及び、さて下篇にては Arts (技藝) と Industry (勤勞) とを代表せる某武士が其の勇力によりて竟に此の妖賊を退治する事を叙せり。沈鬱と戲謔とを奇怪にも混合せる作にて、純然たる夢幻的物語也、譬へば、屋氣樓の虛靈にして美妙なるが如し。按ふに、トムソンの當時の詩壇に於ける勢力及び其の十九世紀の詩人に於ける感化は、頗る小少ならざりしに似たり、現にシェリーの如きも『懶惰城』に負ふ所尠からずといふ。而もトムソンの感化と勢力とは、其の及ぶ範圍廣からざりしゆゑに、其の中心詩宗としての名聲は、竟に *ボープ* ほどに高からで終りたり。

トムソンとグレーとの間に名をあらはし、第二流以下の詩人は、曰はくリットルトン、曰はくクロウゾア、曰はくブラウン、曰はくカトリック (優人)、曰はくウイリヤムス、曰はくウエスタア、曰はくウエズレー、曰はくシエンストリン、曰はくホワイトヘッド (桂冠詩宗)、曰はくウイリヤム、コリンズ、是れなり。其のうちウイリヤム、コリンズ (一七二一—

七五九)は、チェスタア市の製帽師の子なり、初めはウィンチェスタアにて、次ぎにはオックスフォードなるマクダレン大學にて業を修めき。壯時ロンドンにいいで、トムソン等と交遊し、著す所尠からざりき。生來多病なりしかば、二十八歳のころ故郷に退き、尙若干の作をなししが、三十歳以後宿痼漸く重り、つひには狂癲の症となり、詞友にだに忘れられて逝りにき。

コリンズの作は今日に遺存せるものいと尠し。専ら抒情詩に秀でたれど、其の作の尤も見るべきは短篇なり。『The Ode to Evening』(黄昏に與ふるの歌)及び『The Pastion』などは尤ももてはやされたりし作なり。其の他『The Ode on the Poetical Character』、『Popular Superstitions』、『Dirge in Cymbeline』など皆其の詩才の年と共に進みつゝありしを證するに足るといふ故に近世の批評家中コリンズの夭折を惜む者多し。ゴッス氏はコリンズを評して曰はく、彼れが作には彫像師が刀の趣致あり、其の句々劃然として截然たり、大理石の如く清純なれども、亦た大理石の如く冷かなりと。

詩歌の最惡時代と貶稱せられたる英國十八世紀文壇の汚名幾分を銷却する者は、

當第二期の殿となれる大抒情詩家、有名なる『墓畔吟』の作者トマス、グレー

(一七七一—一七七七)なり。グレーとコリンズとは精査すれば、其の質痛く相異なれりと雖も、一見相似たる所も尠からず。二者共に作に乏しく、又共に抒情詩家たり、二者共に甚しく活喩法、諷喩法をよろこび用ひ、又共に希臘風なる精緻微妙なる筆致を鍊磨し、且つ當時は殆ど等閑視せられ、近年に至りて次第に重視せらるゝ外國文學(例へば、中古文學、スカンヂナヴィヤ文學、ケルト文學、など)に精通したりき。もとより著者としても、個人としても、將た學者たるの點より見るも、グレーのコリンズに優れるや論無しと雖も、醇乎たる天然の抒情詩家としてはコリンズや、グレーに勝りたり。コリンズの歌ふや、鳥の歌ふが如く、歌はざるを得ずして歌ふなり、グレーに至りては正に是れ韻語に於ける絶好技術家なり、天然の才資も元より乏しからざりきと雖も、博く學修し、精しく研鑽して、そをますく圓滿にせる概あり。要するに、二家各、其の長を殊にせるなり。

ポーブとウォットオスとの間に立ちて英文學界の一大詩人と見做さるゝトマス、グレーは、一千七百十六年、十二月、倫敦市に生まれ、イトンの學校にて教育せられ、同

三十四年イトンよりケムブリッジに移り、ベムブローク校に入り、後またピーターハウス校の准校友となれりき。即ち其の過半生をケムブリッジ校内にて過ごし、なり。其の未だ得業せざりしや、已に若干の羅旬韻語を物して之れを世に公にし、又一千七百三十八年には、古代文學中の妙句をぬきて、屢々絶好なる英國韻語に翻しき。同三十九年には、其の友ホレリス、ウオルポールに伴うて佛、伊、兩國を漫遊し、其のはじめてアルプスを超えしや、古來の漫遊者が、風流の眼ある詩人すらも、只怖ろしとのみ詠めずてたりし此の歐南の山色のいと氣高く美しきを感銘し、其の友ウエストに書してアルプスの山景を報じ、且つ曰はく「斷岸や、飛泉や、巉岩や、一として宗教と詩歌との旨のみちくたらぬは無し」*“Not a precipice, not a torrent, not a cliff, but is pregnant with religion and poetry.”*と。羈旅三年、一千七百四十一年に及びて、從來交誼厚かりしウオルポールと端なくも爭論して友誼破るゝに至りしかば、相分かれ、別々に歸途に就きしが、同四十四年、幸ひにも亦舊盟を尋ぐを得たりき。歸國後二月にしてクレーは其の父を失へり、家事すべて紛然たり。同年冬ケムブリッジに歸寓す。此の年、著す所(一)トムソン風の悲劇詩の斷章『アックリックス』(二)“On Spring”

(iii) On a Distant Prospect of Eton College” (四) On Adversity” (五) “Sonnet on the Death of West” (以上皆抒情詩)なり。『墓畔吟』(“Elegy written in a Country Churchyard”)の稿も、

の年に起こしたりき。爾後五年間は、クレーが志氣沮喪せし時期なり、彼れは寂黙として只管ピーターハウス校なる一室のうちに閉籠り、古文學の研鑽に世を忘れたる者の如くなりき。一千七百四十七年一小冊子を公にす、所謂“Eton College Ode” (イトン學校を憶ふの歌)是れなり、而してこは何等の感覺をも讀詩社會に與へざりしなり。又彼の可憐なる小品 “The Ode on the Death of a Favorite Cat” (愛猫の死を悼むの歌)を物せしも此のころなり。かくて一千七百五十年までに、更に若干の作あれど、其のうち特筆すべきは『墓畔吟』なり、こは前後十有二年の彫琢刻鏤を経て完成し、同五十一年の冬、はじめて匿名にて世に出だせり。さてまた同五十三年には、其の既往の諸作に “A Long Story” と題したる新作を加へたる詩集 “Six Poems by Mr. T. Gray” 世に出でたり。以上をクレーが文學的生涯の第一期とす。

第二期に於て特筆すべき作は、希のピンダーの凱歌に摸して、むしろ彼れを凌がんとする抱負をもて作られし “The Progress of Poesy” 同むくピンダーに摸して物せし

“The Liberty of Genius (今は只斷章のみ遺れり) 及び “The Bard” 『詩人』なり。『詩人』は一千七百五十四年の冬に起稿し、同五十七年の夏に脱稿しきといふ。同五十六年、故ありてピータアハウス校を去り、ベムプロック校に移り、かくて世を辭せしまでそこに在りき。翌年、其のピンダー風の抒情詩印刷せられて世にいづ、而してクレイが詩名は忽然として揚がり、爾後當代の詩宗をもて目せられき。後數月、桂冠詩宗コレイ、シッパア逝りしかば當局者は其の後を襲がんことをクレイに勧めしが、固く辭して諾せざりき。同六十年、六十一年は、専らケルト文學(即ち英國古代の詩歌)を研究せり、蓋し古詩史を綴らんの心ありしなり。此等ケルト文學の研究は、同七年の末に至りて彼れをして二種の『エッダ』まがひの詩篇を作らしめき、其の一は “The Fatal Sisters” にして其の二は “The Descent of Odin” なり。さてまた同六十八年、其の全集發見せらる。同年ケムブリッジ大學の近世史及び近世の國語の教授に任ぜらる、されど一たびも講說せしことなかりきといふ。かくて同七十一年、六月、ベムプロック校なる其の居室内にて逝りしまでの彼れが身上の事件は、後進の詞客等と交りて、屢々夏期の漫遊を世に知られざる勝地に試みしと、及び “大學就職の歌” を物せ

し年(一七六九)の秋、彼の湖水地方に旅行せしと、其の紀行を散文にて綴りしと、殆ど其の他には何の語るべき事もなし。クレイの如きは眞個平靜なる學者的生涯を過せし、人なり。

論者或は、クレイが作の乏しきを咎めて、英國詩人中の第一位に置くを肯せざるものあり、されど詩文人の大小は、量によりて定むべからずして、質によりて決すべき者たり、又其の時尙の如何に詩歌に不利にして作家の神興を促すに適せざりしかをも察せざるべからず。クレイの作は、げに其の量をいへば少なりと雖も、其の詩想の創新と多様と其の意氣の新鮮と剛健とは、共に甚だ多とすべきものなり。クレイは明かに十八世紀詩脈を結了せる作家たり、彼れは莊嚴なる『墓畔吟』に於てトムソン派の頂點を代表し、同時に彼の派の系統を一斷し、轉じて精巧なるピンダー的詩風を興し、復然として第一期(オーガスタン)韻語の舊窠を脱して、後のシェリーの爲に新しき詩道を開けり。若し夫れ晩年の作『エッダ』又は彼の眞偽不明なる古詩人オッシュヤンが作に鼓吹せられて物せし小品の如きは、時尙に先だつこと更に幾十歩、明かに十九世紀の詩潮を先示せるもの、純然たるローマンチシズム(中古



派、又の名傳奇派の作に類す。クレイが精進の蹤以て歴々として徴すべし。オッシュマンの事は左に直ちに下に語るべく、ロマンチズムのことは第十九世紀文學の劈頭に語るべし。

詩人にして博覽洽讀、學識古今に涉り、遠くは希臘の古文學より、近くはアイストラッド文學に至るまで、苟も文學に關する限りは、之れを修めざるはなかりしクレイの如きは、古今甚だ稀に見る所なり。同代の名士某は彼れを評して、歐洲に於ける方今第一の博識ならん、といへりき、デモン、ミルトンの博學なりしも、或はクレイには一歩を譲りぬべし。クレイの學を好みしや、常人の色食に於けるよりも甚し、彼れは沈鬱不活潑なりしにも拘らず、其の智的勞力に精勵なりしと、其の發達の著大なりしと、眞に驚くべきものあり、されば、彼れ嘗ていへりき、事に従ふは大幸なり、(To be employed is to be happy)と、勉學はすなはち彼れが爲に慰鬱排悶の要具たりしなり。クレイが作のうち、論ずるまでもなく、第一位を占むるものは『墓畔吟』なり。もとより一部分の上よりいへば、此の作に優る句もあまた見ゆれど、全軀の精妙と圓滿とは、到底、此の作に及ぶものなし。其の着想は平明にして、特に奇抜なる箇所もな

けれど、其の語や、其の調や、精を極め、美を盡し、句々貫珠の如く、一字、一言をも増減すべからず、恰も是れ古名匠の刀に成れる靈妙秀絶なる彫像と一般、愛すべくして玩ぶべからず、崇むべくして親しむべからざるの致あり、此の故にスフィンバアン氏は評して曰はく、此の作のみの譽にても、クレイは將來の諸代に對して、奪ふべからざる無上の地位を占む」と。『墓畔吟』は、夙に我が讀者社會の熟知せる所、故に今多く論ぜず。

#### 第十四章 グレイ以後の諸作家

十八世紀の末葉——詞壇の沈滞——文學上の二大欺騙——チャタートンのロリー詩集——マックファアソンのオッシュン翻譯——オッシュン熱——其の他の小詩人——ゴールドスマスミス——其の傳——其の作——劇の作家  
シエロダン——當代の劇壇

ゴッス氏の所謂デブソン時代<sup>ゴッス</sup>の末造は、トムソン、クレイ全盛の當時に於て一度幾分か銷却したりし、彼の散文時代といふ貶稱を又もやいつとなく招還し來りし時代にして、恰も一小頓挫の期節なりき。詞壇大革新の機運は、隱然として切迫しつゝ、ありしにも拘らず、クレイは漸く老い、ヤングは黙し、溫柔コリンズの如きものも又

出でず、自然の研究に忠なることトムソンの如きものも再び現れず、爛鼻鼻を撲ち、陳彩眼を倦ましむる底の作は、日に月に夥しかりしも、些の清新の氣に接觸するの機なかりしが爲に、詞壇は萎靡し、沈滞し、讀詩社會將た甚しく倦怠して漸く睡眠に就かんとせりき。此の時に當りて、作家も、批判家も、世間の讀者も、稀有なる文學上の一大疑獄によりて、其の懶眠を破られたり。二大疑獄とは、一はプリートルの鬼才トマス、チャッタアトンが贗作に係る所謂ローリ詩集の疑獄にして、二はスコットランドの私學教師デームス、マックファアソンが譯述に係る所謂オッシュャン詩集の疑獄なり。チャッタアトン(一七五二—一七七〇)が驚くべき天一坊的欺騙は、幾ばくもなくして大岡越前にも比すべきクレイが爛眼に看破せられて眞偽瞭然となり、憫むべき童詩人は、空しく鬼才の名を詞壇に遺して、飢えて倫敦の街頭に非業の死を遂げ、所謂ローリ問題は文壇の一時の珍瑣談として世に傳へらるゝに過ぎざりしが、マックファアソンがオッシュャンの翻譯に至りては、其の影響の波及せし範圍の音に英國にとゞまらざりしのみか、其の眞偽に關する疑議の如きは、今尙悉くは解決せられざる趣あるに似たり、加ふるに、其の十九世紀文學に於け

る關係も、また多少注意しおくべき價值あり、兎も角も爰に略説する要あるべし。オッシュャンは紀元後第三世紀のころスコットランドに生まれたる詩人なりと稱せらる。其の父フィンガル Fingal はスコットランド高地々方の慄悍なる酋長にして、屢々四隣と戦うて勝ち、勇武絶倫の名譽を博せりしが、オッシュャンまた勇敢なること父に劣らず、數々從軍して戦功を樹てき、云々。所謂オッシュャンの軍物語歌は、此の從軍の間の見聞、感慨を叙寫せるものと稱せられて、其の高地々方の風物の描寫、未開族が武強撲茂なる感懐の記叙など、兎も角も、時の讀詩社會には新しく又珍らしかりしかば、古代詩人オッシュャンの名は、忽ちのうちに四方八面に喧傳し、スコットランドのホーマアを以て之れに擬するものもあれば、ホーマアの優劣を議する者さへ生じ、歐洲列國の文士等皆争うてオッシュャンを翫讀し、竟には國として其の翻譯を有せざるは無きほどに至りたり。之れをこゝにオッシュャン熱と假稱す。さて其の熱の最も激甚なりしは、一千七百六十一年(即ちマックファアソンがはじめて其の義譯を公にして世間にオッシュャンを紹介せし年)より、同七百六十三年(即ちマックファアソンがオッシュャン詩集を八卷に敷衍して再刊せし年)までなりしが、其の眞偽及び價值に關する評論の餘波は其

の後十四年間收まらずして、尙こゝかしこに澎湃たりき。今日にありては、尠くとも聰明なる英國の讀詩家中には、決してかゝる贗物に驅せらるゝが如き味者もなけれど、オッシャン熱猖獗の當年に在りては、獨の大詩人ゲーテすらも、オッシャンが眞偽を判じかねて、むしろ之れを珍とせし色ありきと聞えたる程なれば、彼の爛氣、陳彩に鑿き果て、何等かの新味を渴望しつゝありし、時の一般の讀者輩が狂喜して之れを迎へしは無理ならぬ次第なり。其の疎豪の風調と其の粗厲の着想とは、蕪雜生硬なりしにも拘らず、腐爛の擬古調に倦み果てたる新代の好尙に投合して、圖らずも詩壇に一波瀾を捲き起し、彼の監督バアシーが『古歌謠集』(Reliques of Ancient Poetry) (一七六五發兌)トマス、ウァートンが『英國詩歌史』(History of English Poetry) (一七七七發兌)などの感化影響と相俟ち、相助けて、詩風刷新の一大導火線となりき。オッシャン熱は、此の點より見て、文學史上の一の大なる現象と思惟せざるべからず。蓋し按ふに、彼の凡詩人マックファアンが贗譯の筆にかゝる大魔力のあるべき筈もなけれど、凡そ人の書を読むや、必しも其の書の固有本具の旨味をのみ鑑賞するものにあらざして、多くは自家の主觀の影を書中に追ふことを喜ぶものなるがゆゑに、時のオッ

シャン崇拜者が其の偶像に對せしもすなはち是れにて、彼等は皆心ありて(即ち未成、形の新詩思ありて)此の粗大含糊なる(粗大含糊なるが爲に漠然、漠然たるが爲に何となう崇高げなる、又漠然たるが爲に如何なる解釋をも容るゝ)此の義譯詩を迎へたり、而して其の粗大なる風調の底に隨意に自家が絶叫の反響を読み、其の含糊なる詞句の間に自家が感想の反映を捉へ、言はゞ自ら欺騙して、喝采激賞したりしなり。譬へば、二十六夜の月の影を三尊の彌陀と解し、木のうろの蜂の聲を目に見えぬ佛の讀經と聽きて、隨喜渴仰するものゝ如し。要するに、彼等は自家の主觀を客觀化して、之れが爲に謳歌しつゝありしなり。後年、獨のゲーテ、英のバイロン、佛のシャトリアンなどが歌謳せし所は、オッシャンが作に投射せられし此等未成形の主觀の本體が、形成せられ、醇化せられて、圓現せられたるに外ならざるなり。所謂オッシャン熱減退の後には、時の文壇、また何の目ざましき事蹟もなし。作家の傳すべきものも、ジョンソンが友ゴールドスミスと脚本家シェリダンとあるのみ、其の他は、

あしなべて第三流以下の詩人なり、其の間多少の優劣はありと雖も、要するに爛氣、陣彩中の人、此の小史中に細説するの要なく、遑なき也、こゝには只其の姓名のみを

紹介して直ちにゴールドスミスの傳に移らん。

アケンサイド Akenside (一七二一—一七七〇死)。グラント Granger (一七二一—一七六六死)。スマート Smart (一七二二—一七七〇死)。アンステア Anstey (一七二四—一八〇五死)。フート Foote (一七二一—一七七七死)。ホードリー Hoadly (一七〇六—一七五七死)。タウンリー Townley (一七一四—一七七八死)。ケリー Kelly (一七三九—一七七七死)。ロイド Lloyd (一七三三—一七六四死)。ウォートン Warton (一七二八—一七九〇死)。ファルコナー Falconer (一七三二—一七六九死)。ダーキン Darwin (一七三一—一八〇二死)。

オリヴァー・ゴールドスミスは、千七百二十八年、愛蘭の一小村なる一貧牧師の家に生まれき。オリヴァーが閱歴は所謂クラブ街文士の面影を示すに足ればやゝ細かに叙説すべし。彼れは幼にして痘瘡に罹り、十七歳ダブリン大學に入りて給費生たりしが、性來懶惰放恣、不規律と不謹慎と教師に對しての不柔順と女性的惻隱心とによりて學友間に知られき。彼の夜陰竊に街衢に出で、流行歌を聞き、やがて之れを自作し、一作を五シリングに賣りて小遣錢を得しは、その頃のとより。

### Oliver Goldsmith.

大學を出でし後、教師僧侶、狀師、醫者と、さまざまに試みしが、一も其の職を遂ぐる能はず、つひに單身故山を去りて和蘭、佛蘭西、獨乙、瑞西、伊太利を漫遊せり。發足の當時は懷中只一ギニーありしのみなりしかば、巡歴中の大半は乞食にひとしく、農家に就きて笛を弄し、夕餉と宿りとを請ひきと云ふ。『廢村落』の姉妹作として併せ稱せらるる『遊子』(The Traveller)と題せる詩は、この巡歴中に結構せしもの也。同五十六年本國に歸りしが、其の後八年間は尙糊口に苦しめられ、或は化學家の助手となり、或は私塾の助教となり、又其の自白せる所によれば、アックスレーンと云ふ處の乞食仲間の醫者となりしともありとか、活版所の校正係となりしも此の頃なれど、その最も長く従事せしは筆耕職なり、即ち或は學校用の教科書、或は小兒向きの物語類、或は書籍の緒言、索引等を綴り、又は種々の雜誌に投書し、かくして辛くも口を糊せりき。支那の一旅人といふ名にて著せる『世界の一市民よりの書翰集』(Letters from a Citizen of the World)、『ボナー』(The Life of Beau Nash)及び一貴族が其子に與ふる手翰の跡にもせる『英國史』等皆此の際に出でたり。同六十四年『遊子』を出版し、同六十八年『ウェイクフィールドの牧師』(The Vicar of Wakefield)翌年更に『好人物』(The Good

Natured Man"喜劇)を作しき。此の喜劇舞臺にては失敗せしかど、報酬は五百磅を得たりき。此の前後より其の文名漸く高く、隨うて其の収入も少なからざりしが、之れを右に得て直ちに左に散ぜしが故に、窮乏依然、常に錢に役せられて作しき、『羅馬史』の如き其の一例なり。同七十年傑作『廢村落』を著す、詩名ますく高く、僅々三四ヶ月にして五版を重ねき。後三年喜劇"She Stoops to Conquer"成りぬ、好評噴々たりき。今やゴールドスミスの名譽は其の頂に達しぬ、其の交遊には名ある詩文人あり、美術家あり、政治家あり、就中博士ジョンソンは其の信友なりき。さもあれ其の薄志と放縱との爲に生計の困難舊の如く、終始書肆の奴隸と一般、屢々劣作に齷齪たりき。『希臘史』の如き、または"History of Animated Nature"の如き是れなり。千七百七十四年病没しぬ、享年四十六なりき。

十八世紀の詩人中、ゴールドスミスばかり廣く愛せられたるはあらじ。彼れは尊敬せらるべき作家にはあらず、但し愛憐せらるべき性を具せり。柔和、俠氣、厚情、輕忽、懶惰、放縱、小供らしき猜忌、名聞を好み、酒食に耽るの癖、等はれ其の性質のあらましにして、就中著きは婦女の慈と薄志となり。婦女の慈は其の生まれながら具へ

し一種の病にして、其の一生を貧困中に送りしが如きも、其の一因こゝに在り。其の貧民乞食に對するや、前後を顧ずして惠與し、爲に裁縫師の拂にすら窮せしと屢々ありき。其の逝りしや、朋友、愛讀者は更なり、貧民はた追悼惋惜しきと云ふ。又彼れは薄志なりし故に、常に浮世の束縛の堪へ難きを歎じ、靜に處りては動かんことを念ひ、動いては靜ならんことを求め、暫くも現在に安む得ざりき。サッカレー評して曰はく、彼れは明日の事を空想し、若しくは昨日の事を歎じて今日を送り、必要迫らざる限りは現在を閉却せりと。其の名作『廢村落』の如き、『ウェイクフィールドの牧師』の如き、皆過去を回想して今昔の感を寫せるものに外ならず。如上の性質に加ふるに、輕忽、雅氣、名聞等を以てす、人誰れか愛憐せざらん、また誰れか輕ろしめ笑はざらん。彼れは時の文學社會の寵兒たりしと共に笑柄たりき。さもあれ此の性の其の作に現はるゝや、美しき悲哀となり、優雅なる惻隱となり、柔和なる微笑となりき。さればレイノルズの妹某は曰へりき、『遊子』を讀めば、いかにしても其の作者を痘痕斑々の醜男子と思ふ能はずと。

『廢村落』は、

作者が日を逐うて奢侈の旺なるを見て、慨歎し、訓誡の意あり

て作せしものにて、處々に作者が經濟說ほの見えたれば、此の點に就きて或はゴールドスミスを咎めたるものあり。按ふに、此の詩をば訓誡として見ば、或はかゝる非難を加ふるも適當ならめど、詩歌として之れを見んか、經濟說の是非眞妄、豈深く問ふを要せんや。彼の詩を論ずる者は、専ら作者が田舎生活を愛する念の厚き、其の平民に對する同情の純清なる、其の同感の溢れて、或は豪商の驕奢に對する公憤ともなり、慷慨ともなり、或は窮民に對する愛憐とも慈悲ともなれる至切至誠なるを味ふべきなり。

ゴールドスミスは、其の作『世界の一市民よりの書翰集』中に曰はく、如何なる浮沈に逢ふも、如何に勞するも、如何なる所を流浪するも、再び故國に歸りて平和を得たしといふ希望は、吾れも人も有するものなり、生れし處にて死なんことは皆人の希ふ所にして、此の希望ありてこそ目前の痛苦をも暫時は忘るゝを得るなれど。蓋し再び故國に歸りて悠悠自適、以て老後を送らんの願は、平生彼れが心頭に往來せし希望なりしが如し。彼れ年齒四十三『廢村落』を作りし年、死前三年に達して、己に人生の大半を經過し、遍く浮世の辛酸を嘗め、人情の冷熱常なきを知りし時、身は倫

敦大都の紅塵中にありて、目前に生存競争の活劇を見ながら、中宵徐に往事を回想せしや、去來集散の常なく、榮辱得失の定めなくして、人事の夢の如きを感じ、人生の眞相は果たして如何との問題に撞着し、寧ろ名利を抛ちて故園に歸らん、平生の希望の、更に禁ずる能はざるを感ぜしならん。而して其の故園なるリッソイの孤村を尋ぬれば、滿目蕭條として、草笑ひ、水謠ひし昔日の俤をとめず、土地は悉く大地主の手に歸して、半は荒蕪に委し、質朴なる住民は姿をかくし、奢侈俗を成すを見る。是に於てか、舊時の故園を追慕し、質朴なる住民を愛するの情、奢侈を惡むの念は漏らすに處なく、遂に一篇の『廢村落』となりて現るゝに至りしなり。

按ずるに、ゴールドスミスは、詩學的好尚よりいへば、むしろ、アーン時代に屬せしむべき者、即ち保守的傾向を代表す。されば、其の詩律の如きも、既に一旦廢れたりしヒロイク、カプレットを好みて用ひ、彼のトムソンが用ひたりしスペンシリヤン解及び没韻律語、乃至クレイ、コリンス等の用ひたりし句格の如きは、其の排斥せし所なりき。彼れは第二期、即ち自然主義の詩壇に其の名を著しながら、その詩統はポーア一流に屬し、流麗と閑雅とを以て詩の第一義となせりき。ゴールドスミスの詩

名は近年に至り次第に沈落せり、但し、彼れが散文詩『ウェイクフィールドの牧師』ばかりは今尙廣く愛讀せらる。

散文劇(脚本)の作家として、エリザベス朝以後の有數作家たるリチャード・ブリンズリ、シェリダン(一七五一—一八一六)は、二十二歳の時『The Rivals』と題せる一の滑稽劇を作しぬ、是れ其の名を成し、はじめなり、ついで『The Duenna』と題せる滑稽劇を作し、倫敦全市の視聽を驚かし、尙引きつゝきて種々の作ありき、『A Trip to Scarborough』、『The School for Scandal』、『The Critic』、『The Rehearsal』是れなり。其のうち『The School for Scandal』は今尙廣く歡迎せらるゝ英國喜劇の絶好なるものなり。シェリダンが諸作は、一面より見れば當時普く悦ばれたりし佛の大喜劇作家モリエールの作に倣ひたるが如くにも見ゆれど、其の實はむしろ王政復舊時代の諸脚本即ちウイッチェリー等が作の美所を取りて其の醜所を除き去れるものところを評すべけれ。シェリダンが梨園詩人としての生涯は、僅々五六年間にして、其の二十七歳以後は、むしろ政治界に名聲ありし時代なり。例へば、ゴールドスシエリダンが喜劇に成功せし時代は英國喜劇昌盛の期なりき。例へば、ゴールドス

R. Brinsley Sheridan.

シエスの作には『She stoops to Conquer』あり、リチャード・カムバラン・Richard Cumberlandの作には『The West Indian』あり、アーサー・マアフィArthur Murphyの作には『Three Weeks after Marriage』あり、ハンナ・パークハウスHanna Parkhouse (Mrs. Cowley)の作には『The Bell's Stratagem』あり、つづれも佳作なりき。其の他、梨園よりいでたる作家には、彼の有名なるガリックGarrickあり、フートFooteあり(以上俳優)コイルマンColman(座長)父子あり、要するに、喜劇の上よりいへば、内亂時代の隆運に優るとも劣らざりしなり。さもあれ、當朝をして英國劇詩史中の頗る注意すべき一期たらしむる所以のものは、フランスリ、シェリダンあるが爲に外ならず。

## 第十五章 外國文學との關係

英國文學と大陸との關係——主客師弟の關係の顛倒——十八世紀の英國著述の佛國名士に於ける影響——獨逸文學に於ける影響——十八世紀末葉の風潮——個人と社會との關係——其の結果三大思潮——偽平等主義の勝利——十九世紀の思潮——平等兼差別

英國十八世紀文學の史を終るに臨みて、注意を要するは其の大陸の文學に於ける影響なり。文學上の價值よりいへば、エリザ文學こそ曾て英國の産出せし最大文

學的產物なれども、其の外國民の感想上に於ける影響よりいへば、十八世紀の英文學こそ最大効果を醸したるものといふべけれ。按ふに、十八世紀前の英文學は、直接若しくは間接に、毎に大陸の感化を受けにき。古くは、チーサーの佛、伊の作に負へりし、エリザ朝諸名家のルチサンスの風潮に搖かされ、兼ねて伊、佛の名著に私淑せりし、若しくは十七世紀、十八世紀の諸作家が佛の劇詩、詩學論、修辭論又は西班牙小説に動かされし、皆英國が弟子、即ち客にして大陸が師、即ち主人たりしとを立證す。然るに十八世の末に至りては、局面一轉し、政治上に於ても、文學上に於ても英國はやゝ師位に立ち、大陸は却りて弟座に下れり。彼の政治上の革命の如きも、英國先導して、北米擴大し、佛國響應して其の餘波全歐に及びたり。又純文學の上より見るも、ポープが技巧的詩歌は普く大陸にもてはやされ、獨伊、瑞、和の作家みな其の蹤に追隨しき。トムソンはた佛人に賞せられ、其の結果サン、ラム、バール Saint-Lambert 牛耳を取りて佛にトムソン風の一派を起しぬ。フィールザング、スモーレット等はた佛人に喜ばれ、リチャードソンの諸作の如きはルンソーに愛讀せられて、其の『新エレナ』の模範となり、延いて獨のゲーテの名作に影響せり。又

史傳の方面よりいへば、ヒューム、ギッボンの新著は佛、伊の諸家を驚かし、歐洲に於ける史傳の新紀元を劃したり。いづれも英文學史に於て未曾有の事たり。さて此の關係を語るに當たりて、自然に念頭に浮ぶ大陸の三大家あり、英文學の大陸に弘められしは、蓋し件の三家の力に因る。三大家とは、佛のモンテスキュー、獨のレッシング、佛のルンソーなり。モンテスキューが名著『方法精理』一七四八發兌中に、英國々憲を激賞せる文あり、こはロックが學説及び英國人の思想に精通せる者にあらざるよりは物し得ざるべき所なりといふ。レッシングに至りては更によく英文學に通じたり。彼れは英國の劇詩に通じ、英國十八世紀の小品文にもくはしかりき。彼れは英國文學の美を唱破せし大陸最先の批評家なり。ブルテールは嘗てシェイクスピアを嘲罵せしことありしにも係らず、また多少同じ方面に力を盡くせり。但し佛の詞客中尤も英文學の弘布に與りて力ありしは、ジャン ジャック、ルソーなるべし。彼の火の如き天才が、觸るゝに任せて溶解せし雜然たるあらがねのうちにて、最も多量を占めしは英國十八世紀の諸名著なり。彼れはホッブスに、其の他の無神論者に、ロックに、其の他の政治論者に、クラークに、リチャードソンに、或



は結構、脚色に於て、或は着想、措辭に於て、負ふ所尠からざりき。特に小説の方面より見るに、十八世紀英國小説の大陸文壇に於ける影響は著きものあり。夫れ十八世紀のはじめに於て、英國にもはやされし小説は、佛の流行小説の孱弱なる模倣なりき。當時好評ありし Roger Boyle (一六二一—一六七九死) の "Parthenissa" の如きは、彼の佛の女作家 Scudery の末流を汲める劣作なりき。然るに同世紀の半より氣運一變し、デフォー、リチャードソン、フィールディング、スモーレットの徒輩出し、所謂寫實小説及び心理小説の基礎を置きにき、而して此の際大陸の小説壇は尙依然として舊窠を脱せざりき。されば、『ロビンソン・クルソー』、『バメラ』、『クラリッサ』、『トム・ヂョンス』のはじめて大陸に知らるゝや、かなたの著作界、讀書社會、其の清新に驚き、靡然として其の好尚を一變し、延いて全歐の小説壇に於ける一大革新を招致せり。彼のスコットや、ヂューマヤ、サッカレレーヤ、ヂッケンズや、バルザックや、ツルグテフヤ、トルストイヤ、皆其の遠祖を尋ね來たれば、リチャードソン、フィールディング等に多少の血統を繋かざるはなし。

哲學上よりいふも、十八世紀の英國は、少からざる感化を歐洲大陸に與へたり。ロック、バークリー、ホッブス、マンドビル、シャフツベリ、バトラー等は皆大陸に多少の勢力ありき、就中有力なりしはシャフツベリなり。佛のデデロー、ゾルテール、獨のヘルデ、レッシング、キーランド等いづれも彼れが徒弟たりき。

さて、這般思想上に於ける大變の歴史は、到底こゝに詳叙するの餘地無けれど、せめても其の大概を紹介せんために予が嘗て他處にて講ぜし十八世紀末葉の總論を援引すると左の如し。

歐洲の思想海は、最近一百年間に於て、前古未曾有の大動搖を経たり。我が國人のみが近年の大動搖、前古未曾有の開化に驚愕せりと思ふ勿れ、彼等歐洲人も所謂學藝復興に於て一たび驚き、北米發見に於て再び驚き、佛國革命に於て三たび驚き、つゞいて最近百年間の急變の如き思想海の潮流に驚歎の聲を絶たざりしなり。彼等は且つ驚き、且つ悟り、且つ絶望し、且つ希望し、七顛八起、遂に今日の文化を致せり。就中、最近百年の急思潮は彼なたの思想海を震撼せり、恰も彼の山嶽を顛覆して江河となし、海洋を倒にして平地となせる概あり、所謂十九世紀の文物制度、即ち現世紀の諸文物は、悉く最近數百年間の産物なり、否、其の最も勢力ある諸思潮は最近百年の所産といはんも、殆ど争ふも能はざるべし。見よ、彼の自由主義や、民權主義や、社會主義や、平民主義や、個人主義や、世界主義や、國家主義や、財政の整理や、憲法の確定や、女權論や、勞力者問題や、凡そ政治上、社會上、經濟上にあらはるゝ諸精神は、悉皆當世紀の結果ならざや。若しくは學藝にあらはるゝ所を見よ、驚くべき科學

上の進歩、驚くべき哲學上の進歩、驚くべき神學上の動搖、驚くべき工藝上の進歩、彼の超絶哲學や、經驗說や、審美論や、社會學や、心理學や、進化說や、新器械や、新製造法や、寫實主義や、アートオブアートスタイル 唯 美 派や、いづれか當世紀の所産にあらざる。然り、最近一百年は歐洲の全局を一變せる前古空絶の紀元期なり。

此の驚くべき大變動は、そも如何にして起りしぞ。按ふに、近世史に通じたる讀者は、此の答を聽くを要せざるべし。彼等は歐洲の十八世紀が如何に一大革新を促しつゝ、ありしかを知れるならん、如何に十八世紀の全歐洲が腐爛の至極に沈滞して百事悉く非なりしか、如何に惡習慣が重疊して社會百般の事に累をなし、か、政治上の惡習慣が如何に固着して王侯、門閥の專横となりしか、宗教上の惡因襲が如何に殘敗して僧官等の墮落となりしか、如何に虚儀、虚式の盛行して偽善矯飾のよろこばれしか、文學の如何に擬古に泥み、彫蟲をよるこび、塗飾是れ力め、濃厚是れ事とし、ひたすら纖巧にのみ流れたりしか、如何に惡習俗が全權を握りて各個人の志望を拘束せしか、如何に虚偽が跳梁して誠意を抑へしか、如何に人工が跋扈して天然を防げしか、要するに、不正なる習俗即ち當世の輿論、輿情と、輿情、習俗に反撥せる正直なる個人が、意思との間に如何なる激烈なる軋轢ありしか、而して其の結果は常に**個人が失意**に終はり、天道はか非かの歎、世を怨み、俗を憎むの聲、如何に全歐に充滿せりしか、これらは近世史に通じたる者の、説明を俟たずして知れる所なり。

ん。所詮、歐洲の十八世紀は偽善、矯飾、沒誠實の時世なりき、即ち假面の時代なりき。政治家は表に公衆の利福を唱へながら、裏には私福是れ求め、僧侶は陽に天道の崇敬すべきを講じながら、陰には卑しむべき塵欲に耽り、言行背馳、而も恬として耻づる色なかりき。如何に當時の文學が諷刺嘲罵に富めるかを思へ、又如何に諷刺嘲罵を事とせる文學の世に歡迎せられしかを思へ。是れ豈當社會の腐敗せる好證左にあらずや。諷世嘲俗の文學を讀みて毫も發憤せざる社會は、自家を嘲けられて平然たるの社會なり、即ち虚譎に慣れて之れを怪しまざる厚顔の社會なり。彼の十八世紀の名家たるボープを見よ、スヰフトを見よ、若しくはボリシグブローグを見よ。又は轉じてルッソーを見よ。デルテールを見よ。や、降りてフィールゲンク、スモーレット、スタアンを見よ。いづれか世を嘲罵し、俗を諷刺せしを以て、其の名を一世に博せざりしぞ。しかも彼等の行爲せし跡を見るに、殆ど一人の行爲の其の言に副へりしものなし。チェスタアフィールドの其兒に矯飾を庭訓せしを思へ。ルッソー、ボープ、スタアン等の、如何に俳優に似たりしかを思へ。彼等は假面時代の兒にして、自家を諷刺して恬然たりし者なり。先輩尙然り、其の末流の腐敗は推して知べきなり。全社會の墮落はます／＼惡習俗をして其の毒を逞うせしめ、たま／＼正人君子あるも、此の惡周圍と戦うて毎に敗れ、數奇不幸を數ぜざるはなかりき。かゝる惡社會と正しき個人との衝突、より生ずる幾多の斃害は、到底看過せらるべきものにあらず、こゝに於てや、十

八九世紀のはじめより其末に至るの間に、激烈なる**社會對個人の激論**は沸騰せり、即ち「**社會罪あるか、個人罪あるか**」。罪は人にあるか、罪は習俗にあるか」といふ疑問、自然に識者間に囂然たるに至りぬ。

まづ英にありては、哲學者ロック、夙に政治及び宗教の弊害を道破し、個人が固有の自由を唱へ、其の弟子シャフツベリ、ボリングブローグ等、續いて類に其の說を敷衍し、彼の有力なる自由思想家、トランドモオガン、コリンズの徒、半無意識にして他面より之れに聲援し、ボフ、ス、井フト等の諷刺家は、其の旨意を承けて、惡習俗を攻撃せり。試に英國十八世紀の文學を繙き見よ、其の最も傑出せる諸作家は、何れも皆聲を揃へて政治組織の流弊を攻撃し、教會及び神學の惡習を非難し、偽善を罵り、謬信を嘲り、不自然と不道理とを喝破せざるはなし。而して**社會の壓制**即ち**惡習俗の最も甚しかりし佛國**に於ては、此の般の論難も竟に其の極頂に達せり。彼の『**萬法精理**』に惡制度を説破し、"Persian Letters" に惡習慣を罵倒せしモンテスキュー、嘲難家の大王と稱せられて、後の天破裂の緒を發きしザルテールの徒は、孰れも**ロック**を愛讀せし論客にして、明かに當**社會の勁敵**なりき。若しくは『**民約說**』に一世を震蕩し、『**新エレナ**』に鋭く醜俗を諷刺せしルッソー、"System de la Nature" を著し、ドルバック、『**精神論**』を唱へしエルエシオス、若しくはアテロー、ダロムベルの徒、其の他、所謂『**エンサイクローピヂヤスト**』と稱せられし徒は、皆是れ多少**社會對個人**の疑問に對して新解説を興へんと

試みし者也。若しくは『**人權論**』を著し、英のトマス、ペイン、若しくは『**政治的正義**』を著し、英のウイリヤム、ゴドフィン、其の他枚擧するに遑あらず。蓋し、十八世紀の後半は**思索討論**の時代なりき、**個人に罪あるか、社會に罪あるか**之れを明めんと力めたりし時代也。此の討論**思索の結果は、所謂人間科學**即ち**人間を研究するの學**をして驚くべき發達をなさしめたり。心理學、社會學、政治學、經濟學などいふ、總じて新らしき學問にして、就中**人間に關する者**は皆此の**思索**、**人間に芽をいだせり**。眞理を追求し、自然の状態を考察するの傾向は、すなはち此のときより盛んになれり。今日に所謂科學的精神、哲學的精神、**人權論**、**自由論**、**平等論**、**自然論**、**平民主義**、**個人主義**、**社會主義**、**信仰の自由**、**學問の自由**、**研究の自由**などいふ思想は、すべて此の間より生まれいでたるなり。而して其の結果は、すべて**社會の惡習俗**の非を鳴らし、各個人が**薄運の不當**、**背理なるを認定せり**。更に前段にいへるを總括して略說すれば、**十八世紀の後半に及びて社會と個人とが軋轢の究極せんとせしや、社會と個人といづれか罪あるか**といふ疑問起こり、自然に討論の時代を醸し、所謂純理論盛行し、其の結果、「**個人に罪なし、社會に罪あり、人間、其の物は本來善美なり**」といふ結論生じたり、即ち各個人には罪はなけれど、**惡習慣**、**惡制度**、及び之れを代表せる當**社會に罪あり**、**所詮、此の惡制度**、**惡習慣**の行はるゝ間は、**個人の幸福を得るに由なし**、**個人の權利と自由とを伸ぶるに由なし**、**惡習俗は悉く蕩擻すべし**、**惡制度は悉く破壊すべし**、**所詮、大改革必要なり**といふ結論生じ

たり。彼の革命の煽動者として知られたるテルテール及びルッソーの二人が、共にパスチル破壊前にみまかりながら、ふたりながら大革命の方に、且夕に逼れるを豫言して遊りしを以ても、此の潮流の勢ひの轉、愈なりしを推定するに足るなり。

然り、十八世紀の末に於て、歐人は皆現社會の甚だ醜惡なる所以を悟れり、當社會の厭ふべく、憎むべく、嫌ふべく、忌むべきとは殆ど衆目に瞭然たりき。情者、怯者は悄然として落胆し、強剛なる者は憤然として慷慨せり、已にして慷慨の甲斐なきをさとれり、彼等は天を怨み、世を怨めり、怨世、憎世、厭世の念は次第に絶望を促したり。人々皆迷へり、苦惱せり、煩悶せり、狐疑せり、踟躕せり。進まんか、習俗の壓制の打勝ちがたきを如何せん、停まらんか、此の惡世間に呻吟苦惱するの耐へがたきを如何せん。

就中、最も多感なる青年者流は、此の狂潮の爲に無限の大苦惱を経験せり。彼等のやゝ柔性なる者は、現在の世間に絶望せるも、且、深く世を憤りて、憎怨悲憤の念禁じがたしと雖も、到底一個人が微力をもてして、此の學的大濁流の、如何ともしがたきを意識せるが故に、苦惱常人の比にあらず。彼等は劇に所謂不能の悲劇を實演せし者なり、彼等の尙いまだ世の濁流に觸れざりしや、心清きこと雪の如く、其の物に觸れて感し易きこと、はた雪の日に融け易きが如くなりき。彼等は自家の清きをもて他の心を付度し、世は擧げて清く美なるべしと思ひき。然るにやゝ長けて世間に觸るれば、濁流又濁流、汚穢又汚穢、前後左右惡臭紛

々、其の所期にたがふこと萬々なり。彼等もと多感なるが故に、世の惡を感ずる極めて深く、激し易く、沮し易く、折け易し。彼等は自制克己の勇なし、所詮、活潑なる生活を送るに適せず、又發憤して勇進するの志氣なし、小心翼翼たり、憂心悵々たり。彼等ばもと沈思冥想の生に叶へるもの、到底濁れる潮流を排して彼岸におよぎこすの健兒にあらず。されば此の輩の現世に絶望するや、常に世を避けて閑地に退き、自然を友として山水に遊ぶ。或は詩歌の別天地に、ひとり同感の涙を灑ぎ、或は靈妙なる音楽を聽いて、しばらく塵寰の痛苦を忘る。或は畫に遊び、或は花月に遊ぶ。要するに、彼等の心は此の現實の天地にあらで、常に理想の天地にあり、即ち出世間の境にあり。英のクーパーの如き、少時のゲーテの如き、正に此の者流の代表なり。さもあれ、斯くの如き孱弱の性、いかでか惡社會の狂暴のうち、長く其の命を保つを得んや。彼等の世故に疎く俗に迂なるや、單に大世間と衝突するにとゞまらずして、また毎に其の家庭とも衝突す、蓋し家庭もまた現世間の一分、すなはち究屈なる一小世間たるに外ならざればなり。惻れむべし、彼等が狭小なる理想の天地は、たちまち此の小世間とも抵觸す、彼等は父と争ひ、母と争ひ、姉妹兄弟と争ふ、而して其の結果は彼等を人間の無宿とす。惻れむべし、多感多恨の彼等は、其の生命とする小き理想の、無慚や、到る處に粉碎せらるゝを見る。剩へ彼等が唯一の娛樂、自然を友とするの樂しみだに、彼等が世に處するに拙きため、忽ち赤貧といふ冤鬼に襲はれ、一朝忽然として奪ひ

去られたるを知る。彼等はもはや世を避けて閑地に退き、風月を愛するの特權をさへ失へり、彼等豈生活するに堪へんや。よしや衣食住に事かゝざるも、其の唯一の安居、理想の天國の壞れたるからは、彼等の生命の源は涸れたり、いかで長く世に存ふるを得んや。彼等は自殺の必要を念ふ、自殺の已みがたきを信するに至る。悲しむべきかな。嗚呼、かくの如くにして英のクーバアも自殺を念ひ、かくの如くにして獨のゲーテも自盡を念ひき。之れを世に「エルテリズム」と稱す。

而して此の悲惨なる潮流は正しく前世紀の末に於て、全歐洲を横斷して流れしなり、之れを**主觀詩人的思潮**とす。

さもあれ此の潮流は、自然に二派に分脈して、忽ち二道となりて流れたり、即ち此の詩人的潮流に添うて他の哲學的潮流ありき、そは理想の別天地に、此の現身の安宅を求めて、現世の穢濁を避けたりし點は、頗る前にいへる**主觀詩人的思潮**に似たれど、前者の感情に委ねたるとたがひて、専ら思索力に其の身を委托し、専心一意、天地人三才の講究に従事し、超然として學理の別乾坤に遊び、一は以て現世間の痛苦を忘れ、一は以て人間の究竟的運命を覺悟せんとせり。此れはた其のはじめは、動もすれば退轉して其の女々しき傍潮に混流せんとせしむ、流石に其の依頼する所情にあらずして智にありしが爲に、疑は却りて信を生じ、みづから自暴自棄の非を悟りて、多くは安立の彼岸に達せり。之れを**超絶哲學の潮流**

とす、又**客觀詩人的思潮**とし、若しは大なる**主觀詩人的思潮**とす。此の思潮と「エルテリズム」と下に語らんとする「**ローマンチズム**」の思潮とは、因となり、果となり、互に密接なる關係あるゆゑ、今引き離して此の思潮のみの例は擧げがたきも、假に彼れ此れを混同して例を擧ぐれば、彼のヘルテルの如き、ゲーテの如き、シルレルの如き、ウォグツオスの如き、近くはテニソンの如き、クラフの如き、アーノルドの如き、スピンバアの如き、モオリスの如き、若しくはフイヒテ、シエリク、ヘーゲル、シヨームン、ハウエル、ハルトマンの如き、多少此の流に浴したるもの也。彼の宇宙文學論や、唯美派 (art for art school) や、神秘主義や、萬有神教論や、厭世的哲學や、世界觀といふ觀念や、理想といふ觀念や、其の實は必しも新奇ならず、其の名必しも創新ならずと雖も、其の全歐に瀰漫せしは、蓋し、此の思潮の力なりとす。此の時に當たり、やゝ着實にして、溫和なる者は、半無意識にして思へらく、已みなん、已みなん、天なり、命なり、進まば破壊あらんのみ、停らば自殺あらんのみと。又同時に半無意識にして思へらく、政治、社會の上に改革を實行する能はずんば、せめても思想界の改革を圖らん、現世間のみを世間なりと信じて今の習慣にのみ踰踏せんは、蓋し、眼界の狭きものにあらずや。現在の社會穢しとも、一は以て十を推す可らず、過去の世間は如何なりし、萬一過去の世間にして善美愛すべきものなかりきとせんか、當來の世間の善美、豈必しも期しがたからんや。まづ吾人をして過去を檢せしめ、速に人生に絶望せんは、大早計の譏をま

ぬがれざらん、と。もとより此等のともがら、は、トめより斯くの如く自識し、さて過去を檢せしにはあらざりしが、宛に角隠然たる厭世の覺風は、世の多感兒の多數を驅りて、**回顧**の潮流に乗せしめたり。是れ英に於て、獨に於て、ばた佛に於て、所謂「ローマンチズム」の勃興せし所以也。ローマンチズムとは、後に種々に變態せしたため、一定の解釋は附しがたきも、其の當初の本質よりいへば、排擬古主義、若しくは文學的自由主義とも名づくべきものなり、即ち十八世紀の陳腐爛熟なる擬古的、文學に反動して起りたる新文學者の主義にして、其の老朽文學を喝破せし勢ひは、彼の政治的革命家の熱衷に劣らず。蓋し、文學上の虚儀式に對する彼等の主義は、幾段か激烈なる桂園派の主義なり。彼等は精神上形式上、共に太古文學は傲ふの非を鳴らし、盛に「中古文學の質樸をたゞへ、彼のありのまゝに至情を叙せる中古文學の天真を激賞し、なべての文學的慣例、あらゆる詩文上の格式を罵倒し、只感ずるまゝ、思ふまゝ、を自由に眞實に叙寫すべし」と唱へき。是れはた實に、或意味よりいへば、今の所謂寫實主義及び自然主義の先驅なりき。獨にありては、早くヘルメル、ゲーテの言動に其の影見え、シュレーゲル兄弟、チーク、ノーファリス等出づるに及びて其の全盛の域に達せり。さてまた英にありては、多く論ずることなせずして、グリーブア之れを導き、多く論辯してサリッー之れをひきぬ、モーア、ウオオツチオス、コールリッヂ等皆多少之れを助け、ウオルター、スコットに至りては、其のやゝ沈澱せる情態、即ち文學的自由主義の一變し

て純然たる文學的、回顧主義となり果てたる情態を代表す。按ふに、此等文學者の多數は、は、トめ脱兎の如く、終は處女の如き革命家者流なり。彼等ばもと此の現世間に平なる能はて、且らく過去の世を回顧せりしなれば、早晚現世間に復歸すべき筈なるを、いつしか回顧熱の奴隸となりて、ひたすら中古期若しくは他の過去の復寫にのみ従事し、例へば、ウオルター、スコットの如く、殆ど往昔に心酔して空しく封建の舊夢のみを語れり。是れしかしなから、勢の止む能はざりし所ならん。彼等は現世間の墮落と腐敗とを諦見するの沈勇なく又之れを改革するの力量なかりしかば、牛無意識にして退歩姑息し、過去に安立の居を求めしなりけり。

因に曰ふ、同くローマンチズムと呼ぶと雖も、同時に獨逸に起りしもの、及び後にユーゴーに先導せられて、佛の文壇に起りしものは、幾分か結果を異にしたり、英のローマンチズムは自由にはトまりて保守に終はりたりしが、獨のは化して愛國主義、國粹主義となり、佛蘭西のはやがて極端に走りて甚しき放縱に終はりしの觀あり、蓋し、是れ國人性の然らしめし所ならんか。すなはち彼等は文學上の大自由を唱へて、竟に大蕪雜の文學を生み出せり、こは三國相通の弊なりしが、就中、佛國に甚し、然り、滅法破格の詩文はローマンチズムの結果として、普く文壇に瀰漫したりき。是れ後に折衷主義、即ち科學的文學主義が彼のバルザック、サタン、プーヴ、コント、テーム等

に導かれて此の唯情主義、桂園派の所謂「誠主義」の一層大げさなるものに反動し、更に學理を根據として新格式を定めんと試むるに至りし所以なり。

「エルテリズム」と「ローマンチズム」と此の停退の二潮流は、其の名目の上よりいへば、重に文壇のものたるに似たれど、其の實當代の普遍的な潮流にして、苟も情感を欠かざるの徒は知らず、この間に、多少此の流に漂はざるはなかりき。尋常人にして、停流に漂へるは、只徒に女々しく泣き、又退流に漂へるは、恍然過去を回顧して、暫らく現在の汚穢を忘れ、惘々然として一時を樂めり。此れらは溫和性の徒にあらずば、慎嚴着實の徒、しからざれば柔弱無氣力のともがらなりき。前者の最美なるものは、譬へば「ハムレット」中のホレシオの如く、後者の尤なるものは、頗る「ハムレット」太子に似たり。ホレシオは温厚なれども、奮つて救世の任に當たる大改革家的狂憤なく、ハムレットは多感多才なれども、ひとり徒に懊惱するのみ、蹶然として直往し、猛然として勇進するの大我慢なく、空しく大打撃の好機をして、幾回か目前に逸し去らしむ。然るに、こゝに他の一人あり、其の名をレアアルチーズといふ。彼れや多血多感の肉塊男兒、客氣の權化、目は只脚下にあり、思慮前後に及ばず。激しては水火を避けず、怒りては暴遷を辭せず、愚狂といはば、是れ愚狂の徒、向う見ずといはば、是れ向ふ見ずの驕兒、年少氣鋭、片時も屈辱を忍ぶ能はず。當時實にかくの如き徒ありき。此れを前の柔なる性に對して剛なる性と名づけ、此の潮流に漂へるを名けて思想の進潮に

漂へりしものとす、すなはち憎世、怨世の餘り、絶望狂憤して突飛猛進せんと試みし徒なり。是れ實に近世大革命の爆裂に最初の道火を加へしもの、政治上に於ては彼の佛の *Paris* Calote 若しくは彼の「ヤコピン、山嶽」英の文壇に例を求めば、壯年の「サウジ、コールリッヂ、ウオオプチオス」若しくは「バアンス」若しくは「バイロン」若しくは彼の理想詩人、劉魂の如く叫びし「バアシー、シェリー」。

此の三大潮流は日に月に相激して、やがて全歐を震ふ怒濤となりぬ。社會は遂に敗北せり、惡世間は壞れたり、惡習俗、惡慣例、惡格式、惡制度、其の他一切の惡差別、一時に地を掃つて蕩然たりき。個人は全勝を得たり、平等主義は凱歌を奏したり、社會は無差別の社會となりぬ。貴賤平等、男女平等、四海平等、詩文平等、一切平等、平等、々々、々々。天下到る處、平等の呼びなきかざるはなかりき。あはれ、此の絶對的無差別、此の絶對的平等、あはれ、是れ健全なる思潮か。

按ずるに、所謂平等主義は甚しき矛盾の辭説なりき、所謂平等主義が、其の平等といふ假面の底に、甚しき差別主義を潜ませしは、殆ど革命前の諸制度が、平等の習慣といふ名義の下に、門閥階級の差別をたて、ひとへに或種族のみ利益せしに似たり。後者は上流の爲に、私し、前者は萬人の爲に、私せり。萬人の爲に私せりとは如何。他なし、個人がおのゝ所謂平等を名義として、私意私情をほしい儘にし、互ひに此の大世界を我れ一人の有の如く

思ひ、惡社會といふ當の敵を制し得たるや否や、忽ち其の本相を現し、相衝突し、相吞噬し、我と我と、私と私と、個人と個人と、更に激烈なる闘争を始めしをいふ。すなはち所謂平等主義は、俄然として覆面を脱し、我ればまとは個人主義ぞと名宣るよと見る間に、化して爲、我となり、利己となり、獅子の如く吼え、虎の如く荒れ、遂に一個人と化して躍りいてき。大ナボレオン是れなり。小ナボレオン是れなり。否、今の所謂政治壇の名流は、いづれか此の怪けの血統にあらざる。

嗚呼、所謂平等主義は遂に勝ちぬ、然り、個人主義を包藏せし假面的平等は勝ちたりと雖も、其の假面の落ちしと共に、第二の慘劇ははじまり、個人と個人とが吞噬せり。彼等は門閥習慣によりて建てられたる貴族的差別主義の邪曲を看破し、首尾よく其の惡差別を破壊し了れり、さもあれ平等を名とせし個人主義は、根柢に甚しき差別を寓せりしゆゑに、矛盾は忽ちに著明となり、一大軋轢はこゝに起これり。見ずや、佛國革命後の全歐の狂浪怒濤を。無慚又無慚、慘劇又慘劇。万国公法何かあらん、倫理、道德、何かあらん、唯利、唯名、唯金、唯慾。あはれ此の濁潮は、今尙蕩然たる能はざる也。

而して此の絶對的、平等主義、又の名、個人主義の弊害は、單に政治上、社交上のみとゞまらざりしなり、學問もこれが爲に獨斷に流れんとし、信仰も之れが爲に地を拂はんとし、文學も之れが爲に破格無法、浮泛猥雜なるものとならんとせり、是れ豈第二の反動を招致せず

して止まんや。果せるかな、第二の反動は起こりたり。新差別主義は此の絶對的、平等を調理安排せんと試みたり。同時に前にいへる停退の二潮流も漸く本流に戻り來たりぬ。超絶哲學の大系統は顔々相ついで倒れたり、科學は急流の如く進み來たり。進化論は暗に人間を絶望に救ひ、經驗説は大に着實の思潮を注ぎ、空理漸く排斥せられ、實驗あらためて重ぜられ、差別々々の呼びひ、四方八面に轟きたり。政事家も曰はく「時、處、人」と、社交家も曰はく「時、處、人」と、學者も曰はく「人種、周圍、時勢」と、是れ豈差別を認めたるにあらずや。又曰はく國家主義と、又曰はく國粹と、又曰はく秩序と、又曰はく實際と、又曰はく現實と、又曰はく秩序兼改進と、又曰はく理論兼實際と、又曰はく國家兼個人と、又曰はく宇宙主義兼國粹主義と、又曰はく現實兼理想と、又曰はく詞形兼感想と、又曰はく信仰兼道理と、又曰はく實驗兼純理と、其の他兼字を脱しては論ずる能はざるもの、今や幾何といふ數を知らず。是れはそも如何の現象ぞや。

畢竟するに、泰西今日の思想は平等兼差別の矛盾的潮流に漂ひつゝあるなり。曩には惡差別を打破して平等に開き、更にまた差別に戻り來たり、此の新差別と平等との間に、圓滿の調和を試み、つゝあるなり、何となれば、平等眞に尊ぶべく、差別また尊ぶべく、決して偏廢する能はざればなり。是れを歐米現在の思潮なりとす。且つ吾曹が常に彼なたの文學的作物の上に陰翳しつゝあるを認むる所なり。(下界)



## 第五編 近代の文學

### 第一章 歐洲近代の革命思潮

精神上、物質上の變動——英國社會の進歩——佛國の大革命——獨逸の勃興——思想上の二大潮流——フランス——其の畧傳——其の諸作——文致と好尚との革新——グーテ——其の特質

第十八世紀の末より第十九世紀の始めへかけて、歐洲に思想上、物質上の大革命起り、政治上、社會上の大變動を呼び起し、其の大變動の餘波として新文學勃如として興りたり。かゝる大變化の如何にして起りしかは、前章にほゞ叙べたる如し。蓋し物極まれば必ず變ず、第十八世紀に至りて爛熟に達せし文物は、其の末に及びて一轉化し、靜勢は俄然として動勢となり、引きしほりたる強弩の機をはなるゝが如く、突飛の勢ひ當るべからず、先づ政治上に於ては、自由主義大いに起り、**政治的革**命成就せられ、有形、無形の諸拘束一時に除かるゝ有様となりしかば、國民の眼界忽然として擴大し、思想も感情も急激に開發せられ、學術、技藝はた頻りに發揚し、諸般の事業悉く前代未聞の觀を呈するに至りき。

英國のみに就きて見るも、多年蘊蓄せられたりし學術研究の結果は、今や實地に應用せられて、或は蒸氣機關の發明となり、或は紡績器械の發明となり、處々の都會は盛んに之れを利用して殖産、工業を助けたり、加ふるに耕作法の進歩するありて、收穫従前に幾倍せしかば、能く劇増せる人口を養ひ、需要増し、供給加はり、輸入の額前年度に三倍すれば、輸出もまた六倍となり、生活の路隨うて開け、上流はいふに及ばず、細民はた時間と金錢とを娛樂、教育、讀書、旅行等に費すの餘裕を生じき。是に於てや、彼の新聞紙の如きも、其の始めて出でし時(千七百九年)は僅に掌大の紙面にして、當年の發刊高は諸雜誌を合して數千號にも満たざりしに、一千八百四十三年にて至りては、七千一百萬號と注したるのみか、中には尨然たる大冊も夥多ありき。諸般の事業のかゝる進歩擴張の狀にありしと同時に、嘗て小數の専有なりし諸特權は、今や公衆の有となり、町人、職工の如き、昔は我が徳川期の商工にひとしく、無學小心、只管社會の習俗にのみ盲従せりしものも、今は其の才と力とを以て任意に好位地を作るを得しかば、皆争うて社會の本舞臺に現はれ、他の名門顯族と共に優勝劣敗の活劇に手腕を試ることゝなりき。

以上は英國に於ける當代の概況なるが、此の大反動の時勢は、政治的革命の中心たりし佛蘭西に於ては更に一段甚しかりき。例へば、彼のナポレオンが部下の諸將の如きは、概して皆賤家の子なりし也。殊に千八百三十年の革命の如きは、佛國民に取りては、名譽、財寶を賭せる、全庶民が智力上、勞力上の大競走たるに外ならざりき。更に注意すべきは、社會外部の變化と共に、人々の内部即ち精神界もまた、制止すべからざる、自然の大勢によりて、著く變化せられしとなり。始め政治的革命戦争の先づ佛國に起こりしや、之れに因縁して列國各々兵を起こし、戰雲一時全歐の天を掩ひ、從來隔離せりし英、佛、以、獨は此の戦争に媒せられて相接觸し、而して相互の文明は其の衝突する毎に光を加へ、思想の範圍はた自ら膨脹し、孤陋狹隘なる個國的思想の如きは漸く跡を絶たんとせり。從來爲すなかりし獨國は、眠獅の俄然として覺めたるが如く、猛然一吼して革命的旋渦のたゞ中に突入し、社會的制度の革命を成就せる佛國と共に、**精神的革命**の主動者となりぬ。むかしは爐邊に喫烟して讀書に餘念なかりし此の質朴なる人種が、今や新思想の先達となりて、他國民の企及し得ざる深遠なる思索に従事したり。彼等が求むる所は宗教の儀禮

にあらざして其の精神にありき、作文の法則にあらざして詩美の本相にありき、脚色結構にあらざして批評法の真理にありき。要するに、絶對の眞善美を追究する傾向は彼等を経て近世の思潮となりき。

かゝる時運の大勢は合して自由主義と哲學思想との二潮流となり、一は佛蘭西に發源し、一は獨逸に濫觴し、やがて澎湃としてドーヴァー海峡を越えて英島に押し寄せたり。さもあれ英國國民の着實沈毅なる本來の特性は、堅固なる堤防となりて、しばらくは此の潮波の侵入を許さざりき、而も氾濫の大潮勢は到底長く支ふべくもあらず、蟻蝮の穴はこの水を導いて先づ文田を浸さしめ、テームの所謂ローマン派及び哲學派の二流を生じ、彼の擬古文學の殘壘を掃蕩して藝術の風尚を一變するに至りたり。

最初に此の潮流にたゞよへりしものを蘇國の農民ロバート、バアンスとす。

ロバート、バアンスは千七百五十九年スコットランドの寒村に生れき。彼れは此の天然不幸なる瘠地に於て、赤貧洗ふが如き窮迫の間に成長し、十二歳にして父の農事を扶け、十五六歳に至りては全然一個の労働者たりき。幼時に於ける、かゝる

Robert Burns.

激烈なる勞苦は、痛く其の身軀を殘害し、此の天才をして終生心臟病と不眠症とに苦ましむるの種子を醸しき。かくて其の父の老いゆくにつれて、家計いよゝゝ困難となりしかば、バアンスは人に備はれて苦役に従ひしが、運はますゝ拙くして、先づ父を喪ひ、次に戀に消望し、失意落膽の間更に幾春秋を送りぬ。多感多情にして功名の心燃ゆるが如き青年詩人が、かゝる逆境に立ちたる時の感想思ひやるべし。窮乏の極竟に心を決して西印度島に出稼ぎせんとなしける折から、會々扶助する人ありて、其の詩篇出版せられ、僅かに數ギニーの財を得しかば、辛くも出稼者となるの不幸をまぬかれにき。さもあれ滿腔の功名心は、常に其の満足を得ざるを憤りて懊惱し、彼れは幾度か其の身の卑賤なるを歎ぜり、而も不義と卑劣とは其の敢てする能はざる所、彼れは所詮器械的に労働して其の生計を爲さざるべからず。然れども詩歌は其の理想、これ將た捨つるに忍びず、こゝを以て、日々に農車を押しながら、常に其の愛する詩集を讀みぬ、就中蘇國の古謠を玩味し、夜に入れば家に歸りて破窓の底屢々これを回讀して、靜かに其の詩思を凝らし、其の詩形を琢けりき。彼れはかゝる境遇にかくの如くにして人となりしかば、後に社會に立つに及びて

富豪權門を畏敬せずして常に弱者賤者に同感し、之れを保護するを以て任どなし、且つ全力を盡くして悪習俗を攻撃し、教會を批難し、又所謂文明的生活を罵りき。其の筆鋒の鋭利なる、往々にしてルッソー、デルトールを凌がんとせり。かくて絶對の平等主義を主張し、人生の尊卑は其の位階にあらずして本性にありとなせり。其の有名人の句に曰はく、如何やうなる有様にありとも、人は人なり、美服は裁縫師之れを造り、官爵は式部寮之れを製る、所詮位階は貨幣の印章、人こそは黄金と。彼れが平等の同情は、畑の鼠、路傍の雛菊にさへ及びき、否、彼れは悪魔をすら不幸なる同僚をもて視若しくは形相の醜き豎子と見做しき。

一千七百八十五年“Jolly Beggars”を公にす、是れバアンスが傑作の隨一なり。種々の乞食の亂醉戲謔せる言動、描き得て睹るが如く、筆々躍動す、シェイクスピア以後稀に見る所の劇詩的神筆と稱すべし。バアンスが作は尙單純なる抒情詩中に一讀三歎すべきもの夥多あり、而も其の筆致は何れもよく其の天真朴直なる精神を現じ最も創新を以て勝る。按ずるに、十九世紀の後半期より古法、舊格を準繩とするに次第に廢れ、一に誠實なる自家の情感を本とする風起これり、而してバアンスの如

きは實に先づこの方向に馳騁したる隨一人なりき。彼のウィルヤム、ブレイク、ウィルヤム、クーバア等の如き亦た然り。バアンスの詩は、自由に野語、俚言を混用し、殆ど日常の會話と一般、最も嚴格なる思想の間にも滑稽の文字を雜へ、最も悲哀なる處にも間々卑俚の語をまじへたり。

以上革命思想の誘導者としてのバアンスが生涯の大畧なり。テームは曰はく、時運に先だつものは常に悲境に陥るを免れず、バアンスは實に其の人にして、時世は未だ彼れに及ばざること四十年なりしなり」と。而してカーライルは曰はく、バアンスをして若し相當の家に生れて相當の教育を受けしめば、彼れは立ちどころに英國文學の趨勢を一變せしならん」と。カーライルが此の語はバアンスを過重せる嫌あり、而も彼の時代の力を過重して、個人力を輕んむたるテームが前説の短を補ふに足るべし。バアンスは中ごろ大に名を知られて一時は好地位を得たりしかど、又忽ち地位を失ひ、貧困の中に其の生を終へき、時に一千七百九十六年、齡僅かに三十八なりき。

當時英國に於ては保守主義尙依然として勢力を有し、專制的政治も尙深くは忌ま